
Fade out

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a d e o u t

【Nコード】

N 2 7 6 6 P

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

近頃社会現象となつて久しい『点滅』とフェイド・アウト。俺の友人、蔵山をこの世から消し去つたこの原因不明の病が、俺にも訪れた。発狂したくなるくらいに死に追い詰められる俺。

だがしかし俺には詩燐とLET'S現実逃避がある。消えてしまうまでの数日間。俺は、人生を楽しむ。楽しんでみせるぜ。

やうに描いて。

超絶先輩忍者

人生相談を持ち掛けられることが最近、不況のせいだろうか以前よりも一そう増えていて、行きつけの隠れ家的BAR『どろん』にて、本日も頼りがいのある先輩として、俺に人生相談が持ち掛けられている。先輩は超絶美人として有名な冰山夏美だけど、いやー、あなたに悩みごとなんてあるのかい、つてな具合に、普段から実に幸せそうな笑顔を振りまいてみんなに幸せをばら撒いているなんていう評判を多くの人間から受ける彼女だから、悩みがあるなんて、これまで二百人くらいの人生を手助けしてあげた超絶先輩忍者の俺でも気が付くことが出来なかったよ。

近頃、結婚するって噂も聞いてたしね。しかも相手は將軍付きになる予定のエリート忍者だって言うんだから、今が幸せの絶頂期じゃありませんで？俺の知り合いクノーの56パーセントが、君に幸福の雨粒が降り注いだことに対して嫉妬の暴風雨を巻き起こしたという観測結果も出ていたらしいよ。それ程の幸福エネルギーを地表から表出させた君が、なんで悩み事なんて抱えているのか、逆に興味が湧いてくるってなものさ。

いや、まあ、そりゃそうだよな、どんなに順風満帆な航路を突き進んでいるように見える人間でも、そりゃ胸の内に一つや二つの悩みを抱えているのは、実に当然のことだよな。いやあ、人生相談に長けている超絶先輩忍者の俺がそんな当然なことを忘れていたなんて、失敬、失敬。で、どうなのかな最近、上手くいってないことがあるからこうして人生相談をしてもらいたくなつたわけなのですよ？

「聞いてくれますか、先輩……」

もちろんだ。俺は超絶先輩忍者だ。今まで二百人ほどの人生と戯れることによって、複雑怪奇なる人生のその本質を理解し、彼らや彼女らに巣食っていた猛毒なる障害物を突破するための、抜け穴の

ような道標を見つけ出してあげてきた。これによってみんなの、悩み種だった問題を解決し、苦痛に歪んでいた表情も快樂に包まれてくれたらしく、みんな今となっては人生をウフフと笑って満喫している。今の君はとても、憂鬱でそして青白い顔をしているが、しかし大丈夫だ。俺に任せれば、君の問題は解決される。

「では、話します…」

うむ、遠慮なくどうぞ。

「実は、男の子が好きなんです
へ？」

「男の子が好き、と一言でいってしまうとかなり危ない人だと思われると思うんですけど。要は性格の話で…」

ああ、なる程。つまりエリートコース真っ盛りを突き進むような大人男性よりは、子供っぽい純粋な馬鹿っぽい男性の方を趣向とする女性なのだね、夏美くんは。

「ええ。さすが先輩。理解が早くて助かります。ですから、その、噂になっている彼とは…」

結婚したいと思っていないわけだ。

「彼のことが嫌いなわけではないんです。でも、たまに彼の高すぎるプライドがうっとおしくなることがあるんです。私には家庭を守って欲しい、って言うんです。自分が働くからって。でも、私は働きたいんです。仕事も家庭も両立させたいんです。でも、彼はそれじゃダメだって…男が働いて女が家庭を守るんだって…。この間も喧嘩しちゃって。隣の部屋の人からうるせえって怒鳴られながら壁叩かれたりしました。もうウンザリ。彼の考えは少し古いと思うんです。今って共働きとか別に普通じゃないですか。なんだか彼と一緒にいると、最近、つかれるんです…顔見てるだけでもイラついてくるんですけど」

はいはい。なるほどね。なかなか重症のようだね。手裏剣家庭戦争が勃発する寸前と言った風に見えるね、話を窺う限りでは。

「手裏剣を彼の眉間に突き刺したいと思うことがあります」

穏やかじゃないねそれは本当に。つまり、彼は非常にデキる男なわけだ。だから自身に対するプライドも高い。で、プライドの高い自分のプライドをさらに高めるために、君に家庭という空間に入ってもらいたいというわけだ。

「そういうことなんですかね」

多分ね。まあ、それは男としてそこまで悪いことじゃないと思う。むしろ、男らしくて格好良いとも感じる。だけど、問題として一つあるのは、君が実に活動的な女性であるということだろうね。恐らく、このままエリート忍者の彼と結婚したならば、君は家庭を牢獄と錯覚してしまうようになるのかもしれない。

「牢獄…。否定できないかもしれませんが」

そうか。ならばやはり、君か彼のどちらかが折れるか、それか別れてしまうかのどちらかしかないよ。でも怖いのは、こうして片方が折れれば折れる程、折れなかつた方が調子ぶっこいてしまうようになることだ。彼はプライドの高い男だから、きつと意見を曲げずに君を家庭という名の牢獄にぶち込むことだろう。君が甘んじてそれを受け入れることができたとして、問題なのはその後の生活だよ。彼はどんどん調子付いていき、君の様々な自由を封じ込めて身動きを取れないようにしてしまうかもしれない…。そうなったら最悪だ。彼は天狗となり、会社でも周囲の意見を聞かない調子ぶっこき男として認識されてその内やつかまれることになるだろう。彼がそういうやつかみを受けても何の影響もない社会的ポジションを得たならばそれで仕事をクビになることもないが、そうでない場合は、彼は周囲から迫害されるかもしれない。その時に彼は情緒が不安定になつて君に八つ当たりをやり始めるかもしれない。なさけない俺を嘲笑うんじゃないやねえ！と言つてね。

ん？さすがに彼もそんなに周り見ずな人間じゃないって？んん…いやいや、人間なんてわからないよ夏美くん。君はまだまだクノ一として甘い。超絶先輩忍者の私の意見は、それなりに聞いておくに限ると思うよ。

これからも様々な相談にのってあげられることと思うよ。なんて
ったって俺は超絶先輩忍者だからね。え、なんだかもう疲れてしま
ったって？生きる気力が湧いてこないって？誰かに甘えたいけど彼
のことがもう信用できないって？あ、おい、おい…そんな、寄りか
かるなよ…こんなところで…おいおい、ダメだって…超絶先輩忍者
の俺としての意見を通させてもらうならば、こういうのはもつと別
の場所で慎みながら行わなくちゃいけないことだよ。

…ああ、わかったよ。これも人生相談のうちの一つだ。君のこれ
からの人生が明るくなるためだからな。よし、ヘイ、マスター！お
勘定頼むよ！俺たちはちよつと秘密の楽園へシュツシュツと忍者走
りで行っちゃうわ！おほほ、マスター、そんな顔しないでくれよ、
こういうのも人生相談のうちとして重要なワンシーンなんだぜ！じ
ゃ、いこうか夏美くん。君、疲れているようだから、なんなら俺が
背負って運んであげてもいいんだぜ。甘えてくれていいんだぜ。な
んてったって俺は超絶先輩忍者。

シュシュっといやつほおう！

よっしゃあアツという間に着いちゃったよ。シークレット・アミ
ューズメントにね。いやあ、軽くここで休憩つてな具合で癒される
のは実に悪いことじゃないんだぜ、つて夏美くん、ほら中に入ろう
じゃねえか、もう夜もこんなに更けてるんだぜ！

つて、もう部屋に入っちゃったよ！いやあ、なかなか悪くない部
屋だね！なんで部屋の中にメリーゴーランドがあるのかわからない
けど、白馬とかって格好良くいいんじゃない、雰囲気作りつてや
つ？じゃあ、夏美くんはメリーゴーランドの白馬にでも跨つてちょ
いと待つててくれたまえよ。俺は軽くシャワーを浴びてくるぜ！
じゃあ、またね。つて、おいおい、夏美くん。だめだよそんな焦ら
せんなよちよつと、順序つてもんが、つて、ああ、だめだつて、お
い、夏美くん、超絶先輩忍者の俺でもさすがにそれは許容できな…
…夏美くん！つて、うわあああ、すんげえ、すんげえ、つて言葉が
湧いて出てくるぜ、夏美くん、おいらはびっくらこいたあ！つて、

田舎者風というか変な口調になったけどね、焦っちゃだめだよ夏美くん。ちよつと待っててね。五分程度。

ふああ！すつきりしたよ、もの見事に五分でシャワーを浴びてきたぜ、次は夏美くんの番だぜ、浴びてきたらいかでございますう？俺はその白馬に跨ること、ちよいと白馬の王子になったつもりにでもなつて楽しんでるわ。これ、百円とか入れれば回転すのかな、ちよつと試してみようかな、って、ああ、ビックリ！え、あ、びっくり、あれ、夏美くん、あれ、何で君、夏美くんじゃないじゃん。ちよつと、詩燐、詩燐じゃん！なんで詩燐もうお前がここにいるんだよ。え、え、おかしいでしょ。そのダブルベッドにお前が転がるな。そんな薄汚れた服装じゃシャツが汚れちゃうだろうがボケ。おい、詩燐、まだ早いよ、まだ時間あるだろう。なんだってこのタイムイングなんだ、っていうか、夏美くんはどこにやったの？消しちゃったの？詩燐、これはさすがにひどくない？せつかくLEET、S現実逃避を満喫してたつて言うのに、一番のクライマックスをやり逃しちゃったじゃないかあ！って、おい、どうやって責任取ってくれんだよ詩燐！お前、お前、許さなにかんなあ、マジで！

「うるさい。とりあえず、時間切れ。あんまりやり過ぎると体に悪いんだから、もう終了です」

そ、そんなあ。神も仏もないじゃありませんか。やり過ぎると体に悪いって、まだ一発もやっちゃいないですよ。もう俺、めっちゃテンション下がっちゃってますよ。こんな消化不良のままに未来が皆無な現実に戻還したらそれこそ症状が悪化しますよ。

「ごちゃごちゃ言っていないで目を閉じなよ。もうちよつとシユシユつと、忍者なんだから事を早く進めればよかったのよ。まどろっこしい設定でごちゃごちゃやってるから肝心なところまで時間が持たないわけ。次から、気をつけなよ」

さ、最悪だ…。

俺は明日も懸命に生きていけるのだろうか。この荒波が狂う大海の中で溺れることなく幸福の楽園へといつかはたどり着けたりしな

いのだろうか。ああ、いやわかつている。病気のことを忘れたわけではない。もう夢を見ることくらいしか希望がない俺が、幸福の樂園なんてそんなところにたどり着くわけないだろ。って、幸福の樂園ってなんだよ。なんかちよつと怖えだろ。胡散臭い宗教とかにこういう言葉でできそうだろ。ああ、現実なんて糞食らえだぜ、最悪だぜ、おかしいぜ、死ねよみんな。俺以外みんな死ね。もしくは俺も死ね。世界が滅びろ。

「はい。目を閉じましたね。それでは帰還しまーす。少し胸の内側がギョっとするかもしれないので、嘔吐したりしないように気をつけてくださいねー。それでは！ 3、2、1、・・・0！」

なんで1と0の間だけ間を持たせるんだよ。まあいいや。

それなりに楽しかったしね。

ギョっときた。

『点滅』

近頃社会現象となつて話題を呼んでいる『点滅』が自分の体に生じたので、うぎやあと衝撃を受けた。ああ、まさか俺にやってきてしまったのか、と、結構たくさんの人がこの病に侵されていることは知っていたが、いざ自分が点滅している姿を現実に見ると、やはりショック。衝撃を受けざるを得ない。

『点滅』状態になつた人は、時間が経つと、ある日突然フェイド・アウトとか呼ばれているいわゆる『消失』、つまり、身体が消えてなくなつてしまふという話なのだから、慌てるしかない。死、というものが身近に迫つてきていることを実感せざるを得ない。

一年前に友人の蔵山も『点滅』状態に陥つてしまい、何か心が動揺している時や不安が渦巻いているなんていうネガティブな時に、彼の体はチカチカと点灯していたものだった。だから、

『蔵山、点滅してるけど何か不安なわけ？』

という風に周りから随分と気にされるようになったのだが、そのせいで社会で生きていくのが少し難儀になつていたようだ。『点滅』を患つた人の多くは自分の不安を周りから常に見抜かれるようになってしまふことで社会的に逸脱してしまい、精神的に負担がかかつてしまうことが多いようだった。

そんな病が何の前触れもなしに突然表出するのだから、会社でせつせと積極的に出世目指して働いていた蔵山はただでさえ忙しくて疲れていたのだろう、たまに見かける彼は非常に青白い顔をしていて、さらに目を追うことにつれて、点滅している状態が随分と長く続くようになってしまったのだそう。

そしてある日、彼は突然消えたのだ。フェイド・アウト、したのだ。当然、それ以来蔵山の姿を俺は見ること無いし、他の友人たちも蔵山を見かけることはなくなった。

彼が住んでいるアパートに押し掛けたら、昼なのに電気が点いて

いて、テレビも点けっぱなし、携帯電話が画面を開いたままに転がっていたりなどした。携帯を拾って画面を覗いてみたらメールを恋人に送ろうと打ち込んでいた途中だったらしく、『愛している』という文面を打ち込もうとしたのだろうか、『愛して』という中途半端な、しかしどういう意味合いを彼女に送ろうとしていたのかはハッキリとわかる空しい一文が画面にあった。自然と、フェイド・アウトする直前の蔵山が、涙をぼろぼろこぼしながら『愛して』という三文字を打ち込んでいたのだろうかという想像ができたものだ。

受信BOXを開いてみると、恋人から『電話、出て。お願い』という内容のメールが、受信BOXの一番上の欄にあった。どうやら蔵山は恋人からかけられてくる電話には出なかつたらしい。

着信履歴を覗いて見ると、『麗香』、という二文字がいくつも並んでいた。『麗香』は彼の恋人の名前だ。

一度だけ蔵山と麗香氏が手を繋いで歩いているのを見たことがあるが、麗香氏はお嬢様って感じで、一目見ただけであまりの眩しさに目がやられてしまうような華やかオーラを纏っている別世界の人間だという魅力感が半端無い存在だったということを実によく覚えている。その幸せそうな二人の後姿を静かに見送った俺は、間違はなく嫉妬という負の感情を感じていたものだったが、すげえ蔵山っていう風に、そういったオーラのある女性と付き合える蔵山が俺の友達であることを誇りに感じた気持ちの方が強かった。まったくあの野郎、上手くやっちゃってまあ！って感じも確かにあった。あの頃の彼は幸せに向かって一直線、というような勢いがあった。彼は、輝いていた。

だけどそんな蔵山も、もうこの世にいないのだ。フェイド・アウトしてしまったのだから。

そして今度は、俺の番らしい。

俺が『点滅』状態になってからもう一ヶ月が経過している。

いまだ家族や友人たちには、俺がいつフェイド・アウトしてもおかしくない体になってしまったということを伝えていない。だけど

突然『点滅』を始めてしまった時は、やはりショックが大きくて、一年以内には俺はこの世から消えてしまうのだろうかという、やんごとなき不安に体中隅々が犯されてしまったので、バイト先には何の連絡もしないままにバイト先で働くことをやめてしまった。コンビニでバイトしてたから代わりはすぐに見つかってくれるだろうけど、一緒に働いていたみんなには当然迷惑だっただろうな、と申し訳無さを今になってひしひし実感している。

しかしそんな事実が寝つ転がっているにも関わらず、今、テレビの目前で胡座を掻いた姿勢のままに呑気に、暖かいお茶をすすっている。

そして詩燐の寝顔を見ることで、少しだけ気持ちを和らげた。ズズ、とかわざと音を経て、炬燵の向かい側で眠りこけている詩燐の、その安眠を妨げることができやしないかなあ、なんて意地悪なことを考えて、唇がゆがんだ。そしてもう一度、ズズ、とちよつと濃い目に入れてしまったお茶を、わざと大きな音を経て、すすった。

詩燐が眠ってから、随分と長いが、いまだ起きる気配が一向に無く、真つ赤なよだれを唇の端から垂れ流しているままだ。真つ赤なよだれだから、いつも血に見えてなんだかグロテスク。そのよだれの血と見紛うのを詩燐は寝るたびに確実に垂れ流す。そのたびに、詩燐って奴が何者なのかという謎が胸でごちゃごちゃになって、恐怖とも不安ともれぬ感情に変わるが、そんなマイナスイメージを全て覆い隠してしまうほどに、詩燐という存在の魅力は凄まじいから、いつまでも一緒にいて欲しいと心底思うこともしばしば。美人というか可愛いというか。その両方を兼ねそろえている絶妙なバランスというか……。俺にとってはそれが魅力的だったりするのが、詩燐という存在だ。

血色は健康的な、麦色とも言えはいいのだろうか、太陽にぐんぐん向かっていくひまわりみたいな、見てて単純に『良いなあ』と思える健康さがある。そんな肌色をしている詩燐の髪の毛はこの世

の存在とは思えない程に艶があつて日本人形つて感じでもあるし、おっそろしいほどに鞭つて感じもする。鞭。そう、鞭みたいになつてくれそうな髪の毛なのである。

ふと、脳内で、マルキ・ド・サドが詩燐の髪の毛をむんずと驚掴みにして、その詩燐の細長い体をぶるんぶるん振り回してドMな感じで吠えている女性にぶつつけていている映像が頭に浮かんだ。マルキ・ド・サドに容赦無く振り回されている詩燐は無表情で、辛そうでもないし、かといって楽しそうでもない。ドMな女性はワンワン泣き叫んでいるというのに。何で詩燐無表情なんだよ、つて突っ込みたくなるその表情が、何だか絶望的な俺の脳味噌に、多少の刺激を与えている。ハハハ、と何だか見てて笑えてくるその無表情。もちろん、それは俺の脳内妄想だけで生じている無表情ではない。詩燐は現実に、いっつも、無表情なのだ。むつつつり、しているのだ。ムツソリーニ！違うな、ムツソリーニ！つて感じで！

見た目としては人間として実に健康的な魅力に溢れている詩燐なのに、いっつも無表情でムツソリー！つて感じなので、時たま『機械なんじゃねえか』、つて、錯覚させられる。もしくは、至極精密な作りのアンドロイドなんじゃねえの、つて感じ。そんなに無表情でいると顔面の筋肉が衰退してダメになつちまうんじゃねえのつて感じ。

じゃあなんで詩燐は無表情なのか。一切、顔つきを変化させないのに、表情筋を保つていられるのか。それについては以前に、脳味噌フル回転で、答えを出して、詩燐の整っている顔は仮面を装着しているから整つたまま歪んだり笑ったりしないのではないかという、答えを出したのだ。仮面をつけているから表情が一切変化しないというわけ。つまり、詩燐の本当の顔は、その仮面の内側に潜んでいる。潜んだまま、クニヤと笑ったり、クシヤ、と怒ったり、ぐらあ、と悲しんだりしているのだらう。

そう考えると、詩燐の仮面の内部が気になってくる。実際に、それがあのかどうかは知らないが、詩燐に心があるのだとしたら表

情は変化するはずだ。だから、仮面の内部があるのだとしたら、詩燐は、内部で一体どんな表情をしているのだろう。今は、喜怒哀楽のどれだろう、か？まあ、寝ててよだれを垂れ流しているくらいなんだから、心地良さそうな顔つきをしているのだろうか。

試しに、詩燐に向けて、ぐっ、と目力を込めてみて内側に何か潜んでいやしないか、仮面を透視して素顔が窺えたりしないものかと、やってみたが、ダメだった。

まあ、こんなことをやっても、馬鹿馬鹿しいだけだ。答えは出ない。詩燐が仮面を装着しているのだとしても、詩燐が仮面を自ら剥ぐか、他の誰かが仮面を剥ぐか、しなければ、仮面の内側は露出されないのだから。

答えが出ないと、脳味噌迷宮に意識が捕えられてしまう。それは決して楽しいことではないということを、経験上知っているので、こんなことを考えるのはもうやめようということで、気分を変えるためにお茶を、ズズ、もう一口啜ってみると、変な想像をしていたせいで時間が経過してしまったということだろう、冷めていてあまりおいしくなかった。

お茶がおいしくない程度のことでも、『点滅』のせいでネガティブな思考になっっている俺にはダメージが大きい。あつという間に、虚ろな気分に陥った。心がもやもやと全て暗闇で覆い尽くされて最終的に虫食いにされて滅ぼされるんじゃないか、なんて不吉な不安すら脳裏に過ぎる。

そんな不安に押しつぶされるわけにいかないと感じた俺は、少しでも気分を明るく出来たらなと感じる。

だから試しに、詩燐の唇の、端っこから垂れている血みたいなよだれ。

それをお茶碗で掬い取った。すぐにお茶碗に血みたいなよだれは貯まった。お茶碗の底に沈んだ赤色のよだれがトマトジュースのようになつたのを飲んでみようかと、唾を飲む。

俺のすぐ目前にまでお茶碗を近づけて、トマトジュースのように

沈殿しているものを、しばしの時間、眺めていて、これを飲んでみ
ちやおうか。いや、さすがに危ないよな、なんて。

さすがにいきなりそれを口に含んで胃に放り込むような、勇敢な
度胸は、持ち合わせていないから、まずは、ということ、鼻、を
お茶碗に近づけることで臭いがあるのかを探ってみる。すると。

ん…？ んん…？ ごほっ ごほっ、ごほお

刺激臭。アンモニアとか硫黄とかとはまた違う、例えが思いつか
ない、が、恐ろしいほどに鼻腔を痛めつけられてしまって、鼻から
喉にまで刺激がすぐに回り込んだらしくむせた。喉が焼けてる感覚
がする。随分と研磨された刺激を詩燐のよだれは持ち合わせている
もんだな！と、むせながら怒りつ、と奮えたこと五分程度、ずっと
むせ続けたというのに、詩燐は眠り続けていて相変わらずよだれを
垂れ流しているままだった。こぼれている血色のよだれが畳に染み
込んでいて最悪、としか言い様が無いことに対しても、怒りつ、満
ち溢れてきたが、怒りのあまりに疲れが出てきてしまったものだけ
らこぼれているよだれを雑巾などで拭き取る気力も湧いて来ず、と
りあえず、刺激臭が強かったトマトジュースよだれを洗面台に流し
た後に、あれおかしいなと気が付いた。なんでよだれは畳にあれだ
けこぼれているというのに、部屋内は臭くならないのだろうと奇妙
に思ったのだ。

実にいまさらなことだった。散々、詩燐のよだれは部屋内の畳に
染み込んで来たし、これからも染み込んで行くことだろう。それが
臭いを放っているのだったら、部屋が臭くなるのは当然のはずなの
に部屋は臭くない。六畳半の、特に物が置かれているわけでもない、
畳と炬燵とテレビとカーテンと、あと、ゴミとか塵芥とか蜘蛛の巣
なんていう汚物。ただでさえ最悪な部屋で、畳にはもうじつとりと
詩燐の真っ赤っ赤なよだれが染み込んでいて、真っ赤っ赤な畳とい
うあり得ない状態なのに、しかし、臭くないという事実。コップに
注いだ時にはあんなにも臭かったのに。

わけがわからない。

だけど、詩燐っていう存在自体が意味わかんないから、そんなものかもしれない。畳が臭くない理由ってのも、わかる必要はないのかもしれない。そもそも俺が『点滅』の症状を出したこと自体も意味わかんないし、何であんなに輝いていた蔵山がフェイド・アウトされなくてはいけなかったのかも理解出来ない。世の中なんてわからないことだらけなのかもしれない。

だったらコップに注いだ詩燐のよだれだけが何で臭いのかなんてこともわからないままで良いのかもしれない。所詮、『点滅』になった俺にはもう未来なんて無くて何時フェイド・アウトしてもおかしくないのだから、別に世の中がわからないことだらけだって、問題は無いんだ。ははは。社会人としてはすぐ落伍してしまうような思考だよな、これって。まあ、俺は実際もうダメなんだけど。

こんなふうに思考がお馬鹿な奴だから、何時になっても、糞だぜ、俺ってやつあ。

あ、点滅、激しくなってきた。ひえ、って感じ。タイムリミットが迫ってるって気がして怖いね。

「まじで、どうなっちゃうんだろう、俺は」

消えたくは無い。フェイド・アウトなんて、したくない！

未来が閉ざされていることに絶望を感じた俺は、真っ赤な畳の上をしばらくゴロゴロゴロゴロみつともなく転がり『点滅』なんて症状がこのままどっかに飛んでいって弾けて消えてくれればいいのにと心底願った。こんな現実、受け入れたくないと感じていた。けど、しばらく暴れまわった後も、やはり俺の体は点滅をやめなかった。相変わらずピカピカって感じ。

（ち、ちくしょう、もう嫌だもうダメだやってられるか！）

やけくそになって地団駄を踏んでしまいそうだったがそんなみつともない真似は嫌だ！

俺、大人だし！

現実逃避

というわけで、荒ぶる鷹のごとくの感情の激動を和らげるべく、気分を落ち着けてくれる存在、詩燐の寝顔を眺めたりすることに決定！

相変わらず水飴のようにとろっとしている涎を垂れ流し続けている、ムツツリーニガール詩燐の容貌をしばし眺めて気分を落ち着かせようとすると、よっしゃあ！あんなにもみつともなく荒れ狂っていた俺の激情的な波が、そして気分が、和らぐ！さっきまでどうしようもなかった俺の心は、今はもう心に大きな隙間が広がって青々しい草むらが生えているかのごとく、気分が柔軟。青空の澄み渡った快晴が、澄み渡っているかのような晴れ気分じゃないか…。

といけば都合が良いのだが、大きな隙間が広がっている心には、実際には空虚ばかりが広がっている。大きな隙間が広がっている青々しい草むらは、実際は全部枯れているのだ。根っこが枯れているのだ。根っこが枯れているということはもう終末だということだ。俺は、もうダメだったりする！

フェイド・アウトのせいだ。『点滅』のせいだ。

空虚。空虚。空虚。空しい虚ろ。虚ろ空しい。うつらむなしい。うつらむなしい鬱々空しい！

やる気が湧いて来ない…。ていうか、やる気を出す必要が無いではないか。…意味が…。ああ頭がめちゃくちゃだ。自分の死が近づいているということを意識するだけでこんなにも精神がめちゃくちゃになってしまっただなんて想像もしてなかった。蔵山もこういう苦しさの中で四苦八苦しなから消えていったのだろうか。麗香なんていう恋人がいたにも関わらず…あんなにも輝きを放っていたというのに…。ああ、蔵山、なんて可哀想なんだ！

ま、俺ももう他人事じゃないんだけどね！今この瞬間、突然、俺がこうやって頭の中でごちゃごちゃ考えたり混乱したりしているこ

とすらも、フェイド・アウトしたら出来なくなってしまうのだから…。
つつかもう、お茶も飲み干したし、詩燐のよだれで遊んでも気分は晴れないし、テレビだって好みじゃない番組が流れているからつまらないし。

することが無くて実に暇暇すぎてうつらむなむな、鬱々空しい。

だから、この、心にはどうしようもない空虚を抱えているにも関わらず肉体の方は非常に重苦しくて気だるいという意味不明な俺。その憂鬱と空虚と発狂を、ある程度、払拭させなければならぬ。狂い死にしないように、気持ちをどうにか安定させなければならぬのだ！

現実を生きるために！

炬燵に伸ばしていた足をズボツ、ズボツ、と底なし沼から引きずり出すがごとく引つ張り出した後は、腰だ。腰にはそれこそ重りが乗っかっているが、そこは勢いを付けて「フツ！」とでも言いながら、力を込めれば、腰は浮いた。

こうして直立した。詩燐の、艶のある真っ黒ヘアーを見下ろすこととの出来る視界に到達することに成功したので、次にするべきことは、やはり俺にとっては風呂場に向かうことが重要だ。

浴槽には水が浸かってはいないが、そこにはロマンがあるのだから。ふふ、向かうのだ。

俺自身にとってp o o r番組がつまらないと思ったのでテレビ画面をチャンネルでぶつつり、と真っ黒に変えた後、風呂場へとロマンを体験しに行くべく、てくてこ、詩燐をひきずりながら、向かった。

詩燐は首根っこを掴んでいるだけなのに、実に軽快に、ずるずると引きずられてくれるもので、何故ならば詩燐は、俺とは対照的にまるで重さが無い。精神が乱れて肉体がだるくなり動きたい気持ち削がれるなんてこともない。詩燐は何時だってたんぼぼの綿毛と

なつて大空を飛び回ることが出来る。昼間だって、夜の闇だって、ふわふわな詩燐は飛翔して羽ばたいていけるのだ。そんな風に低体重な詩燐だから、首根っこを掴めば、ひきずることなんて容易だった。

六畳半の部屋を抜け出る。鉄製の、年季が入った錆びの目立つドアを開ければ、目の前に広がるのは、自分の自慢の空間である、百畳ほど大広間ルーム。自慢のね、おほほほほほほほ。

俺の空虚な心とリンクするかのように、百畳ほど大広間ルームはあり得ない程にカラッポだ。何にも無い。ただただひろーい。天井も高いよ。だから天井と床を繋ぐ柱もでかい！

そして今現在、左側から差し込まれている月光の、六つの光線だけが唯一の明かりとなっている。そのほかには明かりも無いから、自慢の大理石の床は、そのほとんどは漆黒に包まれていて、光線に薄く照らされている部分だけが大理石の重厚な存在感を主張している。左側から差し込まれている六つの光線は、巨大なる窓を通して、少し屈折しつつも、百畳ほど大広間ルームに仄かな明かりを差し込んでくれている。

ちなみに、俺や詩燐の身長は長さのある巨大なる窓は、この百畳ほど大広間ルームを建築させた時に、業者に、『ゴシック建築などで使われるような派手な装飾のアーチ型にしたのです』

と注文したのだけれど、
『できるわけないでしょう』

と呆気なく、無残なほどにあつさり、最低に、情け容赦なく、バツサリと、断られてしまったから、結果的に簡易なシンプルな単純な感じのアーチ型でおさまった。それが六つ、等間隔に並んでいるけどこれがステンドグラスになっていたらどれ程美しい夜の百畳ほど大広間ルームが完成していただろうか…と、この百畳ほど大広間ルームが完成してから何年か月日が流れているが、いまだにそのことを想像すると、あーあ、ってやるせない思いにさせられる。風

呂場に向かうためにこの大広間ルームを横断する時には毎度、思うよ。あーあ。やるせねえなあ、現実だなあって。

そもそも今の現実というものが、非常に非情だ！

我が国の主であるボンボゾウラ「松山」グレンが悪いのだ。政治家同士での利権争いばかりやってるから、国の景気を回復させるような画期的かつ合理的かつ魔法的かつ科学的な感じの素晴らしい政策が発表されることもなく、ただただひたすらに、不毛な争いだ！

「最近、松山党の藤山氏が『人間は全て爆弾みたいなもので炸裂するために存在しているに限りませんから、やはりさつさとみんな爆発するのが本当は一番良いのですよ』と発言したことに対して、国民からの非難の声が上がっているわけですが、党のトップであるボンボゾウラ「松山」グレン主は藤山氏と連帯して責任を取る必要があると言えます。一国の主が責任を取る役割を果たさないわけにはいきませんでしょう。お答えください、グレン主」

「はいはい、わかりました。えー、まず、国民の皆様方を不快にさせるような発言を藤山氏が述べたことに対しての謝罪をしたいと思います。まことにもうしわけございませんでした。しかし、今回の、藤山氏の発言に対しての責任を私が連帯するという意見に関しては、それはどうか、と、という一言をいわせていただくしかありません。なぜならば、私は一国の主です。一国を治めるという役割を持っている人間がほいほいとその職を投げ出すわけには参りませんよ。会社などで、部下が不祥事を起こしたからといって上司が責任を取るということはドラマチックですがクビになったりはしませんでしょう。私には、国を守っていく、国を健やかなるものにするための役割を担っている、という部分があるのでございます。最近近は隣国がいかつい感じでぐんぐん経済的に成長していただでさえ我が国は危機！そんな危機を救うための、グレン主でございます。ですから、一人の人間の不祥事で私が責任を取って辞任などすれば、国が混乱してしまって駄目になります。あなたは、まるで政治というものをわかっていないよね。一国の主に対して軽く挑戦的な態度

あとで、覚えていなさい。なんて、これじゃ、悪役ですね。冗談で
ございます。って、こういう言葉も問題になるのですから控えなく
てはいけませんでした、うふふ、ほほ」

今思い出してみると業腹MAXクラツシュ。まったくもって不毛
な争いではないか！もつと建設的な議論というものが国のトップレ
ベルに位置する方々ならば、それが出来るのは当然ではないのか！
まったくもって、最悪だ！怒りと共にやるせなさが湧いて来て、エ
ネルギーが枯渇していくのを感じるよ！もう、こんな国なんてどう
にかなってしまえばいいんだ！グレン主だって、もう俺たち国民の
ことなど、本当は眼中にないに決まっているんだ！昔はよかつたよ、
昔はグレン主も、自分たち国民のために誠心誠意を尽くしてくれて
いたよ。いや、実際にはわからないけど、少なくとも、精一杯の汗
と涙の結晶を自分たち国民に提供してくれているという雰囲気をも
その厳格なる佇まいと紳士的な口ひげから醸し出していたものだっ
たよ！それがいまや、彼も自分の保身を優先している雰囲気という
か佇まいだ！いや、完全な主観だけれども！でも、みんな言ってる
！みんな国は駄目になったって、言ってる！まあ、いや、こんな
答えの出ないことを考えても脳味噌が迷宮入りしちゃうだけだし、
それにそんなに国のことに対して実際興味ないし！自分の生活とか
自分の幸福を得るための作業で精一杯というか必死だし！だから全
然、本当は、興味ないよ！どうでもいいよ、グレン主のことなんて
どうだっていい！所詮、俺たち一般人と何ら変わり無いってことだ
よ、グレン主もね！よし、風呂場に到着したぞ！こうやって頭ン中
で愚痴愚痴言っている内に、風呂場に通じる扉の目前にまで到着し
た！これを開いた先には、ロマンが待っているのだ、みなさんお待
たせしました、風呂場と百畳ほど大広間ルームを繋いでいる、鉄製
の錆びだらけの扉、を開きます！触るとジャリジャリしてる錆びが
不愉快なドアノブを捻って、ロマンへと突入だぜ！

詩燐をひきずりながらね！いい加減に起きろよ詩燐！床に赤いよ
だれが紐みたいに伸びきってるのが面白いね！これで帰り、道に迷

うことなく六畳半に帰れるね！ヘンゼルとグレーテルを思い出すね
！よだれは臭いから鳥が食べちゃうようなことも無いしね！ていう
かい加減に起きろよ詩燐！まあいいや、ずっと寝ててもいいよあ
なたは！勝手にロマンに引っ張って行っっちゃうからね！

LET'S 現実逃避！

風呂場セツティング

俺の風呂場セツティングはまず小さなカプセル型の薬剤を入れることから始まり、ミリグラム単位の面倒な、しかし間違いが許されない配合とかも慎重に行う。結構、めんどろ。まあしかし愚痴っていても仕方が無い。あんまり愚痴つてると『点滅』がひどくなることもあるからな。

さて。その後に、二つ設置されているシャワーを一つずつ片手で手に取ると、その二つから交互にお湯を出し、浴槽にお湯をどんどん満たしていく。我ながら奇妙なことをしている気がするものだけど、気にしないようにいつも努めている。

しばらくすると浴槽に、へへへ、いつも通りの変化が起きてきた。薬剤の配合が上手くいっていたのか心配だったが、ほのかな若草色の湯気が立ったので、薬剤の配合が成功したのだと俺は悟った。実に安心して、わずかではあるが達成感というやつが胸の内側でぐわんぐわん轟いた。それに伴って、いわゆる樹木の安らぎを連想させるような若草色の湯気に身を包まれていると、ずっと俺にべとついていたヘドロのような鬱々感情が、わずかながら空气中に分散されているような気がして心地良い。実に、心地がよいのだ。

だがもちろん、これは序章だ。LET、S現実逃避は、まだ俺の中でスタートしたばかりの事象であって、こんなものではないのだぜ。よっしゃ…

「んん…。あれ？ あ」

突然、覇気がゼロの声。詩燐が起きたらしい。

若草色の湯気を両手を広げることによって万遍無く受け止めている体勢を崩さないように注意しつつ、俺は詩燐を寝かしておいた方向に振り返った後、得意気に語る。

「何時まで寝てんだよ。ほらLET、S現実逃避と洒落こもつぜ。なんつったって今日も俺の頭はストレスでマツハに爆発寸前なんだ

ぜ。点滅のせいだ、フェイド・アウトのせいだ。そんな風にぼーっとした表情のお前にわかるかよ、おいおい、おいおい！」

自分の調子が良いことに任せて何だか頭の悪そうな喋り方をしたが、そんな俺に対して詩燐という無表情girlは眉根一つ寄せることもせず、

「ふうん。まだフェイド・アウトの時期じゃないと思うけどね」

と無関心極まりない平坦な調子の言葉を投げかけると、すくつ、と風船に空気が入れられたような軽快な起立。そして、

「良い匂いと、温もりじゃない。成功してるね、これ」

と述べてスウと鼻をすすった。表情の変化はないが、詩燐が喜びを感じていることが若草色の湯気越しに伝わる。詩燐は無表情ムツリニgirlではあるが無感情では無い。何時だってムツリの奥で何かを深く考え、そして何かを悟っていて、そして俺の未来のことをわかっているような雰囲気をつめかしたりするのだ。

「でもね？ カプセルを使い過ぎだと思うよ。私ストックとか持っていないんだから、もうちょっと控えめにLET、S現実逃避しないと、もつと後々、絶望に塗れてこれまでより激しい点滅に心身が侵された時に対処できなくなるよ。ちょっと中毒になっちゃってるんじゃないかな。カプセル使い過ぎ。ここんどこ、毎日、風呂場に来てる気がする…」

詩燐というのは面倒臭いことを言うのがうざいが、まあ詩燐の言うことは確かにもつともだと思っ。最近俺はバイトもやめたので随分と時間に空きが出来た。そうするとすることが無いので必然的に死を意識することになる。そういう時に『点滅』が生じて、六畳半の部屋でゴロゴロしていると次第に気分が落ち込んでしまい、耐えよう耐えようとは思っのだが、結局風呂場へと足を運んでしまい日に日に減っていくばかりのカプセルをドバッと躊躇なく大量に使用してしまっ。おかげさまで、何ヶ月か前に詩燐に教えてもらった複雑な調合のやり方も、失敗する回数の方が少なくなっ。最近はめっきり、若草色の湯気を出せる。

失敗していた頃はうんこ色だったのだから、成長できたということだ。

それはやはり、LET'S 現実逃避に対する依存を深めているということでもあるのだが。

「よくないのかなあ」

「まあ、今日はもうやっちゃったんだから。次から気をつけられいんだよ」

「そうだよね」

「そうそう。ああ、良い匂い。そして、良い温もり」

「うむ。…良いなあ…」

俺と詩燐は風呂場に蔓延して視界をさえぎる程になった若草色の濃霧に包み込まれた。しばらくすると、青空や草むらや樹木のような大自然の安らぎが、俺の心を鷲掴みにした。

耳を澄ましてごらん。遠くから聞こえてくるのはこれは何ていう名前の鳥のさえずりだろう、うふふ、知らないのかい、あれは白鳥だよ。え、白鳥って鳴くんですか、だって？馬鹿言っちゃいけないよ、今はそういうことが問題じゃないんだ、耳を澄ますことで聞こえて来るこの声に安らぎを感じることにそのことだけがひたすらに問題なんだよ…。ああ、とつても最高！

鼻をくくんくさせてごらん。柔らかい匂いだろう。これは何の匂いだが君は見たことがあるかい。え、匂いって見えるんですか、だって？阿呆言っちゃいけないよ、これからは忘れてはいけないよ、今覚えるんだ。この匂いは青空の匂いなさ。或いは、遠く向こう側からやってくる雲の匂いを、知らず知らずの内に君や俺は鼻ですすっているのだよ、うむむ！

目のフォーカスをギュッと引き締めてごらん。すごく視神経が締まる感じがするだろう。なんでこういうことになるのか君は知っているかい。え、視神経がギュッとする感じなんてわからない、だって？間抜けなこと言うんじゃないよ、もっとギュッとしろよ、心地よいくらいに。そうすれば目の前に大樹が現れてくれるのさ。あの

大樹が俺たちの命そのものだったんだよ。立派なあれが、俺たちの全てを許してくれるから、これからは安心して眠っていいんだぜ。やっほおう！

大樹の中に入り込んで、時間を忘れよう。『点滅』のことを忘れよう。フェイド・アウトのことなんて知ったことか。死がもうすぐやってくる何て俺には関係ない。詩燐、そうだろう？蔵山には悪いけどさ、俺はもうフェイド・アウトなんてしてたまるかって感じさあ。

内側からにじみ出るようなあの輝きが病のことなど忘却させてくれるかもしれないだろ。もしかすると無かったことにしてくれるかもしれないだろ？まるでオーラが違うじゃん。あの大樹こそが俺にとっての救世主！さあ、太い幹に一度入り込んでしまえば、時間なんて、死なんて、全てが関係なくなるさ。バイバイ現実！大樹、うえるかむ！

フィクション

右眼がわらわらしている。

「暴れんなよ、クズ！」

と、俺の右眼を宿主にしている三匹に向けて悪態を付いたが、連中はよつぽどイライラが募っているらしく、余計に俺の右眼内部は眼精疲労が極限にまで達した時の締め付けのような痛みを発した。

あまりにも痛いので右の手の平で思いっきり眼球を押さえつける。勿論、それでも右の眼球は痛みを発して熱を帯びていたが、この痛みは薬を飲めばじきにおさまるものだ。だから、普段は痛みがここまで激しくなる前に、薬を三錠ほど飲むのだが、しかし今日はちょうど薬を切らしていた。最近塔攻略に忙しくて、薬を処方してもらった暇もなかったのだ。

紅葉街道をひた走る。ちょうど季節は、秋の盛り。真っ赤な紅葉が樹から次々にハリヒラリこぼれ落ちて中を、俺は掻き分けるようにして突き進み、薬局の影がはやく見えてくれはしないものか、と願う。紅葉街道の途中に築二十年ほどと思われる薬局があったのを以前見かけたのを覚えていて、それを頼りにして俺は走っている。そういう訳で息を切らしている。

そんな俺の頭の中に、三匹どもの声が響く。

『おいこらあ！ 右眼ん中いい加減に狭くなってきたぞゴラあ！』

お前は俺ら怪物三匹をこんな狭いところで殺しちまう気か！ 化けて出るかな！ いいんか！ おい、化けて出るぞ、マジだぞ！』

『さすがの私でもこの狭さには辟易だというもの。もう三匹全員汗だくですよ汗だく。言っておきますけど私たちがここで圧死したらあなたの右眼も光を失うことになるんですよ。わかっているならさっさとしてくださいよ！』

『万物の流転はすなわち僕の衝動。感動ではなくて衝動だ。その衝動の満ち干きが調子によって変わるのには生物として当然の変動だと

しても、しかしこの狭き右眼のルウムでの惨状をあなたさまは理解しておりますか。万物の流転はすなわち。地獄の門よ、我が主のために開きたまえ』

個性豊かな三匹である。こいつらは元々野生の怪物で、それぞれが地方で名乗りを上げていた猛者どもだったが、この世界での俺は才能が半端なく満ち溢れているので、三匹を右眼の中に閉じ込めて配下にしたのだ。追い剥ぎとか妖怪とか雑魚怪物などに襲われた時には右眼から飛び出してもらい、俺の指示に従って戦ってもらおう。はじめの頃はなかなか言うことを聞いてくれなかったが、力を追い求める猛者三匹は、次第に、俺の指示に従ってコンビネーションプレイをすると敵を華麗に倒すことが出来ると知った。

俺の指示は一切無駄がない上にトリッキーさもある柔軟かつ剛胆な指示だ。ちよつとした敵の隙も容赦なくガンガンガンこれでもかこれでもかと突つつき、あつ、て敵が驚いた頃にはもうそいつの息の根は止まっている。

華麗で柔軟で剛胆な俺の指示。これによって三匹は俺の能力を認めざるを得なくなったので、それ以来はすっかり協力的な姿勢になった。今現在は薬を切らしているせいで右眼内部が混乱してしまっているが、普段のこいつらはもう、怪物って感じではなくペットって感じである。もう俺の華麗かつ柔軟かつ剛胆な指示が無ければ生きていけないってなくらいに俺の配下である。

最初にわめいた血気盛んな奴はトカゲ野郎という見た目。次にわめいた理知的なやつはキツネ野郎といった見た目。最後にわめいた奴はカオスって感じのキメラ。こういう風に覚えていただければ、俺の右眼に住んでいる三匹の大体のイメージが浮かんでくれたことと思う。

よし説明終了！薬局も向こう側にようやく見えてきたぜ！ちやっちやと薬もらって、再び塔攻略に戻るとするぜ！いやあ、わくわくしてきたあ！

『うるせえ。狭すぎて、吐き気がしてきた』

『頭痛もしますよ。早くしてくれないと本当に全滅しますよ。あなたそれでいいんですか。私たち三匹が死んだらこの世界で生きていけなくなりますよ、はやくしなさい』

『我思う故に我ありつて言葉知ってる？ 僕は力オスなんかじゃない。むしろガラパゴス諸島』

まったく焦りすぎだよお前ら、怪物が弱音を吐くんじゃないよ、みっともない。という風に呟きながら俺は『薬局in紅葉街道』の自動ドアをオープンさせて、どこの薬局にでも漂う、漢方の濃ゆい独特な匂いに包まれた。

「ようこそ、紅葉街道薬局へ！ 様々なドラッグを取り揃えていますよ」

ふうん何だかどつかで聞いたことがあるなあ、と思って受付の人を見たら看護服に身を包んだ詩燐だった。何だよ詩燐まだ始まったばっかだよ邪魔すんなよ、って言ってやりたい憤りに駆られたので、実際にそうやって怒鳴りつけた。

「おい詩燐！ 邪魔すんじゃねえよ！ まだ俺のLET、S現実逃避は始まったばっかなんだよ！ わかってんの？ お前、わかってんのかマジで！」

平然としたもので、詩燐はわざとらしく、

「なんのことでございますでしょうか。クレームなどは一切受け付けておりませんので、ここは一つお引取り願いたいのですが…他のお客様の迷惑になりますので」

詩燐が手を、すい、と出した方角に振り返れば、明らかに堅気では無いと見受けられる方々数人が足を組みながらチツ、チツ、と爪楊枝で歯に付いているカスを取り除いていた。目付きの悪い、スキンヘッド大柄男はサングラスをかけているが、実にそれがヤクザとして様になっていた。他のお客様たちは明らかにヤクザだったのである。

勿論、この世界での俺は怪物を右眼に三匹を封印させているほど

の実力者なので、あんなヤクザ数人など相手にならないしそもそも薬局に入った時から視界にすら入れなかった。だがまあ、ここはおとなしくしておいた方が良さだろう。ヤクザはともかく、詩燐に下手に逆らえば、俺はLEFT、S現実逃避を強制終了させられて現実へとCOME BACK！されてしまうのだから。

「おい、マスター。おい何ごちゃごちゃ考えてんだよ意味わかんねえな！ もう俺ら限界だつてさつきから言っただろうが、おい」
「マスター。私の苦しみがあなたには理解できないのですか？ こちらの惨状が想像付かないのですか？ 早く薬をもらいなさい。さもなければあなたの右眼眼球を無理矢理爆破するという手段を講じることも考えなければならぬ」

「スマイルがあることによって苦しみがある。だが主の苦しみと僕の苦しみは同一線上に存在すると虚偽して真実は一つ。あなたは残酷者だ。未来が实际的に在るままだだと思つな。本質的なわが怒りがそちの精神を崩壊させることも不可避となるぞ」

ああ、もう、わかつてる！ わかつてるけど詩燐には俺は逆らえないんだつて！ そこんとこの事情をわかつてくれないとか勘弁してくれよ！ ほら、みんなあのヤクザ者を見てごらん。あの鋭い目付きはどうみてもマトモじゃないよ。ただの人間だと思つて甘くみちやいないんだ。あいつら背中に龍とか虎とか飼つてたりしちゃうんだよ。時には体の余す所無しに全身に怪物を飼育している奴だつているんだ。いくら地方で腕を鳴らした怪物くんたちと言えども、彼らには勝てないよ。ほら、右眼眼球はもうはちきれんばかりに痺れるけど、激痛だけど、もうちょっとだけ我慢してみよう。きっともう少して、あんな詩燐とか言う糞KY女よりは存在として百倍ほど偉いお医者さんが颯爽と奥の部屋から出てきて一目俺の右眼眼球の惨状を見るなり、

「こ、これは…！ よくぞここまで耐えましたね、そんなあなたにはすぐにお薬が処方される必要があります。即効性ですからすぐに効果が出ますよ。いやー、本当によく頑張った、感動した！」

とか言ってみつちや爽快なお薬を出してくれることだろうよ！

『夢のようにすぐくきくおくすり』みたいな名前の奴。

「ヤクザさん。お薬の用意できましたー」

「はい」

サングラスでスキンヘッドという風貌のヤクザが立ち上がった。

彼は和服に身を包んでいて、さらに身長が明らかに190cmを超えている。カツン、カツン、と下駄を鳴らしながらゆらゆら揺れ歩いていき、無表情の詩燐からお薬の入っているであろう袋を手渡された。

「ヤクザBさん。お薬の用意できましたー」

「うっす」

「ヤクザDさん。お薬の用意できましたー」

「どうも」

次々にヤクザたちは詩燐に呼ばれてお薬を受け取っていく。さっき俺が妄想したような百倍偉いお医者さんなど現れることはないが、しかしとても早いペースで俺より先にいた連中にお薬が渡されていく。彼らは皆、満足気な表情のまま、薬局を出て行った。自動ドアをオープンさせて。

ヤクザCさんは今、世界のどこで何をしているのだろう、なんて妄想をすることで右眼球の痛烈なる痛みを忘れられはしないものかと思いつながら、それから十分くらいの時がすぎた。

いまやもう怪物三人組は俺に愚痴をこぼすこともない。

断末魔とでも言うかのような痛烈なる叫び声をずーっと炸裂させるばかりとなっていた。

この断末魔の叫びが途切れた時、俺の右眼球もブツ潰れて使い物にならなくなるのだろう。

何をやってるんだ詩燐。俺はもう耐えられない。ヤクザCさんはどのようにして極道の世界から足を洗って堅気の世界へと飛び立ったのか、という妄想をもう五パターンくらい生成してしまったよ。どれもこれもBADエンドだったよ。最悪だよ俺の脳味噌。もうち

よつと幸せな終末をヤクザCさんに迎えさせたかったけど、五パターン全部がBADエンドだったよ。

最悪だよ俺の脳味噌。

そんなことを思っていたその時だった。

俺の脳内でカオス野郎が『嫉妬ッ！』とか叫んだころのことだった。

看護服に身を包んでいる詩燐が、不自然なことを口から吐いた。

「お待たせしましたー。…ヤクザCさん。お薬の用意できましたよー」

え、って思った。俺は慌てて周囲を見回したが、やはり誰もいないし、誰かが声に反応して動く気配もない。慌しく動いたのは、俺の首だけ。それなのに、詩燐はもう一度言った。

「ヤクザCさん？ お待たせしましたー。お薬の用意ができてますよー」

無表情で同じ内容を繰り返す詩燐はアンドロイドを俺に思い起こさせる。少し不気味だ。

俺は、はぁ、とため息を付いた。静まり返っている薬局にそのため息はよく響いた。

おそらく何かしらのバグみたいなものがこの世界に生じてしまったのだろう、と思った俺は、立ち上がって、詩燐にそのことを伝えてやろうと思った。そうすればバグは修復され、ヤクザCさんという、ここにはいない人物を、詩燐が呼び続けることも終わりを告げるだろう。

そうして俺は、実際に立ち上がり、「詩燐」、と相変わらず無表情のままの彼女の名前を呼ぼうとした。だが、詩燐の名前を呼ぼうとしたその瞬間に、俺は喉を詰まらせた。

詩燐が『誰もいない空間』に薬の入っている袋を差し出したからだ。

その瞬間、俺は右眼眼球に一度たりとも絶えることのなかった激痛のことを忘れた。

そしてそのまま、『空気が持ち去っているかのよう』、薬の入っている袋が、薬局から出て行ったのである。自動ドアもしっかりと開いた。薬の入っている袋はすーっと何事でもないかのように開いたドアを通過し、紅葉街道へと消えていった。

俺はしばしの間、口をぽっかりと開いたままだった。ヤクザさんは透明人間だったのだろうか、とふと思って、唇が自然と歪んだ。何だか力が抜けてしまったので、ぼすん、と椅子に腰を下ろした。そして名前が呼ばれるのを待った。

右眼球の痛みが今まで忘れていた分を取り戻すかのように再び熱を戻した頃になって、ようやく俺の薬が詩燐から手渡された。

「お待たせしました。どうぞ楽しい一時を、お過ごしくださいね」
無表情のくせに声はやけに可愛らしく作っている。だがそのことについて悪態を付いている暇なんて無く、俺は渡された袋をすぐにガパツと開き、中にあるお薬をザラザラと口に含み、すぐ横に設置されている水道の蛇口を捻って、流れる水を器用に飲んだ。それによって薬も飲み込んだ。

たちまちに効き目が現れた。約一秒と言っても過言でないかもしれない。今までの痛みはなんだっただ、って言いたくなるくらいに、薬の効果は劇的だった。

こうスッキリさせてもらったのだからお礼くらいは言っておこうかな、と思ったので、詩燐の方を見たが、詩燐は神隠しに遭ったかのように、忽然とその場から姿を消していた。

薬局には、もう俺しか残されていなかった。

もちろん、さっきのヤクザさんのように、透明人間がいる可能性は否定できないが。

いや、さっきのが透明人間のなした業かどうかも、わかりはしないが。

『いやースッキリしたなあマスター。右眼はすっかり健康を取り戻したぜ』

『これからもどんどん敵を倒して行きましょう。私たちの道を邪魔

するものは、全て敵です』

『我ら一蓮托生。世にはこびる跳梁跋扈どもを喰らい尽くし、悪鬼と呼称されるのも素晴らしい経験だと、笑顔で咆哮。サプライズ・サンライズ・吃驚』

三匹の言葉に適当な相づちを打ちながら、俺も薬局を後にした。

透明人間のことも詩燐が看護服を着ていたことも何故三匹の怪物を右眼の奥で飼うことが出来るのかも全てはどうでもいいことで、そして、気にしないでいいことだ。何故ならここは架空の世界で、夢の中のようなものなのだから。

だから俺は、紅葉街道を歩きはじめたのだ。

だけどスキップは

『飯が食いてえ。どっかに肉落ちてねえかな』

『肉が道端に転がってるわけないでしょう。ていうか肉なんて食べる必要はありません。草を食べなさい。そうすればあなたも少しは頭の作りがまともになるんじゃないですか？』

『なんだとこの野郎！』

『双方の意見を挿入された我が脳内は煩わしさに犯されている。その犯行は罪で罰を受信することを要請。我は注文する。黙れ』

『おめえが黙れ！ このキ ガイ野郎！』

『言葉を選びなさい。脳筋』

『ああ！？』

『主よ。我らの憂鬱を沈めたまえ。救世主として降臨せよ。その時我らの希望はきらめく』

三匹のうるさい雑音をカットした。ぷちっと。

『……！』

『……』

『……！』

『……』

『……！』

『……』

『……』

さつきまで耳鳴りが起きるほどにうるさかった三匹の喧嘩らしき雑談が、ほとんど聞こえなくなった。ふう、とため息をついた俺は、道端に積もっている紅葉を一枚手に取り、目にまばゆい真紅の美しさをしげしげ眺める。気に入ったので懐に二枚ほど、形の特に整っていた紅葉を仕舞いこんだ。

塔攻略に向かうための、その道中。いわし雲がぶかぶかと浮かんでいる。

紅葉街道は長々と続いていて、歩いている限りだとまだまだここを抜け出そうにも無いが、右と左、両側に佇んでいる何本もの木々が生やしている葉のおかげで、目が何時になっても退屈しない。

自然とは素晴らしいものだと言認識させられる。風はひんやりと冷たいのに、心はどんどん休まっていく。何か失われていたものが充足していくような気持ちにもさせられる。大都会に疲れてしまつて仕事を止めたくなくなつた人間はここに訪れれば後一年くらいは働けるようになるのかもしれない。実際のところは知らない。

だが通りすぎる人間の大概は、殺風景な道を通行している時には見られないたるんだ眼、たるんだ口元をしているのだから、事実、自然というものは人間の心をゆるゆるにしてしまう効能を持つているのだろう。きっと今の俺も、彼ら通行人と同じようにゆるゆるな顔つきをしているに違いない。と、思つて口元辺りをさすってみると、無精ひげが生えていた。ジヨリつていやがる。

顎に生えているジヨリつてるのを手で擦ると気持ち良いような気持ち悪いようなという微妙な触感が生じる。ああ、嫌だなあジヨリつてる俺の顎嫌だなあ、と思つていけると、突然ジヨリつてる感じが顎から消えて無くなつた。俺の願望に則するために、顎ひげのジヨリが消え失せたのだ。

詩燐がやってくれたのか、それとも俺の意志のおかげか。それはわからないが少年のような産毛すらもない顎になつたことに少し違和感を感じる。

そんな違和感と格闘しながら紅葉街道を、ちょうど半ば辺りまで歩いた。さつきからぶかぶか浮かんでいるいわし雲は相変わらずのままに、少し陽が傾いてきたらしく、空が暁に染まり始めた。カラスがどつかで空しく鳴いている。いわし雲の影が黒ずんだ。

その時だった。

「ねえ。そこのおっさん、ちょっといいかな」

背後から声を掛けられた。甲高い声。振り返って声の主を確認する。それは、顔の良い若年の少年だった。大人を小馬鹿にしている

ような雰囲気かじみ出ている生意気そうなのが伝わってくる。俺は、少年に良い印象を抱かないまま、「なに？」と言った。少年は小生意気な表情を変えないままに、こちらに歩いてきて、何をすることもりなのかと俺はいぶかしむ。

「これを受け取ってもらえないかな。プレゼントと言っわけではないのですが」

手に持っていたそれを少年は俺に手渡した。「何これ？」と問うまでもなく、手渡された物は紅葉の首飾りだった。首飾りと言っても、ワイヤーで葉を繋いだだけの、子どもらしいと言えば子どもらしいとも言える、首飾りだった。

「向こうに居る奴から剥ぎ取ったのさ。倒したのは僕だけど、おっさんあげるよ。そんなの、いらぬしね」

随分と生意気な奴だったから、俺は心の奥底でこいつを罵倒してやりたいと炎を燃やしたが、面倒臭いという思いも勿論あるので、適当に相づちを打ってから、「いや、いらぬ」と言って首飾りを少年に返した。だが、少年は唇の片側だけを引きつらせているという卑屈な微笑を浮かべると、「もう受け取ったのですから返却は不可能ですよ」とムカツクことを言っってきたのだった。

「そもそも、誰から剥ぎ取ったんだよ。言ってみなよ、小坊主」

俺は少年を見下しながら問うた。すると少年は薄く笑っしてから、「向こうに倒れているあれですよ。見えないんですか？」

と言っただった。俺は目を凝らした。すると、何故俺は通過した時に気が付かなかつたのだろうか、街道のど真ん中に、羽が生えた馬、みたいなのが寝っ転がっけていて何枚かの落葉を全身に被っていた。俺には馬が生きているのか死んでいるのかの判断もつかなかったが、目の前の幼い子どもが怪物の一種を撃退したという事実には驚く。まあ、架空の世界だからそんなことがあってもおかしくないだろうが、フィクションの世界にはフィクションの世界としてのお約束があるもので、なんでもアリというわけではない。フィクションだからといって無茶苦茶をやってしまえば、結局その先に

あるのは白ける空気に違いはない。少年が怪物を倒してしまつたのでは怪物三匹を携えている俺の能力にも箔が出ないではないか。まあ、羽が生えている馬なんて怪物としては三流レベルなので、まあそんなに問題は実際には無い。

「しかし……」

俺はぼりぼりと頬を搔いた。少年の殴つたらすぐに陥没してしまふような肌を見つつ、渡された紅葉の首飾りに注目した。すると、ラメのような細かなキラめきが葉に付着しているのに気が付いた。だから俺は、頬を搔くのを止めた。目がそのラメに縛り付き、少年に対する怒りが胸を焼いた。

俺は大きなため息を付く。

このフィクション世界の少年はとんでもないことをやらかしているのに、己でそのことに気が付いていない愚か者だ。

「少年。君が殺したのは怪物じゃない。この紅葉街道の彩りを形作る聖獣。それをお前は、馬鹿なことに、ぶつ殺してしまつたんじゃねえの？」

疑問系で問いかけたが勿論向こう側で怪物と間違えられて殺された聖獣は横たわっている。あーあ、なんてこつた、なんてことをこの少年はやってしまつたんだ、あーあ、とか胸の内でも悪態を付きながら、俺はラメの入っている紅葉の首飾りを道端に捨てるわけにはいかないことにも気が付いたので、自分の首にそれを引っ掛けてから、もう一度いやらしく追求した。

「少年。多分、なんだけどお、あの怪物は実は怪物じゃなくて、あれ、聖獣だと思つたよね。聖獣って何なのか、ママンかパパンに教えてもらったことあるでしょ？ あの聖獣って奴は天然記念物みたいなもので人間にとつても宝なのよ。そうつまりこの世界にとつてはね。しかしそれを君は殺してしまつたんだ。そうか、殺しちゃつたんだ…そつかあ、殺しちゃつたんだあ…殺しちゃだめなのになあ……」

空を仰ぎながら少年のミスを解説してやった。少年がどんな反応

を示しているのか確認するためにチラッと少年の方に視線を向けると、哀れ、少年は顔中青ざめてしまっていて、己のしたことが間違いであったことに気が付き始めたらしい。少年は俺にこう問うた。

「あの…。聖獣ってのはフィクションな話で。伝説的な話で。実際に存在するものではないと人から伺っていたのですが。え、僕の倒したあの怪物が、その伝説の聖獣だっていうんですか？」

彼の瞳を見ると半泣きであることがすぐさまわかった。うるっ、としていて多少の充血もしている。そんな彼の額に紅葉が一葉。首をぶんぶん振ってそれを振り落とす彼は何だか哀れだった。ああ、可哀想だな、と思いつつも俺は大人の役割として事実を伝えなければいけない。ふふ。

「何度も言わせないでくれ。君が青白くなったその想像通り、あれは怪物ではなくて聖獣だ。聖獣は世界を構成するための柱だ。巨柱だ。どうして少年である君が聖獣を殺すことが出来たのかはわからないが、事実、この首飾りにはラメのようなキラめきがある。これは聖獣が体から分泌する粒子によるキラめきだ。ああ、君は大変なことをしてしまった。このままではこの街道に生えている紅葉も全て枯れ果ててしまうことでしょう。ああ、なんていうことだ！」

俺の大袈裟な叫び声に合わせるかのようにして、少年は地面にへなへなと腰を砕いた。すこしやりすぎただろうか。だが、このようにして痛い思いをさせなければ少年というのはドンドン付け上がって手の付けようの無い不良になってしまふのだから、決してこの行いは間違っていないのだ。

地面に涙をぼろぼろ零している彼に、俺はさらに追及を加えた。「今まで人の心を休ませる空間としてこの紅葉街道はあった。だけどこれからは枯れ木街道として、空しい場所として、人々の心を荒ませる空間として認知されるように変わっていくのだろう。…ああ、悲しいね。これからは怪物が栄え、人が通るには細心の注意を払う必要も出て来るのだろう。ああ、悲しい。少年よ、君は責任という言葉を知っているか？ ああ、少年よ。君はこれから責任という二

文字に追われて生きていく、忙しない人生を送るようになるのかもしれないな。ああ、少年よ、悲しいね。ああ、とつても悲しいね」
ここまで言われた少年は、大声で泣き始めてしまった。うわああん、という漫画のような泣き方が少しこちらの笑いを誘ってくる。顔も真っ赤に腫れてしまっている。美形な少年だっただけに、その崩れ方はものすごい。なんつうか、崩壊して水が流れ出したダムみたいだな。すごい勢い。

さすがにもうやめてあげたほうがいいか、フォロー入れとくか、とか俺が思い始めるくらいに少年の泣き声がすごくなってきた頃、脳内でキツネ野郎が騒いだ。脳内から聞こえて来る音声はシャットダウンしてたはずなので、無理矢理に喋りかけてきたということだ。
『さすがにひどいではありませんかマスター』

説教をはじめると霧囲気が濃厚だったので、もう一度ポチッとシャットダウンした。

「……………」
ぶつぶつと何か言っているのが聞こえるが、シャットダウンしたから何言ってるのかまったくわからなくなった。これでよし、説教なんか聞いてられるか、俺は現実逃避を楽しむためにこの世界に来ているんだぜ。

だから俺は、(そうだと何を遠慮する必要がある。この現実逃避ワールドの中なのだから)と少年に痛い目を見せてやっても良いのだ。まったく、生意気な餓鬼を教育してやらねばならんのだ(と思っただけで再び少年に何か言ってると思っただけで足元を見ると、うわ、何時の間にか彼がいない。忽然と消えてしまっている。泣き声もそっぴいや止んでるし。

周囲をうかがうが紅葉が真っ赤な景色が広がっているばかりで人影は一つも見えない。向こう側で三流怪物と見た目がほとんど変わらない聖獣が死んでいたりはするけれども。

「おーい、少年。どこにいったー」

逃げ足が速い。少年の影はどこにも見当たらなくなっていた。さ

つきまであんなに大声で泣き喚いていたのにこれだ。これだから餓鬼というのは、まったく、説教してやらねばならぬのだ。心底そう思うぜ。

「おい。怒らないから出ておいでー」

しばらく少年を探したが、何の音沙汰も無い。不思議と人が他に通ることもない。静かな街道。葉が落ち、ポツンと、向こうで横たわっている聖獣の死体。時々、真っ赤な葉が落ちる。空にはいわし雲がある。

静かなものだ。

「……………」

聖獣の亡骸へと歩を進め近づいた。近づいて見ても聖獣は三流の怪物にしか見えなかった。だが首飾りにラメが付いていることから察するに、ここで屍になっっている奴は聖獣だった者に違いはない。ならば何故、この聖獣は三流の怪物の姿をしているのだろうか。羽の生えた馬なのだろうか。

まあ、チート性能を持つ俺ならば答えを出すのは簡単だった。

「……………はあ！」

俺は左眼に力を入れることで、血液を黒目に凝縮させた。俺の視界が真っ赤に染まり上がり、紅葉などは赤を通り越して何だか真っ黒に見えるくらいになった。そう、これが俺のチート能力その二。この状態のまま横たわっている聖獣を見れば、ふふん、彼の正体がアツという間に明らかすぎて屁をこきたくなった。

カメレオン。一言でいえばそういうことになる。この聖獣は擬態を得意とする輩だったのだ。だから羽の生えた馬などというたいしたことのない怪物に俺の視界からは見えていたというわけである。ほかの一般人からも。

だが俺のチート能力その二、『全てを暴きし左眼』の能力からすればそんな擬態能力などは赤ちゃん能力といつてしまえる。おかげさまでこいつの正体も暴いたので、俺は次の段階に進むことにしよう。何故、あんな少年に聖獣ともあろう者がやられてしまったのか

は知らないが、細かいことはどうでもいい。せいぜい、亡骸を俺の為に利用させてもらうとしよう。

「開眼ッ！」

俺は左眼からドレインビームを発射した。和訳すると吸収光線。ビカーッ、と全力で能力を発射してみせたぜ。ほら見てくれよ、どンドンどンドン擬態状態が暴かれていき、こいつの正体がカメレオン聖獣であったということが公衆の面前で露わになったというわけだ。

俺の攻撃はこれで終わりとは当然違う。まだまだ続く。ドレインビームに照射されて正体が明らかになったカメレオンを、光線によって宙に浮かす。そして浮いたままの状態のそいつに、俺は右眼すらも開眼してみせるのだ。

「開、眼ッ！」

右眼POWERが全開である。これによってどうなるかということ

……

『マスター、最高だぜっ！』

『いやほおおおっ』

『我が主よ。我、感謝の嵐を巻き起こしたく願う』

三匹が喜んでくれる。ハッピーな気持ちになってくれる。

それにともなって、俺の気持ちもハッピーになる。

みんなが幸せなら、俺も幸せ。ということ。

カメレオンの肉体が、尾のほうから繊維化して行き、糸もしくは麵のように細まっていく。

その細まっている糸もしくは麵らしき繊維が、俺の右眼へと向かってきて、他人から見たらめっちゃくちゃ痛々しく見えるだろう、躊躇なく右眼眼球へと入り込んでいく。

『マスター、マスター！』

『いやほおおおっ』

『我が主、我が主！』

みんな感激している。俺も全身に力が湧いてきて元気が出て来た。

繊維になったカメレオン。それが全て右眼球に入り込んでくれた頃には、俺は万能感を手にしていた。何をやっても上手くいくような気持ちになった。HAPPYだった。

聖獣を取り込んで栄養にしてしまうと、人生が何もかも上手くいくような気分になるから良い、ということが判明した。

聖獣がいなくなった紅葉街道はこれから無法地帯と化していくだろうが、仕方無い。

聖獣はみんなの夢と希望とも言われるのだが、殺したのは俺じゃないし、あのまま放置していても亡骸が腐敗するだけだったのだから、俺は悪いことはしていない。

聖獣は俺の体中の一部となり、ある意味では生きている。

だからある意味、俺が聖獣なのかもしれない。

まあいいや。俺が聖獣になるのが最強になるのがどうでもいい。

塔攻略が俺にとっては大切なんだ。

塔の最上階には『夢のような悦楽』が待っているという話だ。

夢のような世界の中の夢のような悦楽とは、一体どのようなものなのだろうか。

かなりわくわくしている。胸が躍動している。

万能感に満ち溢れている俺は、スキップで紅葉街道を駆け抜けた。途中、棺桶を引きずっているやつれた細ましい男とすれ違ったが、そいつに幸せを分けてあげたいと思うくらいに俺は絶対調だった。

だけど俺にとっては塔攻略がまずは優先だったので、いやーワルイネ、と口をすぼめて呟いてから、そのすれ違う男に手を振った。

男はぼんやりとした表情のまま、手を振る俺を不思議なものを見るような眼で見ている、手を振り返してくれることはなかった。重そうに棺桶を引きずったまま、気だるそう。眼に光が灯っていない。

あまりにも陰気すぎて不気味だったので、俺は手を振るのをやめた。

だけどスキップはやめなかった。

俺たちの現実逃避

天翔塔という名前が付けられているのにふさわしい高さを持っている塔である。

その入り口である狛犬門の前で、塔を見上げる。左右から狛犬が俺をにらみつけている。

地響きが突如、鳴った。地面が揺れて、木々がざわめく。俺はよたついたが、なんとか姿勢を保つ。しばらくして、揺れはおさまった。

天翔塔のどこかで爆発が起きたと見て間違いはない。数時間前にここを訪れた時も、このような地響きが鳴っていたから。

天翔塔はあまりにも高度がありすぎて天辺が見えない。そんな塔の中では、いまも数多くの挑戦者、つまり俺にとつてのライバルが溢れているというわけだ。そいつらライバル同士が戦うせいで塔から地響きが鳴るのだ。

『はっ。だからお前、言ってんだろ。俺は筋トレがしたいわけ。だから端っこに少し寄ってくればそれでいいわけ』

『この前もそのような言い分を使って、この狭い右眼眼球スペースを私たち二人から剥奪しましたよね。もうあなたにはうんざりしますよ。そうやって嘘ばかりついて、微妙に得になることばっかする。せこい。あんた、せこいよ』

『デンジャー。ユア、デンジャラスウ、ああ、くああ、溶溶溶溶溶溶！
デンジャー。ユア、デンジャラスウ、ああ、くああ、陽陽陽陽陽！
すうすうすう。チャーい、ぶろっさむ。ふうふうふ。気味悪
いっしょ？ これ、気味悪いっしょ？』

『嫌がらせのつもりかよ、それ』
『デンジャー。ユア、デンジャラスウ、ああ、くああ、溶溶溶溶溶溶！
デンジャー。ユア、デンジャラスウ、ああ、くああ、陽陽陽陽陽！
すうすうすう。チャーい、ぶろっさむ。ふうふうふ。気味悪

ない装備をしている。

だから今も、ほら、向こうからメンチ切られてる。すごい形相してる死神みたいな長身の女だ。全身真っ黒の暗黒装備で、人間と同じくらいの長さを持ったメスを握っている。あんなのに貫かれたらただでは済まないだろう。

と、俺が考察している内にメンチ切ってたその女性は、投球フォームである。え、いやそりゃないでしょ、とか思う間も与えないスピードで、超長いメスが俺に向かって投げられた。

だが、投げられたそれを俺は、指二本でキャッチしてしまった。ぬははははは。

向こう側で女性が驚きの表情を見せているが、ふふふ、その隙を逃す俺ではない、床を軽く小突いて俺は突進。相手に頭突きをかました。

「ふごおうあ」

女性とは思えない野獣のような呻きを発して、彼女は吐血して倒れた。そしてその場から消えうせた。俺は、勝ったのである。

『やったぜ、マスター！』

『おめでとう、マスター！』

『イエーイ』

みんなの歓声に包まれて、心地よい気分が足元から頭部にまで駆け巡って武者震いみたいなのがきた。その喜びに包まれていると再び万能感が沸き上がった。どこまでも飛んでいける気がした。どこまでも飛び立てるような気がした。で、気が付いたら俺は跳んでた。跳躍してた。

その結果天井を貫いた。丁度、照明があるところだったのでガラスが突き刺さってちよつと痛かったが、たいしたことはなかった。そのまま俺はどんどん、突き抜けて行き、ズバン、ドツガン、グワツシャ、ドガツ、ゴア、とかいう鈍い音を何回も経てていった。一度の跳躍だったが、どこまでも俺は飛んでいったのだった。

で、気が付いたらもう最上階。はっやあ！

「いや、さすがにチートが過ぎたかな。でも俺の胸内は充実感で満杯だ。もうもつたいたくないくらい垂れ流れちゃっているこの充実感！
こんな現世じゃ体験できないよね。やっぱりすごいやLET、S現実逃避！ おほほほほほ。どんな悦楽が待っているのでしょうか、どんな贅沢が待っているのでしょうかかぬはははは。これで詩燐が待つてましたあ、とかいう展開だったらマジで羨えるけどね。激羨えただけだね。未然にいつておくよ？ 詩燐が出てくるという展開だったらマジで縮小するっていうことを未然に言うておくよ？ 未然って使い方間違ってる気がするけど気にしないよ？ 詩燐が出てきたらマジ泣き腫らすしか他にない」

『マスター、落ち着くんた』

『落ち着いてください、マスター』

『我が主』

「うるさい！ ちょっと黙っていてくれなやか。俺は未然に防止しているのだ。詩燐が出てくるといふ激羨えな展開だけは、未然に防がなければならぬのだ」

言いながら最上階の景色を眺めると、なかなか爽快なもので都会のビルのオフィスの会議室っていう印象がまず第一だった。で、作りがすごくて、三百六十度ガラス張りで、窓の外には雲の床、つまり雲を見下ろせる。遙か向こう側で輝いている太陽がまぶしい。

ただただとにかく、ここは、広い。広間と言えはいいのだろうか。奥に貴族が座つていそふな豪華な装飾の椅子が見える（ここから見ても派手とわかるほどに派手な椅子だ。なんと言つても黄金色だから）。そこには何かか座つてることが窺えるが、黄金の逆光のせいで、座つてゐる奴の姿形がわからない。

そいつのところに向かう他、この状況を進展させることは出来ないうつだった。周りを見渡しても他には目立つ物は特に無い。背後には出入り口と思われる扉が一つあるが、あそこに向かつても階下に降りるだけだから、意味が無い。

というわけで必然。俺は、黄金の椅子に向かつて、歩を進めた。

『そろそろクライマックスだな』

『私たちの出番があるといいんですがね。一度くらいは』

『納得納豆納得納豆』

「少し、黙っててくれ」

近づくにつれて、少しずつだが、椅子に座っている奴の姿が見えてくるようになって…来そうなのだが、なかなか全貌が明らかにならない。黄金色による逆光がまぶしすぎるのだ。だが、なんとなく、座っているのが『女』、のような気はするのだが。目を細めてみても、正体はまだわからない。

それからしばらく歩いた。多分、十分くらい。おかしくね？

『マスター。前に進んでないんじゃないの』

トカゲ野郎がそんなことを言うので「嫉妬ッ！」と怒鳴りつける。だけど確かに、俺は前に進んでいないようだった。この広間が広すぎるから遠近感が狂っているという可能性もあり得なくはないかもしれないが、もうかれこれ十分近くは歩いているのだ。たかが塔の一室がそんなに長いわけがないではないか。あるいはこういうことも考えられる。もう闘いは始まっているというパターンだ。あの派手な椅子に座っている『女』らしく見える影が、既に俺へと何らかの力を働かせているから、俺は前にちっとも進めていないのかもしれない。だけどそれはおかしな話だ。こんな小姑のねちねちした嫌がらせみたいな力を働かせた所で、聖獣の血肉も取り込んで最強となっている俺には何の意味も成さない。ていうか、どんな人間にでも意味を成さないだろう。だからこれが向こう側の椅子に座っている奴の嫌がらせとは考えにくい。

…だが。と、ふと閃いた。

この前に進んでいるようで前に進んでいない状態を一時間、二時間と延々続けられたらどうなってしまうだろう、か。

少し頭がおかしくなってしまうかもしれない。

いや、少しどころではないかも。さらにそれが続き、一日、二日、ずっと、前進しているようで前進していないという苦痛が続いたら

…。
だいぶ頭がおかしくなってしまうかもしれない。

さらにそれが一ヶ月とか続いてみる。脳味噌は勿論だが、筋肉の方までダメになってしまいうに違いない。常に緊張している状態を維持しなくてはならなかったら、筋肉も疲れ果てて、体のために機能しなくなってしまう。そしてたら聖獣の血肉を取り込んでいるこの世界でのチートな俺も敗北を認めざるを得ない。ていうか、あの向こうに座っている奴って、絶対詩燐だろ。『女』って時点でもう間違いないく詩燐だ。あいつ、俺を使って遊んでやがるんじゃないか。だとしたら許すまじ。どうしてくれようか！前の現実逃避で超絶先輩忍者だった時も邪魔されたのに今回も邪魔されたら、そりゃもう、確信犯だ。詩燐はわざと、俺が楽しまないように邪魔をしてきているということになるのだ。何が、「どうぞ、楽しい一時をお過ごしくださいね」だ。お前のせいで楽しめなくされているじゃねえかよ。

そんな風に被害妄想みたいなのにとりつかれながら歩き続けたこと一時間。前進しているようで前進していない状態は終わることなく続いた。頭の中の三人も騒ぎ始めた。

『狭くなってきてるよお〜。狭い〜。狭い〜』

『マスター。そろそろお薬を飲まなくては右眼眼球内が潰れてしまいます。どうか、お薬をお飲みくだされば、私たちは楽になるのですが』

『メスシリンダー。SOS。メスシリンダー。SOS。メスシリンダー』

仕方が無いな、と懐をまさぐった。しかし、懐から出てきたのは、さつき拾った紅葉二枚。

これじゃねえよ、ってことでまた懐をまさぐった。だが、あれ、おかしい。

無い。

「無い」

『『『えっ』』』』

三匹の一致団結している叫び声が、俺の懐をまさぐる手の焦りを促進させる。俺は俺自身の懐をこれでもかってなくらいにまさぐった。で、結果、やっぱり何も無いということが、ハッキリと判明しただけだった。

俺はもう一度言った。

「無い」

沈黙…。

三匹は何も答えなかった。悶絶しているのが右眼越しに伝わってくる。そんな空気が、明らかに俺に対して殺意を抱いているであろう沈黙が、心臓にちくちく突き刺さってくる。

俺は早急に言い訳をする必要があった。脳味噌オーバーヒート。「た、多分、さっき跳躍して五百階分くらいすっ飛ばしてきた時に、懐のこのちいーさな隙間から薬の入ってる袋ごと落っこちてしまった、ということ、まあ、間違いは、あるかもしれないんだけど、多分、間違いないのかな、としか言いようがまあ無いかな。…はは。仕方無い。これは仕方が無い。こんな時もある。間違えた。何を間違えたかって言うと、着る服を間違えてたかもしれない。やっぱり、あれだね、もつとガツチリして隙間のないというか、もつと防御力が高い、鎧みたいな奴とか買っとけばよかったかな。やっぱり、あれだね、チートしていると真面目に装備を買ったりしなくなっちゃうからダメだね。そういう意味ではやっぱり架空の世界ってのはダメだね。ハッキリ言って失敗だよこの世界。おーい、詩燐、もういやこの世界。もう俺やめるわ。なんかこのままだとこの世界で仲間になってくれた三匹が俺の右眼眼球内で圧死してしまうかもしれないので、それはいかんでしょう。ま、そりゃ、俺が痛い思いをしたくないっていうことも、そりゃあるけどさ、やっぱりここはお互い穏便に事を済ませるといっか…って、そういうわけじゃないか。なんつうかとにかく、やっぱりチートはよくない。現実逃避の世界でも真面目に事を進めなくちゃ、こういつつまんないところでミスし

てしまうんだよねえ。って、そうだそうだそうじゃん。この世界はなんでもありなのになんで薬を落としちゃったくらいでこんな焦んなくちゃいけないのよ。現実世界だったらそりゃ最悪だよ。書類をなくしたりするのは社会人としてダメな感じじゃん。けどこの世界はそれから逃避している世界なんだから薬くらいポツ、と軽く出してくんなきややつぱダメというか、そこまでサーブスしてくれないとさあ、やつぱり最高の現実逃避とはならないよね。おい、詩燐。この無限ループみたいな、嫌がらせみたいな状態をさっさと解放してくれよ。俺、もういいわ。現実一旦帰還するわ。三匹に申し訳ないからね。ほら、あと、眼球が潰れるつてのは、まあ、ちょっとグロすぎるでしょ、さすがに。だから帰してくれよ現実に。もしくは薬をポツとここに出してくれるだけでいいんだよね。おい、詩燐、聞いている？ おい、マジ、聞いてんのかよ詩燐！ ちよつと、こういう時に手助けしてくれるのが詩燐だろ！？ おい、詩燐、マジ、ちよつと座つてないでこっちに来てくれよ詩燐！ ていうか何で右眼に薬を投与しないと潰れるなんていう設定が入ってるんだよ！ 設定にリアリティーを出すためとかにしたつて、いくらなんでもHARD過ぎる設定でしょう！ もうちよつと気軽に楽しめる世界に招待してくんなくちゃダメじゃん！ そこがまずよくない。なんなんだよ詩燐。しっかりしてくれよ詩燐！ 俺もうだるいよ詩燐！ やつてらんねえよ詩燐！ メスシリンダー詩燐！ 詩燐、無視すんなよ詩燐！ なんてそんな場所でぐうたらしてんだよ詩燐！ とりあえず、まずは薬からよろしく詩燐！ ていうかここ塔の頂上なのになんてなにも用意してねえんだよ詩燐！ もつと楽しいものが溢れているかと思つたのに何これ詩燐！ 詩燐しかいないじゃん詩燐！ メスシリンダー詩燐！ メスシリンダー詩燐つて何！ もう俺頭おかしくされちゃつてんじゃん詩燐！ 一時間で頭おかしくなつたよ！ もう最悪だよ！ ふははつは、てえ、痛エツ！」

激痛が来た。キーンと来た。眼の奥が。触れない場所が、容赦無く切り刻まれているようなこの感じ。なんでこんな痛みが現実逃避

の世界で生じるのかわからない。そりゃ、たしかにこんな痛み現実では体験しないけど。

痛みに耐えるために右眼眼球を手の平で押さえつけながら、詩燐が動いてくれているかを確認する。まさか動き出してくれているだろう、と思いつつ。

しかし俺は叫んだ。

「……嫉妬ッ！」

相変わらず黄金の装飾から発される逆光が、座っている『女』が本当に詩燐かどうかの確認をさせない。つまり、あれだけ俺が苦痛の言い訳…もとい、嘆きの咆哮を上げていたというのに、詩燐と思わしき『女』は椅子から一步も動いてはくれなかったのだ。

椅子の座り心地が良いんだかどうなんだかは知らないが、いくらなんでも冷た過ぎるんじゃないやありませんか？それとも詩燐じゃないの、『女』は？そしたらば、誰なの？怖いよ？ちよつと怖い。

『うぎゃあああマスター！ ふざけんじゃねえぞてめえ！ お前、マジ、殺すきかあ……』

『マスター！ 私たちはもうそろそろ体力の限界です。一度も戦っていないというのに……。日の目を見る前に沈没するだなんて、ふふなんだか憐憫の感情を誘う幽霊船のようではありませんか。ゴーストになったらマスターの元に真つ先に駆けつけますよ。そしてあなたの耳元で恨み言を言い続けたいと思います』

『我が怒髪が天を衝く前に、主の心をブレイクさせたい。崩壊。弱点はメスシリンドラー。ならば我が出来ることは何か。それは連呼することに限定される。メス詩燐ダー。メス詩燐ダー。メス詩燐ダー。メス詩燐ダー。メス詩燐ダー。』

「落、落ち着いて…ちよつと…落ち着いて…う、うう……」

だめだ、片目だけだと遠近感も掴めないから走るのもぎこちなくなってしまう。しかも走ったって同じ所をジタバタしてるだけのことだし。ちくしょう、詩燐、助けるよこういう時は、ほんとに。

俺はあえなく地面に倒れてしまった。うぎゃあ、と言いつつへ

たばってしまった。

なんだかこのまま死んでしまうような気がした。左眼の視界もぼやけてきたような気がする。

もうだめかもしれない。

「な、なんで現実逃避しに来たのにお陀仏しなくちゃいけねえんだ……！」

俺は握り拳を作り、さも青春映画で若者が悔しがる時のようにして床を殴った。それによって空しい音が空虚な空間に小さく鳴り響き、俺のやるせない気持ちをさらに助長させ……なかつた。

「……えっ」

驚くべきことに。俺の拳が振り下ろされるのに合わせるかのようにして、左側からガラスの割れる高音が鳴り響いたのだ。驚いたままに視線をそちらに向けると、さらに驚愕することになった。なぜなら、SATが使うような防弾盾を構えたまま塔内に転がり込んできたのが、まさしく看護服を身に纏っている詩燐だったからである。

「詩……」

「全員、動くなッ！」

普段の詩燐からは想像が付かないほどにしっかりとしている声付きである。ただ広いだけの場所に、その凜としている声はよく響いた。

「なんじゃありゃ」

「さつき薬局にいた看護婦さんですね。驚きのアクション」

「サプライズ・サンライズ・驚愕」

あまりにもちぐはぐだった。看護服を着ているのにSATの防弾盾を構えていて、さらに景色は雲しか見えないような高度何千メートルっていう空間の外から突撃してくるだなんて、そんなのはお馬鹿なアクション映画にもあり得ないようなクレイジーな展開だ。

そして次に詩燐は何をするつもりなのか。その動向に注目が集まる。俺と怪物三匹の注目。とか言って張り詰めて注目してたら、彼女は背中に手を回して、そこから何を取り出すつもりだ、ってみん

なが息をゴクリと呑んだ次の瞬間、俺たちの視界に現れたのは銃だった。黒光りする一丁だ。

「MP5A4ッ！」

何故か大声で手に持っている銃の名前だろうか、そんな雰囲気の名前を叫んだ詩燐は、右手にそのMP5A4、左手に防弾盾、そして服装は看護服という戦場のナースみたいな表現がピタリ一致する雰囲気を垂れ流しつつ、広間を駆け出し始めた。が、面白いことに詩燐も俺と同じ顛末で、無表情のまま駆け足で広間を駆け抜けているつもりなのだろうか、俺たちから見たら実に滑稽な様子に見える。俺たちからすれば、詩燐は『その場』で必死に足踏みをしているようにしか見えないのだ。俺もこれまで一時間あんな風だったのだろうなあと考えると、何だかものすごく恥ずかしい。空しい。

そんな状態の詩燐を見つめること、三分くらいだろうか、さすがに詩燐も異常に気が付き、

「ねえ、ちよつとこれ、どうなってるの？」

と俺に向かって絶叫してきた。無表情だが声音から言ってひどく困惑しているのがわかる。

俺も困惑した声音で絶叫を返した。

「いや、なんだかよくわからないが、おそらく、向こう側に座っている『女』らしき奴の攻撃が嫌がらせなんだろうよ！ 最悪だよ！ 楽しめないよ！ なんとかしてくれない詩燐！ お前がこの世界をしきつてるようなもんなんだろう！？ これも演出の一つかなんかなんだろ！？」

俺は俺の思っていることをそのまま詩燐に向かって訴えた。今まで詩燐によって俺は現実に帰還させてもらっていたし、この現実逃避世界の至るところに神出鬼没、自由自在に詩燐は現れてきた。自由な姿で俺の邪魔をしたり邪魔をしたり邪魔をしたりしてきた。それは詩燐が、俺がこの世界に浸りすぎて現実を忘れないために、詩燐自身が姿を現して邪魔をすることで俺に現実を思い出させていた

のだろう。詩燐は、俺と本物現実を繋ぎ合わせておいてくれる案内役というか、オペレーターであるからだ。あまりにもこの現実逃避を楽しんでいる俺が本物現実を忘れないために詩燐は俺の感情をコントロールするという役割を持っているのだ。いや、実際のところはわからない。だが少なくとも俺は、詩燐が時たまこの現実逃避ワールドに現れる理由はそういう、俺が人間として墮落しきらないストッパーのようなことをやってくれているからだと思っていた。

だから詩燐が現実逃避世界の全てをコントロールしているのも必然だと思っていた。

TRPGなどでいうゲームマスターみたいなものだと思っていた。しかし、詩燐は困惑している。明らかに戸惑っている。

俺は不安な気持ちに駆り立てられた。

「なあ。大丈夫、だよな……？」

頬が引きつっているのがわかる。俺の問いかけの後、しばらくの間は静寂に包まれて、耳鳴りが聞こえたほどだった。そのキーンという音が少し遠ざかった頃、その場で足踏みをするのを止めた詩燐は、俺をまっすぐに見た。こっちみんな、と言いたくなかったが、彼女は相変わらずの無表情のまま嫌な事実をまっすぐに俺に伝えた。

「だめかもしれない」

「……………」

あまりにも呆気らかんと言うので、一瞬頭が凍りつき何も考えられなくなつて景色が真っ白に染まっていくような感覚がしたが、すぐに鮮血が真っ白な光景に降り下る。その鮮血はつまり、俺にとつての怒りだと言える。憤りだと言える。呆気らかんとしてとんでもない事実を俺に伝える詩燐に対しての憤怒だと言える。ふざけんなと叫びたくなつた。

で、実際に叫んでた。

「ふざけんなッ！ お前はそんな態度だが、実際、深刻な状況じゃないのか！？」

俺たちの現実逃避（後書き）

ちよつと中途半端なところで切つてしまつたが、ストックがここま
でしかないの。なるべく速く書き終えたいと書いている本人も思
つています。

しかしプロットはあるので行き先が不明ではありません。

そういうわけで、途中で作品が終わることは、今回は、無いです。

帰還

再びの沈黙。本日何度目の沈黙？

俺と詩燐はしばし見合った。まるで武士と武士が向き合っただけのタイミングを狙い合っているかのような空気が俺と詩燐の間で火花を散らしているような感じで、見合った。

それからまた何分か経った。俺の引きつっている顔と詩燐の無表情は、この広間の中でいつまでもそのまま動かないようでもあつて、まるで静止画あるいは絵画の中に閉じ込められたかのような。そのまま何分もお互いに表情を変化させなかった。詩燐はいつも無表情だが、だけどこの時。詩燐が右手に持っていたMP5なんちゃらとかいう銃器を、ゆっくりと放物線を描くようにして持ち上げた、その時。詩燐の、表情が、はじめて動いたのだ。

見てはいけないものを見たような気持ちに駆られて、その変化した表情から眼を反らしたかった。いや、反らすべきだと感じた。だけど、俺は目を反らすことをしなかった。いや、出来なかったのかもしれない。だけど俺の左眼は、詩燐の表情が残酷に歪んでいることに、吸いつけられていた。

初めて詩燐の歯並びを見たような気がした。勿論、喋っているときにも歯並びは見えていたが、しっかりと詩燐の歯並びを見たのはこれが初めてとなる。八重歯がやけに尖っていて、犬のようだった。そして真っ白で綺麗な歯並びだった。

さつき、俺は鮮血が出るような怒り、という表現を使って俺の怒りの凄まじさを表現していた。だけどそんなのはお遊びな表現だったと今、感じる。向こう側で初めて表情を変えた詩燐の、その残酷さに塗れている表情が、血に飢えた獣のようだったのが何よりも恐ろしい気がしたし、何よりも本質的な気がしたから。本質的、つてのがどういう意味での本質的なのかはまったくわからない。わかりたくもないかもしれない。それ程に、詩燐の顔は恐ろしい歪み方を

している。

俺は、茫然としていたと思う。あんどりと口を開いて、阿呆みたいな感じになっていたと思う。

そんな馬鹿みたいな俺を、詩燐はどう思っただろうか。見下していただけるか。

おそらく、俺の勘によれば、眼中になかっただろう。

詩燐は、MP5なんちゃらを向けている相手の方へと顔を向けていて、獲物を刈り取るために一心不乱で他のことが見えない肉食動物のように荒々しい。

「さっきのは冗談。あなたの言う通り、この世界は全て私によってコントロールされている」

その言葉を合図にして、詩燐が持っている銃器が音を鳴らした。ドラマやアニメなどで出てくる機動隊みたいなのが鳴らすような、重々しい銃撃音。

ズガズガと非現実。椅子が穴ぼこだらけになって、そこに座っていたやつが地面にドサリと人形のように倒れた。呆気ないものだった。詩燐が「だめかもしれない」と呆気なく言い切ったのと同じくらい呆気ない。

音が止んだ頃には、走れば前進できたし、歩いても前進できるようになっていた。やはり、椅子に座っていた『女』が俺たちを前進させていなかったらしい。

「冗談とかやめてくれよな。おどかしやがって」

「はははは」

詩燐はまた無表情に戻っていた。さっきの残酷さ剥き出しの詩燐はもういなくなっていて、まるで別人であったかのように落差が凄まじい。もしかすると詩燐は多重人格者なのかもしれないとかSF的にあり得ないことを考えながら、俺は地面にくたばったその『女』がどんなツラをしていたのかを確認するために、前進した。

『終わったか。そろそろお別れだな』

『また合う機会があったら良いですね、マスター』

『今生の別れ。来世にてまた』

三匹はそろそろ俺がこの非現実世界からいなくなるうとしているのをなんとなく悟っているらしい。実際、その『女』のツラを拝んだらもうこの現実逃避は終わりを告げ、詩燐によって俺は現実へと帰還することになるのだろう。三匹の出番があまりなかった気がするが、まあ、そんなものだろう。

『女』の長い黒髪がたらんと、乱れている。うつ伏せになっているから、髪の毛を掴んで持ち上げなければ彼女の顔を確認することは出来ない。

持ち上げて彼女の顔を確認した瞬間に現実へと帰還されるような気がしたので、それを詩燐に尋ねてみると、

「うん。それで丁度いいんじゃないかな」

と適当な答えが返ってきた。帰還するタイミングなどは、どうやら、案外適当なものらしい。だったらそんなこと尋ねなければもうちょっと現実逃避させてもらえたのだろうか、と思ったが。詩燐が俺の背後で何かタイミングを計っているかのようにして息を潜めていることから見れば、どうにしてみてももう帰還してなくてはいけなのだろう、とわかる。

「じゃあな、三匹共。おかげさまで、楽しかったぜ」

俺の現実逃避に付き合ってくれた三匹に別れの言葉を告げる。三匹の相づちが返って来る。

一息ついてから、床に散らばっている黒髪を持ち上げた。そして、倒れている『女』のそのツラを、拝んだ。

「……………」

俺はそのツラを見た瞬間に不思議な違和感に包まれたが、その違和感が何かの正体を俺自身が暴く前に背後から詩燐の、

「じゃ、帰りましょ」

という軽い声音が聞こえてそれを契機にして何も考えられなくなり、頭がぼやけ、そして視界もぼやけてしまっただけの次元から別

の次元に飛ばされると感じるのだろう、胸がギュツとされて気が付いたら右眼の痛みも消えてなくなり三匹の気配もなくなり俺の脳味噌は俺の声だけで満ち溢れ、そして、一度、気を失った。

デフレスパイラル

「なあ。起きろよ。聞けよ。目、覚ましてくんねえかな！」

浴槽からは若草色の湯気が消えている。お湯もなくなっている。

そしてその空っぽの浴槽の中で、いつもと同じように、詩燐が手を胸の前で組んで、何かを祈るようにして眠っている。

そして血みたいなやだれも垂れ流している。わずかに残っている水と混ざりこんで排水溝へと流れていく血液にしか見えないそれは、不吉な不安を俺にもたらず。それが、頭で繋がって、フィクション世界で残酷な表情をしていた詩燐が、俺の頭に浮かび上がった。だからだろうか、あまり無理矢理に詩燐を叩き起こそうとすると、急に眼を開いて起き上がり噛み付かれて殺されるような気がした。俺は少し詩燐という存在が怖くなっているようだった。

だけど俺はそれでも、ゆさゆさと、浴槽の中で祈るようにして眠りかけている詩燐の体を揺さぶった。おっかなびっくりでも、詩燐を起こそうとするのを止めなかった、のだが。

「起きろよ。教えて欲しいことがある……………」

風呂場にエコーがかったかのように反響する俺の声。そのエコーに混ざって今、確かに聞こえたのは、それは、…………声？

「……………」

俺の体は『点滅』した。

反響する俺のエコーの中に、『女』と思わしき人物の声が混ざっていたのを、たしかに耳にしたからだ。たしかに、聞き違いではない、その声は、『アイシテ』、今言っていた。

『愛して』

蔵山の携帯電話の画面に表示されていた三文字だ。たしかに今、そう聞こえたのだ。

『点滅』しながら、俺は風呂場を四方見渡した。だが、シャワーが取り付けられていたりカプセルやシャンプー、ボディソープ、ト

リートメントが置かれているだけで、俺の発した声に混ざっていたアイシテを言ったと思われる『女』はどこにも見当たらない。

不気味だ。何か潜んでいるような気がする…。

祈りの姿勢のまま浴槽にいる詩燐を足から引っ張りあげて、彼女をずるとひきずりあげて浴槽から引っ張りあげた。血が液体状のケチャップのように床にツーンと零れ落ちていたが、そんな汚れなど気にしている場合ではなかった。俺は『点滅』してる自分がこのまま世界から消えてなくなってしまうんじゃないだろうか、というわなわなした焦りみたいな、そんなものに急きたてられて、風呂場から出た。行きの時に床にこびりかしたまま残っている血痕だけを頼りにして、百畳大広間ルームを横切り、六畳半のボロ部屋まで駆け足で向かった。

部屋に入ると、明かりを点けてから、随分とひきずったのに起きない詩燐をそこら辺に放り投げた。そして炬燵の電源を入れると、すぐに足を突っ込んで、横になって、そして頭まで炬燵に突っこませた。俺は炬燵の中で『点滅』とフェイド・アウト、そして先ほどのアイシテという『女』のものらしき声に怯えながら、がくがくと震えて、そのまましばらく、それ以外のことは何もできなかった。そして、自分が後一ヶ月程度で消えてなくなってしまうことを、考えなければいいのに、想像してしまい、漠然とした、しかし手の付けようの無いほどの焦燥に脳味噌が締め付けられた。

何もかもがどうしようもない気がした。全てがめっちゃくちゃな気がした。

そして何時しか、自分で気が付かぬ内に、眠ってしまったらしい。

『you got mail』

チンチロリン、みたいな間抜けな音が鳴った。なんてことはない、俺の携帯がメールを受信したのだ。

眠る前はひどい『点滅』をしていた俺の体も、睡眠によって時間

が過ぎたおかげだろうか、とりあえずは平穩を手に入れている。俺はもそもぞしながら炬燵から抜け出ると、そこら辺に放り投げたはずの携帯を探した。で、危ないところだった、詩燐の垂らしているよだれがもうすぐで携帯に到着しそうだったところを救出した。

「…ったく。あぶねえ」

言いながら受信BOXを開き、一番上の欄に来ているメールをチエックする。

昔からの友人、細山からのメールだった。彼とは最近まで一緒にフリーター生活を送っていたりなどしていた。だが実に細山に対して懐かしい感じがする。きつと現実逃避をしていたからそう感じるのだろうな。

そんな呑気なことを考えていたのが悪かったのかもしれない。

メールの内容を見た瞬間、俺はせつかくおさまっていた『点滅』を、再発させてしまった。

え、と思わず呻きながら、しばらくの間携帯の画面から目を離せなかった。

『蔵山の彼女だった、麗香さん。お前も知ってるだろ？ あの人、死んだ』

もう、冬だ。ファーが付いているコートを着こんで外に出てみれば、最近まともな飯を食っていないせいで少し貧相になりはじめている俺の体はアツという間に冷え切り、白い息を内側から吐いた。

月が出ている。満月が明るく輝いている。

俺は街灯もろくない裏通りを無言のまま歩き、しばらくは白い息だけを吐く。

チカ、チカと点滅している街灯を見つけた時は、少しの間立ち止まったりもした。

そして白い息を吐く。

道に石ころが転がっていたらそれを蹴っ飛ばしたりもして、その

後に誰か人がいたら恥ずかしかつただろうなんて思ったりしてみながら、結局裏通りには人気が無いので、もう一度石ころを蹴っ飛ばし、最終的にどっかの家の壁にぶちあたったので、それで石を蹴るのは止めにした。人に迷惑をかけるのはよくないということだ。そして白い息を吐いた。

こんなことをしながら歩いても体はよけいに冷えるだけだった。本当はどっかエアコンがガンガンな屋内に入り込んで暖かいチキンでも頼張りたい。だが、人前に出て『点滅』したら嫌だなあとという弱気な思いもあるし、それにコンビニなどに入って知人などに出会うのも今は嫌だった。

だから、あまり、細山に会うのも気が進まない。でも彼は『電話で話せるような内容じゃない』というメールを送りつけてきたから、こうやってコートを羽織り外に出たのだった。

大通りに出れば、街は浮かれていた。

イルミネーションを着飾り、華やかな彩りを形作っているわけなのだが、何故、かと言えば今夜はクリスマス・イブだからだ。で、クリスマス・イブというのは通常は恋人たちがはしゃぎ回りサンタクロースがトナカイを過労死させプレゼントを配り回るといふ夢に溢れつつもどこか影があるようなイベントだと思われるのだが、細山の送りつけてきたメールの内容にしろ俺の『点滅』によって鬱々としている心情にしろ、クリスマス・イブには不釣合いだ。

イルミネーションは華やか。それが何だか皮肉にしか見えない。

『俺たちは幸せだけど、お前は、どうなのよ?』

みたいなことを言われている気がして影が降りる。俺に影が降り下り『点滅』を進行させる。幸せなる者に対する嫉妬、悔しさ、自身自身に対するなさけなさ、なんてものがぐるぐるぐるぐる脳内で回転して不安定な精神。

「ねえ、ちよつとお！ ふざけないでよお、もおー！」

「あつち行こう、あつち！」

「さすがに二人じゃ食べきれないってえ！」

「ねえ、みんな呼ぼうよ。パーティーしようよ！ 今からでも大丈夫だつて！」

「すごい、綺麗……」

いろいろな人が幸せそうだ。それらの幸福エネルギーに当てられ過ぎるとよけいにぐるぐるしそうだつたので入り込んでくる言葉の意味を考えないようにしようと思った。が、まるで無駄だ。

彼ら、あるいは彼女ら、の声は俺の耳に容赦なく意味を持って響いてくる。音量がでかいから。

はしゃいでいる声は何でこんなにも良く響くのだろうか。それはやはり、はしゃいでいる人が周りの人に幸福を伝えようとしているから良く響くのだろうか。一緒に幸せになろう！みたいな。

しかしそんな見方は天使ちゃんだ。はしゃいでいる声は何であるにも良く響くのかには冷たい理由があるのが本当のところだ。ふふ、現実には悲しいね、という鬱々感情を聞く者に真に伝えるためにはしゃいでいる人々はあるなにも大声を張り上げているのである。

鬱々感情に塗れている俺や、それとおそらく細山とかも。そう言ったテンションだだ下がりの人々は大声を張り上げることもなく下を向いているというのに。俺にいたっては『点滅』までして何時消えてもおかしくないような、何時消えちゃっても別に誰にも気付かれないような、そんな風に最悪な感じなのに、なんで連中はそのことに配慮してくれず自分自身のHAPPYを全力でアピツてくるのだろうか！お前ら戦闘民族かよ。弱肉強食のつもりかよ。それとも頭がすつからかんだから無邪気なのかよ。ああ、こら、俺、ちよつと怒ってきたぞ、火が点いてきたぞ、怒りが湧いてきたぞ、俺、これ、どうよ？俺の怒りが天の怒りさえも引き起こし雷がどっかのカッブルに落下したりしないかなあ！

と、まあ、作るのに何時間もかかりそうな立派な雪だるマイルミネーションを眺めながら怒ってみたが、こんな風な怒りを心の中で呟いたところで所詮、世の中というものに俺は何らの影響も与えない。ああやってHAPPYを撒き散らしている人々の方が全然面白

いし愉快なのだ。俺なんていう世の中になんら良い影響を与えない人間はさつさと『点滅』してフェイド・アウトして消えてなくなってしまう方が世の中のためだ。

不幸を撒き散らす奴に存在して良い理由なんかありやしないのだからな。おほほ。

何時間もかかったのである。トナカイとトナカイがkissをしているイルミネーションを見ながら俺は自虐したい。俺は俺の存在を自分で否定したいぜ！

だが、所詮、自虐。こんな自虐なんてツマラナイ。余計に不幸を増殖させてよけいに世の中での俺の存在価値を下げるだけだ。で、こんな風に自分の存在価値を下げてばかりいると、やがて周囲の人間から見限られる。『あいつ、ダメだよ』と言って。その時、俺の存在価値はさらに低下していく。で、また落ち込んでしまい、それによって精神が乱れ、またもやツマラナイことを言い始める。しかも以前よりツマラナクなっていたりする。周りと同じの言語を用いているのに、会話が一切成立しなくなったりしてしまう。ちっとも理解されなくて。精神が乱れることによって思考も乱雑になるから会話もマトモに出来なくなってしまうのだ。で、そういう俺の様子に気が付いてうっとおしくなった他人が再び、以前よりも語気を強めていうのだ。『あいつ、なんなの？』と。

これがいわゆるデフレ・スパイラルというやつなのである。

デフレスパイラル（後書き）

作者はこのような鬱々思考は嫌いですが、書いてしまいました。でもこういう部分も持ってしまうのが、人間だったりしますよね。これは極端ですけど。

ぶろんずカ・フェ

三十階立てくらいの巨大ビルに飾り付けられている、犬にサンタクロースの服を着させた上でその犬が猫をトナカイ代わりにして人間たちにプレゼントを配っているという大作イルミネーションを眺めながら、俺はデフレ・スパイラルの無情さ、冷血さ、恐ろしさに心をふるわされた。

「だけど、だからと言って、不況だからといって、負けてばかりはいられない。」

今日、ちよつと大通りを歩いただけだというのに俺はたくさんの活気を見た。たくさんイルミネーションを見た。そう、不況といえども街は活気を持っていないか。

俺も、せめてこういうクリスマス・イブなんていう特別な日には勇気を振り絞って不況に立ち向かわなければいけないのではないか。恐怖のデフレ・スパイラル！なんて奴に少しは痛い目を見せてやらねばならんのでは、あるまいか？

「いや、違う。痛い目を見せなくてはいけないのだ！」

「…やるしか、ねえ」

小さく呻いた。だけど俺の心は燃え始めた。

もちろん、こんなのは一時の感情の暴走にしか過ぎないのである。少し時間が過ぎれば寒さに震えて貧相な体がよけいに貧相になり、白い息をむなしく吐くことになるだろう。だがそんなのはそうなった時に考えればいいことだ。今俺は燃え始めたのだから、今、行動するのだ。燃えるゴミになるのが燃えカスになるのが、構うべきじゃない。燃えるのだ。燃焼だ！

苺の部分が赤いランプ、クリームの部分が黄色ランプ、蝋燭の部分が緑のランプで配色されているイルミネーションが置かれているのは、もちろんケーキ屋さんである。クリスマスケーキは当日に買えるものなのだろうか、と怖かったがお洒落な店内に入れば、クリ

スマス・イブに働いているというのに満面の微笑みを湛えているのが輝かしい女の人がいた。その笑顔の眩しさから窺うに、おそらくクリスマス・ケーキはあるのだろう、と思って探してみるとあったよたくさん。どれこもこれも、クリスマスという一年に二日しか目立つこともない特別な環境に置かれているケーキなのに、やはり本日は主役だからだろうか、彼らクリスマス・ケーキが放つオーラは格別なものだ。他のケーキなんてもう、悪いんだけど、目に一ミリも入ってこない。この店内に入る誰もがきつと、クリスマス・ケーキの丸い形に心奪われてしまうことであろう。真っ赤なお鼻のトナカイさんのメロディと空調が効いているおかげだろうか暖かい店内の中で、心までほわほわ溶かされていつて愉快的な感じ。そんな中で楽しく愉快にクリスマス・ケーキをどれにしようかなと頭を悩ませること数分。実に楽しい数分だった。

というわけで俺は、ふふ、五千円という、店内で一番高い値段であるクリスマス・ケーキを購入したのであるよ。

俺の燃焼はまだ始まったばかりだ。細山との約束の時間はまだ先だ。俺はクリスマス・ケーキの形が崩れないように注意しながら表通りから裏通りに入り、点滅している街灯を横目でチラと見たりしながら、自宅へと舞い戻った。白い息を吐きながらね。

そして俺は六畳半のボロ部屋で、ほら、さつき放り投げた居眠り野郎の詩燐、まだ寝ていやがるが、あいつのよだれを俺はコップで掬い取ったのだ。そしてコップで掬い取ったそれに匂いがあるかどうかの確認をすると、ふふん？ 以外なことに匂いは無かったが、まあ、こんなことは計算にいれていたことだ。とにかく、俺はその真っ赤なよだれを、せっかくケーキ屋さんの人が製作・販売したクリスマス・ケーキにまるで苺ソースをかけるかのようにしてデコレーションさせた。

それだけでは済まないよ&それだけでは終わらないぜ。

先日どっかで買ったメントスの色とりどりをケーキの壁面に埋め込ませたり、お湯を沸かしてみても、ケーキの中央にそのお湯をぶっ

こんで見ることによって窪みを作ってみたり、『I'm happiness』とメモ帳に走り書きさせてその紙をびりりと荒々しく切ったのを、丸めて紙くずにしてからその窪みにポンと入れてみたりした。

それだけでは済まないよ&それだけで燃え尽きたりはしないぜ。カップラーメンの食べてないのが押入れの中から見つかったから、そうだちようどお湯を入れたんだからさ、ってことでそのまんま力ツプラーメンをクリスマス・ケーキのど真ん中にIN。まるで塔が建築されたかのように堂々と聳え立ったカップラーメンが、まあ、時間が経つに連れてちよつとずつ右に傾き始めるのをぼーつと見た。で、ぼーつとしてる場合じゃない、って思っただけに他のないのかよ、とか思っただけで焦ってみるけど何も無いから、ええい、つってメモ帳を頼りにすることにして何か文字書こうつって書いて文字が『うんこ』だった。小学生レベルの下ネタで自分自身でもドン引きだよ、とか呟きながらそれもメモ帳からびりりと不細工に切り取り、丸めて紙くずにしてからクリスマス・ケーキに全力でIN！拳がめり込んでしまいいクリスマス・ケーキはさらにへこんでしまっただけで見るも無残。最悪な感じが最高だよ、とか呟きながら俺はクリスマス・ケーキを、昔買ったけど一度も使う機会がなかった長靴、にズボツ、ともう無理矢理にくちゃくちゃに入れてしまったのでもうクリスマス・シューズだった。或いは、クリスマス・靴だった。作っただけに三百回くらい土下座しても許されないような状況を作り出してしまったのだった。

だけど俺はまだ燃え尽きないよ&ロックンロールが止まらない。詩燐に「じゃあな、ちよつといつてきます！」と述べてから長靴を大事に抱え込んで、俺は自宅から飛び出た。時計を見ると、あら、待ち合わせの時間はもうとうに過ぎていた。お湯を沸かしたのがいけなかったのかもしれない。まあ、いい。細山もこの長靴を見れば俺を許してくれることだろう。「あ。頭がおかしくなったんじや、しょうがないか」とか言っただけ。って、違う違う、違うだろ。

なんでそういうマジな意見が出てこなくちゃいけないんだ？違うだろう！そこは、

「ふうん。なんだか、すごいじゃないか」

だろ。まあ、それはそれで空しい返事のような気もするけどね。ていうか、俺は何をやっているんだろう。

点滅している街灯を横目でチラ見してから、裏通りを走り、表通りへと出てバカップルやら浮かれた人々やらと何回もすれ違いながら、白い息を吐く。

男女が楽しめる特別な日がクリスマス・イブの正式な楽しみ方なのだろう？一般に普及されているクリスマス・イブというものの楽しみ方というのは、決して、クリスマス・靴を抱えながら男友達一人と重たい死に関する話をするためにある一日ではないはずだ。

だがまあ、愚図つても仕方が無い。それに、俺は何だかクリスマス・イブで気分が浮ついていたが、そうだ、重要な話じゃないか。蔵山の大切な恋人だった麗香が、まるで蔵山のあとを追うかのようにして死んでしまったのだ。クリスマス・靴とか何とか言って悪ノリしてたけど、違う。それは違う。

細山の話に対して真剣に耳を傾けよう。それが今日、俺という不幸を撒き散らす人間が他人に幸福をもたらすために出来る、精一杯の行いに違いないはずだ。

白い息を吐きながら、俺は目的の場所へとたどり着く直前に、ふう、とため息を付いた。

そして俺は、扉を開けた。カランカランと鈴を鳴らし、カフェに入った。

どんな人が入ってきててもいぶかしまれる事の無い許容範囲の広いカフェ。『ぶろんずカ・フェ』という、老舗だ。スキンヘッドでサングラスをかけているという渋いオヤジが経営する、居心地の良い空間が『ぶろんずカ・フェ』なのだ。

十年ぶりかの再開

店内に流れているのはジャズ、ではなくて演歌。何故、演歌なのかというとお客さんのニーズに合わせてとかそういうことではなく、単に店主の音楽の趣味が演歌だからだ。今流れているのは美空ひばり。クリスマスなんて関係ねえ曲を流している割には、店内はクリスマス用の装飾が為されている。

カウンター内の椅子に座って煙草をくゆらせていた店主から声を掛けられた。

「よお久しぶりだな。細山ならもう来てるぜ」

「お久しぶりです。ちよつと時間の計算を間違っちゃって」

「随分と待ってたみたいだから、ちゃんと謝罪しなよ。ごめんなさいってな」

「店主桜木。俺だって餓鬼じゃないんすよ。謝罪くらいしますよ」

「どうだかね。ま、いいや。後でクリスマス仕様の特別コウイーを入れてあげるから。細山は奥に居るよ。相変わらずの格好でさあ」

「ははは」

何故か今日はアフロのカツラを被っている店主桜木。そう、店主は桜木という苗字だ。まあ、そんなことはどうでもいい。アフロでサングラスをかけながら、彼はコーヒーを作り始めてくれた。深く刻まれている額の皺を寄せながらコーヒーを作る店主桜木は、いつものようにcoolだ。かっこいい。これでアフロのカツラなんか被っていなければもつと格好よかっただろう。

「じゃ、コーヒーよろしく、店主桜木」

「おう。今日はいつもの数倍はコウイー上手いからよ。楽しみにしててちよんまげ、谷口」

「ちよんまげって。…うす」ちよつと笑ってしまった。

挨拶もそこそこに、俺はクリスマスらしい飾りがそこら中に為されている店内を見渡し、細山の姿を探した。そして、見つけた。金

髪でパーカーを着ていてこんなに寒いのにサンダル、なんて格好の男は細山以外にはそういないからわかりやすくて良い。しかも、本日のは彼は、他のお客と違って明らかに寒さのせいとは違う青白さを抱え込んでいるから、俯いていて、纏っている空気が他とはテイストが違う。非常に、おいしくはなさそうな空気が彼の周辺に漂っている。

だが、勿論、クリスマス・靴を抱え込んでいる俺だって同じような空気を纏っているようなものだ。さらに俺は先ほど燃え上がって燃焼してもうすぐ燃えカスになる寸前なので、周囲の人間から見れば、俺は細山よりも暗い顔をしているのだろう。不幸オーラを放出しているに違いない。

俺は忍び足で店内を歩き、細山にひっそりと声を掛けた。

「よっ。待たせたな」

声をかけると細山は顔を上げた。死ぬ寸前の老人のような青白い顔をしていた。

「遅えよ。…まあいいや、座れって」

「悪かったと思っっている。で、本当なの？ その、麗香さんが死んだって」

「ああ」

長靴を脇に置き、俺は細山の向かい側に座った。細山はテーブルに携帯を置いた。画面を開かない状態にして置いたのは、わざとだろうか。

どうして携帯をテーブルに置いたのかはわからなかったが、とりあえず、俺は携帯に手を伸ばそうとした。だが、それを細山は止めた。彼自身で置いた携帯を、彼は自らの手の平で覆った。

「まだ、開かないでくれ。心の準備が出来てないんだ。他の人に見せていいものか…わからねえ」

「何？ どういうことそれ？」

「それを言っているのかもまだ、心の準備が出来てないんだ。ていうか、俺自身あんまりこのことについて話したくないんだ。…気分

が悪くなる」

話したくないんだっつたらはじめから呼ばないでくれよ、と思わないでもないが、しかしそうやって葛藤してしまうような出来事が細山に訪れたのは間違いのないようだった。「点滅」を患っているのならば間違いなく、細山の体は『点滅』している状態なのだろう。携帯を押さえている彼の手は、小刻みに震えている。見る者に哀れを誘うほどに。

空気がさらに重たくなってきたのを感じる。周囲の馬鹿騒ぎだとかカップル同士の愛の言葉だとかが内容まで含めて、どんどん耳の中に入ってくる。俺たちのテーブルだけが異様に暗い。

このままだと俺の体に『点滅』が生じてしまいそうだった。そしてそれは、この場の空気をさらに重たくする要因としては充分なことだ。だから俺は『点滅』するわけにはいかないと思った。

だから口を無理矢理開いた。

「なあ。俺、思うんだ。今日って、クリスマス・イブじゃんか？」

細山は暗い顔つきのまま、

「そうだな。そっぴやそうだな」

と言った。俺は続けた。

「こういつ日ってさ、普通は彼女とか家族とかっていう人々と面白おかしい、あるいは特別な、時間を過ごすもんじゃん。だけど俺たちって、今、男二人でひどく空しいじゃん？」

少しの間。美空ひばりが気持ち良さそうに歌っているのが聞こえて来る。その合間を縫うようにして細山は、

「言われなくてもわかってるよそんなことは」

とふて腐れたようなことを言う。俺は気にせず続ける。

「麗香さんが死んだって話は実に悲しい。正直言って、俺は衝撃を受けたよ。って、誰でも衝撃は受けるだろうけどさ。俺は、めっちゃ驚いた。そしてクリスマス・イブなんて日にこんな状況がやってくるだなんて想像もしてなかった」

「俺だって想像してなかったよそりゃ」

「だろ？ だけどさ、それでいいんじゃないかな、とも思うんだよ」
「…は。どういう意味」

まるで俺の言っていることに意を得ていない様子の細山だったが、俺は続けた。

「特別な日にさ、特別な出来事。でもさ、例えばカップルでいちやつくだとか家族で楽しむとか友人同士でパーティーとかつてさ。特別なことなんだろうけど、なんつうのかな、毎年やる恒例行事みたいなものでさ、ある意味では予定調和的っていうのかな。多分さ、今、俺たちがこうやって男二人で向かい合って麗香さんが死んだっていうことに関する何かしらを話し合おうとしている状況つてさ、そういうパーティとかカップルでいちやつくとかってことに比べるとき、実は随分と特別なんじゃないかって思うんだよ。ほら、見てみるよ、周囲を」

俺に促されて、細山はカップルやら盛り上がってる多人数やらを見た。しかし細山はそれで何か意を得るところか、むしろさらに顔を青ざめさせてしまっていた。だけど俺は続けた。

「一体何がそんなに衝撃的だったのかは、まだ教えてもらっていないからおれにはわからない。そんなに体調が悪そうなお前の助けになれるような事を俺がしてやれるかもわかりはしない。だけど、案外俺はこの状況を楽しんでいるかもしれないよ。楽しんでいるっていうと何か不謹慎かもしれないけど。…つまり、何が言いたいかというとき、細山。あんまりこつちのことは気にしなくていいよ、っていうことだよ細山。だからまあ、そうだな、待つよ俺は。お前が話す気分になるまで俺は時間をかけて待ってるってことだよ細山。そして俺はこういう特別な状況を楽しむよ。周りの常識的なクリスマスの過ごし方に入り込めなくても全然悲しいとは思ってない。だって、こういう特別な状況をそういう連中は体験できないんだもの。だから俺はこの場にお前と二人しか居ない状況を別に悲しんでなんかいないさ。だから気にすんな。俺のことは気にせず、ガンガン、お前が喋りたいタイミングで、喋りたいことを言ってくれればそれ

でいいよ。うん、そういうことだよ」

言い終えた俺は、ちよつと喉が疲れたので、ふさぎこんだ。

そんな俺のことを、細山はしばらくは茫然と眺めていたが、しばらくすると、青白い顔のまま「かつははあ」と変な笑い方をした。そして、しばらく笑い続けた。何か栓が抜けてしまったかのような笑い方だったから、今度は俺の方が茫然とした。そして細山は言った。

「いやー、いや、いや。何だかわからないけど、ありがとよ、おかげで何だか少し面白かったわ。はは、いや、なんつうか気使わせちゃって悪いな。いやー、でもさ、ま、なんか少しテンションあがった。そのことに感謝するわ」

随分と明るい調子になってくれた。青白かった顔にも少し活気が見えてきていた。ちよつと意味わかんないことをいいすぎたかな、とも思っていたのだが、伝わってくれたらしい。デフレ・スパイラルによる悪影響は生じなかったらしい。よかった。

それからしばらく、細山と和気藹々、昔の楽しかったことや悲しいことを話したりなどした。俺たちはとつても雑談をした。で、俺はいつ真剣な話題に入るのだろうか、なんて胸の内で密かにつぶやいたりしていた。

途中、店主桜木がコーヒーを運んできた。二つ。俺は啜った。うまい。細山も啜っていた。いいねさすが桜木さん。とか言ってた。

「俺の中で会心のデキであるコウイーだよ。お前ら運が良いな」

と、店主桜木はいつもと同じことを言ってから、ウキウキな感じで立ち去っていった。アフロをゆさゆさ揺らしながら。店主桜木はいつもご機嫌だ。美空ひばりの歌を聴くことと、いつもと変わらないコーヒーを会心のデキだよ、とご機嫌に言うことさえあれば、店主桜木はいつでも幸せなのかもしれない。こんな店主だから、彼は人気者だ。いいひとだ。

それからまた、しばらくコーヒーを飲みながら、とつても雑談をした。最近の楽しかったことや悲しいことを話したりなどした。俺

は胸の内で、コーヒーうめえ、と三回くらい連呼していた。

で、カランカラン、と鈴が鳴ったとき、話が進展した。

「お、きたきた」

と細山は言った。俺は戸惑った。え、まだ他に人呼んでたの？って感じだった。

そう思うのも当然で、細山はそんなことは一言も言ってなかった。これまで散々、雑談をしていたのにも関わらずだ。

「え、誰呼んでたの？」

何気ない風を装って尋ねてみると、

「あー、悪い悪い。言い忘れてたわ」

とヘラヘラする。ヘラヘラするだけで、誰を呼んだのかを言わない細山。

「こつちこつち」

と細山がその人物を手招きする。俺は息を呑みながら、一瞬『点滅』しながら、細山が手招きしている方角にいる人物が誰なのか、見た。そして、驚いた。

「なんでお前が、ここにいるんだ!？」

驚きながら思わず立ち上がってしまった俺、なんだか恥ずかしい。まるで漫画のようなアクションをってしまった。だが、それほど驚いた。何せ、その入ってきた奴に会ったのはかれこれ、十何年かぶりのことだから。

「久しぶりね、二人とも」

スーツでびしょときめているその女性は、何か、スタイルが良い。でも一瞬で、十年前に転校してどこかに言ってしまった俺たちの友達、柴崎であることがわかったのは彼女の顔は眉毛が印象的で忘れられないからだ。とってもキリツとしているのである。『へ』みたいな感じで。昔は肥満ぎみだったのに今は実にスツキリしている。流行のダイエット法にでも挑戦したのだろうか。

よく昔、一緒にドッジボールをしていた。さっきの昔話でも話題に出てきたのだ。『あいつの投げる球はいつだってまっすぐで、そ

して速かった』、と。

細山の方を見ると、俺の方を見てにやついている。どうやら細山は俺を驚かせるために今まで他の人を呼んでいることを言わなかったらしい。昔話をしたことやなかなか本筋の話に入らなかったことも、彼女が来るのを待っていたからなのだろう。いやー、見事に騙されたぜ！

「へへ。騙されたたる」

俺の心を読んだかのようにして細山が言う。ニヤっとしている。だが、目は笑っていない。細山の表情はよく見ればひきつっていた。おそらく、本筋の話を語らなくてはいけけない決意に、脅かされているのだろう。

「いやー。懐かしいわね、ほんと。…細山、なんであなたそんな寒そうな格好してるのよ。そんなにお金に困ってるの？」

細山の隣に座ったお久しぶりな柴崎は、なる程、性格はあまり変わっていないようだった。彼女は十何年前の時も、なんでなのん？と突っ込みたくなるほどの直球だった。いろんな面で。

細山は、「まあいいじゃん。そんなことは今は」と、少したじろいだから、俺に向かって言う。

「こいつ、性格ぜんぜん変わってないよな。谷口もそうおもっただろ？」

俺は即座にうなずいた。

「うん。全然変わってないな。成長してないのか、ってなくらいに柴崎が俺の言葉に噛み付いた。

「谷口は随分と物をハッキリと言うようになったのね。いつも女の私に泣かされていたような泣き虫だったくせに」

「そりゃ十年以上も年月がたてばね。それに、俺はどうせもすぐ消えちまう人間だからな。こうやってハッキリと物を言うくらいに度胸はつくさ」

うつかり口を滑らせてしまった。これはよけいなことだった。と思ってももう遅い、俺が『点滅』の病を患っていたことを柴崎は細

山から聞いていなかったのだらう、途端、彼女の顔が驚きに満ちた。そしてじろじろと、まるで珍獣を見つけたとでも言うかのような様子で、柴崎は俺のことを観察した。そして、

「あの、話題の…?」

と心配気を含んだ様子で疑問系で尋ねてくる柴崎、に対して俺はわずかどころではない苛立ちを感じたが、久しぶりにあつた友達に苛立つても仕方が無いので、とりあえず俺は細山の話したいことを聞きたいという思いもあるので、「ああ、そうだよ」と素っ気無いことを言ってから、細山に対して「なあ。クリスマス・イブがもうすぐ終わっちゃうぜ。クリスマスになつてから暗い話を聞かされるなんてゴメンだ。細山、話したいことはさっさと話してくれよな」とか、さっき言つてたことをまるで帳消しにするようなことを言つてしまう俺。デフレ・スパイラルの影響に違いない。

細山はそんな俺の言い草に対して、ムツとしたのだらう、片眉を吊り上げたが、しかし彼もとうにそういう話をする覚悟は出来ていたらしく、

「ああ、わかつてるよ。そうだな、刑事さんもやってきたわけだしな」

と言つた。俺が「刑事?」と言つと細山は柴崎の方へと顎を向けた。柴崎の方に顔を向けると、柴崎は「ああ。そう、まだ君には言つてなかつたよね」と言つてから、スーツの懐より取り出してきたものそれは警察手帳だった。

「刑事になつたの?」

本日何度目だらう、俺はまたも茫然としてしまい口をあんどくり開いた。

柴崎は、自分がその職務についていることが誇らしいのだろうか、テーブルを挟んで向かい側に座っている俺に聞こえるくらいに気性の荒い鼻息を吹いた。

「そつよ!」

その言い方があまりにハッキリしていたので、俺は思わず苦笑し

た。

細山もそんな感じだった。

死を想え

その時、細山は警備員のバイトをした帰りだったのだが、道の途中喧嘩している連中を目撃して、巻き込まれるのは嫌だったのであるべく近寄らないで通過しようと思っただが、そんな風にこそこそしている細山が目立ったのだろうか、喧嘩している連中の内の誰かに絡まれ、結局、巻き込まれた。

そこから最悪だった。ただでさえサンダルを履いていることを他のバイト野郎から馬鹿にされた後だったので、細山もイライラしていた。だから、細山は相手の挑発に乗った。

細山は昔、空手をやっていた。だから細山には勝てる自信があった。

「ヘツヘー！」

とか言う頭の悪そうな挑発をしてきたピアス野郎の顔面に細山は追い突きをした。バコ、バコ、と計二発の突きを容赦なく相手の鼻めがけて放った。頭の悪そうなピアス野郎は、

「ち、ちくしょう。流狼さん、任せましたッ！」

と言つて筋肉ムキムキのボディビルダーみたいな大男にすぎた。だが、哀れなりピアス野郎、「弱者が俺にすぎるな」と言われてからその流狼とかいう大男にぶん殴られて星になったのだった。

で、細山も驚いた。さっきまでいろんな奴が入り乱れて喧嘩をしていたというのに、いまや立っているのは細山と、流狼という大男だけだったからだ。それ以外の男たちは、みんな流狼に打ち負かされてしまったのだろうか、もがき苦しみながら地面に倒れている。

細山は流狼という男の強さに恐れをなし、降参したくなかったが、男としては今更引き下がれなかった。引き下がる理由がなかった。

で、ぼこぼこにされそうになった、が、

「尾ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ」

と叫びながらの連撃を細山は全てかわしてみせた。細山は自分で

自分に驚いた。俺、すげえ、とか思った。だからやる気になり、このままいけば俺が勝者かもしれないと調子付き、思い切ってみよう、ということでも中段突きを流狼に放った。だがそれが失敗で、流狼の鍛え上げられていた腹筋にめり込んだ拳は、突いたら最後、引くことが出来なくなった。あまりにも鍛えられている腹筋は敵の拳を拘束するのだ、ということを知らされた細山は、戦慄し、土下座三百回を試みたいという思いに駆られた、が、駆られている内に仕返しということだろう、流狼からのすさまじいボディーブロー。結果、「うぷっ」と嗚咽しながら地面に倒れそうになる細山。それに追撃を加えようともいうのだろう、流狼はニヤツと不適な笑みを浮かべた後に、膝蹴りをするような構えをみせた。それは細山の顎へと一直線なルートを描くこと必須で、細山は死を覚悟した。真剣に。

その瞬間に、「やめなさいッ！」という声が響いた後に、拳銃のパン、パン、という音。え、この国ってそんな気軽に拳銃撃っちゃっていいもんだっけ、とか思いながら細山はぼやける視界の中で救世主が現れたことに感謝を示しながら、倒れた。

そう。細山を救った人物。拳銃を街中でぶちかました人物。それが柴崎だった。彼女と細山は十何年ぶりの再開を果たし、そしていつか思い出話でもしようということでもメルアドを交換して、二人は別れたのだ。

その数日後にメール。その時細山は、暇だったので筋トレをしていたけど筋トレのしすぎで体の節々が悲鳴を上げていた。だから休憩の意味も込めて、彼は携帯を手を取った。

普段からいろいろな人とメールをする細山は何の気も無しに受信BOXを開いたが、そこで驚愕した。まさか蔵山を無くしたばかりの麗香からメールが来るとはちょっと想像していなかったからだ。というのも麗香とは元々そんなに繋がりが無かった細山だから、自分に彼女からメールが届く理由がよくわからなかったのだ。

蔵山のことでも何か聞きたいことがあるのか、と思いつつ、彼はメ

ールの内容を開いた。

そしてよけいに混乱した。

『今からあなたの目の前に広がる光景は、全て私一人の手によって形作られる光景です。どうか目に焼き付けて、そして心に焼き付けていただければ光栄です』

どういいうイタズラなんだこれは、というのがまず第一の印象だった。だがすぐに、「これは何か返信をした方が良いのかもしれない」という思いになった。

細山は、麗香が蔵山を失くしたことによるショックから自暴自棄な行いをしているのかもしれないと考え、このイタズラのようなメールもそういった麗香の自暴自棄の内の一環なのではないかと感じた。だから彼はしばらく、頭を捻って、どのような返信をするべきかと悩んだ。或いは、何も返信せずそつとしておいた方が、後々に彼女に恥ずかしい思いをさせないのかな、とも思った。

このとき細山は、実際に目の前にある光景に何かしらの変化が生じるだろうとは想像しなかった。彼の周囲にはPCとテレビ、窓、冷蔵庫、本棚、といったものしかなかったし、それはいつも通りに細山の部屋の中で位置も変えずに、いつも通りに存在しているだけだ。

それが麗香からのメールを機会にして何らかの変化を起こすとは、想像に難しかった。

だが、細山が彼女のメールにどう対応しようかと考慮している途中、変化は生じた。

細山はその変化を受け入れられない。リモコンの電源スイッチも押していないのにテレビ画面が点灯するなどということは、それはホラー映画の中で使われる演出であり現実に起こることではないと信じていたからだ。だが、彼の目の前で、テレビは勝手に点いたのは間違いなく現実だ。

「……ま、まじで？」

本当に信じられないような出来事に遭遇すると自然と苦笑が浮か

ぶものなのだと細山は教えられた。

その映像を見ながら彼は即座に行動を起こした。携帯のカメラを起動させて、ムービーモードにすると、テレビに映っている映像を彼は録画したのだ。

約、五分程度だろうか。細山はその間ずっと生きてる心地がしなかった。背後に何かか忍び寄ってきているような不快感もあった。だが、彼はテレビに映り続けていた麗香の無残な姿を、録画し続けた。

五分後に、テレビは自然と真っ黒になった。電源が勝手に落ちたのである。

それに伴って録画をやめた細山は、鳥肌がしばらくは治まらなかったが、深呼吸を何回も繰り返すことでなんとか心を落ち着かせた。そして冷静になった頭で、彼は、『これは誰かに相談しなければいけない。迂闊に警察に連絡するのもまずいかもしれない』と考え、じゃあ誰にどのようにして相談しようと考えて、数日前に刑事になった幼馴染に助けられたことを思い出し、警察といえども幼馴染にならば相談もしやすいということで、すぐにメールを打ち込んだ。

続いて、谷口にも相談しよう、と思いついた。谷口も柴崎に会ったら驚くだろうし、それにあいつはどうせすることもないだろうから相談にものってくれるだろう、という風に思った細山だった。

彼はこのとき、冷静にはなっていたが、谷口が『点滅』を患っていることを一時的に忘れていた。一緒にバイトをしていた頃も最近のことだったので、なんだか距離感が近すぎることによって谷口が『点滅』という病で死に近づいているということが、細山には実感として湧かなかったのかもしれない。だが、メールを谷口に送りつけてから、細山は『点滅』のことを思い出した。そこで、『やめとけばよかったかな不安をあいつに与えるだけかな』と脳裏に過ぎらせたが、しかしメールはもう送りつけてしまっていたので、取り返しはつかなかった。

細山はため息をついてから、待ち合わせの場所に指定した『ぶろ

んずカ・フェ』に向かうための仕度をはじめた。といつても、風呂に入るとか顔を洗うとかいう程度のことだったが…。

風呂から出た後になって、事態は自分が思っているよりずっと深刻なんじゃなかるうかと細山は焦り始め、そしてこんな状況で風呂に入ったりなどしていた自分自身の行動にも多少の違和感を感じた。だから細山は、不気味だった。何かが近くに潜んでいるような気がして、落ち着かない。

次第に気分が滅入ってきたので、待ち合わせの時間にはまだ早かったが、彼は外に出た。

外に出て表通りを歩き始めて、本日がクリスマス・イブだったことに気が付いた細山は、歩いていくカップルが通り過ぎるたびに、そこに蔵山と麗香が腕を組んで歩いていることはありはしないだろうかと、想像した。もちろん、その想像は現実のものとはならない。途中から、蔵山と麗香に、背後からにらみつけられているような錯覚を覚えた。だから細山は、何度か背後に振り向いたりした。なんとなく二人と雰囲気似ているカップルが後ろを歩いている時は心臓がトクンと跳ねた。

落ち着かない気持ちのままに、細山はぶろんずカ・フェの目の前にまで到着した。その時にはもう随分と消耗していて、彼が店内に入ったとき、「大丈夫か？　なんか調子が悪そうだ」と店主に心配されたほどだった。ちよつと風邪を引いたみたいで、という嘘の理由を話してから、しばらく店主と世間話をした細山は、ある程度気分を落ち着かせてから、一つの座席に腰を下ろして、待ち合わせの時間になってもやってこない谷口と柴崎の適当さに呆れつつも、それがなんだか微笑ましい気持ちもあった。

けどどうしても、蔵山と麗香が近くに潜んでいてこっちをジッとにらんでいるのではないか、という想像が湧いてきた。それは携帯電話にあの映像を録画したから生じる想像なのだろうか、と考えると携帯からあの映像を消した方がいいだろうか、と細山は考えたが、そんなことをしたら自分がどういう状況に追い詰められている

のかを谷口と柴崎に正確に伝えることが出来なくなってしまおうという思いから、やはり消すことはできなかった。だから細山は、谷口が遅刻しつつも何故か長靴を抱えて店内に入ってくるなんていう微妙にへんちくりんな感じに出会うまでは、気持ちが落ち着かなかった。だが、やはり一人よりは二人、二人よりは三人ということなるだろう。柴崎もやってきたころになると、細山は気分が落ち着いてきた。睨まれている、という想像はどうにもチラついたが、それによって不安な気持ちが巻き起こり話す気が起きなくなる、なんてことはなかった。それはやはり、友人たちと一緒に思い出話などで盛り上がったことと、店主桜木のコーヒーが温かったこと。二つのプラス要因があったことが、細山の気持ちの負担を軽くしていたのだった。

そして彼は二人に映像をみせた。

先ほど録ったばかりの、狂気的な映像だ。

そして三人は、一つの言葉に気持ちを捕らわれるようになった。

その映像に五分間、映り続けた一つの言葉。

それは有名な一言だから、三人とも意味はわかった。

『メント・モリ』

死を想え。

手当て

街頭。細山と柴崎は今頃どうしてるだろうか。あんな映像を知った後で、見た後で、二人はどんな思いで生きているだろうか。俺は、生きてる心地があんまりしない。何が、メメント・モリだ。俺は『点滅』を患った時から随分と死について想っているよ。言われなくたって、頭の中で生きることと死ぬことが混じり合っごちやごちやだよ。おかげさまで、映像に『メメント・モリ』と書かれた血文字が壁に塗りたくられてるのを五分間も見せられたおかげで、すっかり二人の目の前で『点滅』しちまったよ。二人とも、悲しそうな気まずそうな、一言で表すには難しい表情をしていたよ。まったく人を幸福にさせることを目的にしていたというのに、それをやってしまったせいでもたデフレ・スパイラルでぐるぐるぐるぐるな感じだよ。ふざけんな。

しかし…十字架はあまりにもナンセンスだ。何を気取ってやがるんだ。麗香さんはどうせ別に宗教とかも信じてない類の日本人だろう。そんな人間が十字架なんか自ら磔にされて、手に釘を刺して血をだらだら流し、腹からも出血させているだなんて。ていうかあんなの自分一人で出来るわけねえだろ。誰かの手を借りたんだろ。そういうことを趣味にしている引き受けちゃう頭のヤバイ奴に依頼かなんかして、やってもらったんだろ…。…なんでそんな映像を細山に五分間も見せ付ける必要があったのだろうかは知らないが、イタズラのレベルは遥かに超している。何か恨みが無かったらあんなことしないぞ普通。それが気が狂ってたかのどちらかだろう。

『今からあなたの目の前に広がる光景は、全て私一人の手によって形作られる光景です。どうか目に焼き付けて、そして心に焼き付けていただければ光栄です』

顔面が蒼白になっていて、目が虚ろで、口からだらしなく舌が垂れていた、麗香氏。

非現実世界でゾンビとして登場するような死を象徴させる顔が、俺の頭にトラウマとなってこびりついたような気がする。これから一ヶ月間、フェイド・アウトするまでの間、俺は多分何度もあの顔を思い出すに違いない。出来れば、もう二度と拝みたくない。

細山も、あんな映像を一人で抱え込むのは辛いだろうけど、相手を少し選んで欲しかった。そりゃ、俺たちは友達さ。だけど、俺、ただでさえ余裕無かったのに…いい加減に溺れちまうぜよ…。

そうやって思いながら、街頭で演説するボンボゾウラ「松山」グレン主を見ている。

普段、俺は政治家たちの演説なんて聞かない。好みじゃないからだ。だけど今、俺はクリスマスの夜に演説をはじめたグレン主の演説を聞いている。それなりに。他の連中はほとんど足を止めていないが、だが一部の連中は立ち止まっている。そういう奴は、大概、俺と同じ境遇の奴だ。

『点滅』を患っているヤツラが『点滅』しながら演説を聞いている様は、実に虚しいものだ。

そして俺もその一人。今は『点滅』していないが、この演説がドツキリだったという話が出てこないならば、俺はおそらく自室に戻るまでの間ずっと、『点滅』することだろう。もしかすると、今日中にはフェイド・アウトしてしまう可能性もある。

あまりにも理不尽だ。

「あなたの命の灯火がツ！ あなたがこれまで燃やし続けてきた命の炎が、燃えつき尽きてしまうまえに！ どうか、ボランティア精神のような、慈愛の心をもってして、他の、あなたたちと同じように何かの病で苦しんでいる方々のために、命を分けてあげて欲しい！ それが私、ボンボゾウラ「松山」グレンからの心底の 願いでございます。どうか消えてしまっ前にあなたの健康な身体の一部を他の人に提供していただければ、と思います。役所に申し出てくだされば手当ても出ます。一年間働いて手に入れることが出来るほどの金額になる予定でございます。…これで、私から言っておきたい

ことは全てです。どうか、みなさん、慈悲の心を。慈愛の精神を……」
何を言っているのだろうか。何が慈悲の心だ。何が慈愛の精神だ。その場で『点滅』している多くの連中はこの演説を聞いたあとに誰一人として幸せそうな顔をしていない。みんな俯いているじゃないか。こんな風に消耗している人々に対して一国の主であるお前は何ゆえにボランテニア精神などとほざくのか。助けてもらいたいのはおつちの方なんだよ！突然、原因不明でなおつかつ治療不可能の病気に襲われた俺たちが、何で、慈愛の精神を持てるっていうんだよ。持てるわけねえだろ。俺が今ボランテニア精神を發揮するならば、俺はな、今すぐその壇上から俺たちを見下しているお前を絞め殺すよ。首根っこを掴んで、何がお前にわかる、と言いながら俺はお前を全力で絞め殺す。それが俺に出来る唯一のボランテニア活動だろうよ。

お前の意見に従って金をもらうくらいなら、今すぐ消えた方がマシだよ、ボケ。

だがグレン主を支持する奴もいるらしく、数人の『点滅』している輩が拍手をしていたりもした。

どうして拍手をするのか俺には理解できなかったが、まあ、それを否定する気力があるわけでも無い。

話を聞いている奴全員が『点滅』している。傍から見たら実に気持ち悪い光景だろう。その中にいて自分自身も『点滅』している俺でさえ、この状況が実に気持ち悪いものに感じる。でも俺たちは今はまだ生きている。消えてなんかない。たしかにここで、『点滅』しながらも存在している。

健常な人々は立ち止まらない。それは俺たち『点滅』を患っている人間が何人も一箇所に集まっているのが気持ち悪く、そこに混ざりこむ勇気が湧いてこないからだろう。みんな憐れみの視線もしくは恐怖の視線だ。俺たちに対して、眉を潜めたり、目を反らしたり。一度、グレン主が、付けているロイド眼鏡を取り外し、ごしごしと目を擦っていた。おそらくあまりにも俺たちが『点滅』をしてい

るせいで、自分の目に異常が生じているのではないかと疑ったのだろ。けどその点に関して言えば、彼には安心してもらいたい。異常なのは俺たちなのであって、あなたではないのだから。あなたは一般人だよ、人間として。

麗香氏。『点滅』。フェイド・アウト。細山。蔵山。柴崎。詩燐。現実逃避。クリスマス・靴。

何だか、疲れた。色々と最近、疲れた。クリスマスだからって何も楽しくなんか無い。幸せな連中の中で自分が不幸を撒き散らしていると自覚させられるだけでも何だか疲れてくる。まあ、『点滅』してる奴のことなんかみんな気が付きもしないんだろうけど。眼中にも入れないんだろうけど。こうやってワラワラと集まってみて始めて存在を認知される。『なんだ、あれ』と言ってね。

だからきつと、フェイド・アウトする時には誰にも気づかれずに消えるのだろうよ。ひっそりと…。

蔵山はどんな気持ちだったんだろうか。彼には愛する人がいて、その人に心の底からの心配をしてもらいながら消えていった。そしてその心配をした麗香が、蔵山の後を追うようにして死んだ。細山に奇妙な光景を垣間見せてから…。

ああ、もう帰ろう。家に帰って、炬燵に入ろう。

デフレ・スパイラルを降り下っていくだけだ。起きてても馬鹿なことを考えちゃうだけだ。意味の無いことばかりを…。帰ろう、もう、帰って眠りにつこう。

それか、L E T / S 現実逃避だな……。

ぬいぐるみ

王としての毎日は実に気楽ではあるが、もちろん、どんな仕事にもある程度の苦痛が生じることと同様、王という役割にも辛辣な部分というのはあるのだ。

例えば、「第三次ぬいぐるみ戦争」で敗北した連中が今、わしの目の前にいるが、こいつらの処分をわしが責任を持って決定しなければならぬのだから辛いよ。人の生死を何だつてわしが決めねばならぬのだ。いくら王とは言え、ちよつと責任重くない？人生が重たくなつちゃうわい。

とか、まあ、思つちゃうわしはなかなか繊細な良い子ちゃんだが、しかしここは非現実世界なのであるからいくらぬいぐるみちゃんたちの生命を奪つた所で、なんらの責任も実際にはありはしないのだ。だからわしは呆気なく判決を下しちゃうよ。ウサギだとかチワワだとか鶏だとかカンガルードとかの着ぐるみを着ている君たちにわしが下す判決は、死刑じゃい。ぬほほ。

ギロチンの刃がすとん、と落ちればぬいぐるみ頭部がごろんと転がる。先日も、敵のリーダーだったペンギン君の頭部をごろんと殺つて殺つた。彼の立派だったところは、普通のぬいぐるみ野郎はみんな死ぬ直前には汚らわしく暴走するのが常だが、ペンギン君はギロチンにちよん切られる瞬間までずっと誇り高かった。彼は誇り高き戦士だった。リーダーになるべくしてなった人材だったのだろう。そんなペンギン君の頭部は今、わしの部屋で戦利品の一つと化している。大切に飾らせてもらっている。そして今は、ペンギン君の部下だった連中の始末をつけているところなのだが、こいつらがもうみつともなく、死にたくない死にたくないみたいなおーラ全開でこちに擦り寄ってくるのでうつとおしくて仕方が無いため、ギロチンで苦痛を与えずにすっぱりと殺すのではダメだ、お前らみたいな情けないやつは拷問に合わせてから殺そうかな、なんて思わされる

程に彼らはうつとおしくて、みつともなくて、生に対する執着が凄まじいことがびんびん伝わってきてイラつく。

まあ、拷問するのにも拷問師を雇う必要が出てくるのでお金がかかるし、自分で拷問するのは何だか体力が消耗してしまうだろうし、仲間内にも拷問をすすんでやりたがるようなサイコ野郎はいない。だからやつぱり、手っ取り早くギロチンでペンギン君の部下たちを始末する。かれこれももう三十ぬいぐるみくらいはギロチンで殺った。その頭部はわしの部下に平等に分配している。頭部を戦利品として手に入れた部下はとても嬉しそうな顔をする。敵の頭部を手に入れるということはぬいぐるみ戦士として一人前になったという証になるからだ。

それがわしらぬいぐるみパンダ族の、昔からの慣わしじゃ。

わしらぬいぐるみパンダ族は昔はそれはもう貧弱の部族として他から見下されており、エネルギーの源である笹なども嫌がらせなどで碌に食べさせてもらえなかったこともあった。しかし、転機はあった。天才児であったわしがぬいぐるみパンダ族に降臨して無双したことにより、我が一族の株は一気に急上昇。わしのおぼれを授かりたいと願うぬいぐるみ達が集結して配下となって戦力が上昇し、その噂を聞きつけた他の部族のぬいぐるみたちがまた駆けつけてくれて配下となってくれたので戦力が上昇し、という風にわしという天才児が出現してからぬいぐるみパンダ族はどんどん脅威的な存在として世界から恐れられるようになったのだ。

無論、ライバルも増えた。

わしらの仲間にはならなかったプライドの高い連中は、わしを目の仇にしたのでもう大変だった。暗殺されそうになること千回くらいだろうか。まあ、全部予測しててなおかつ暗殺者の動きを全て見切っていたので、殺されなかったけど。むしろ…いや、これについては語るまい。

と、まあ、いろいろと黒いこととかもあったけど、そういう様々なぬいぐるみ同士の争いがあったって、近頃ついに第三次ぬいぐるみ戦

争が終結したというわけだ。そしてわしが率いるパンダ族が大陸を支配したのだ。

だが最近、また問題が生じたのだ。こういうのを黒船襲来というのだらう、連中は突然、海を渡ってこの大陸へと現れた。そして、厚顔無恥なことにわしらを支配すると言い出した。

彼らはぬいぐるみ人間族という部族だ。連中はぬいぐるみ猿がちよつと賢くなつた程度のもののだが、何か知らんが常に他のぬいぐるみ部族を見下すし、厄介なことに手先が器用らしく、よくわからない武器をたくさん開発してきてそれを容赦無くぶち込んでくるのでまじム力つく。

この間は人身御供弾とかいう名前の弾丸を開発したらしく、たくさんぬいぐるみ人間が城に突き刺さつてきやがった。屋根とか突き破つて、部屋の中もしくは通路とかに入り込んできて、何をするかと思つたらそれぞれが一人で戦おうとすんの。「天誅じゃー！」とか言つて。で、目がキ　ガイの目ですよあれは完全に。血走つてるし瞳孔開いちゃつてる感じだし。

ぬいぐるみ人間族はまじで狂気の沙汰な連中だから、付き合つてられん。まともに戦おうとするとこつちも痛い目に合うどころではなく地獄の業火に焼かれること間違いなした。なんつたつて敵の本拠地に人身御供となつて突っ込んでくるんだものな。意味わかんねえよ。こつちも殺り辛えよ。まあ、殺すけど。そこをためらつていてはこちらがやられてしまうからな。

まあ、ぬいぐるみ人間をもう何人が殺してしまったので手遅れかもしれないが、わしらパンダ族は、実際、もう戦争はうんざりだから戦う気が無い。大陸統一のために、これまでたくさん地獄を見て来たし、戦争は損失が大きいばかりで得る物は少ないということも学んでいるのだ。

だから人身御供弾なんていう、無理矢理戦争の引き金をひいちゃおうなんてやり方を止めさせる必要があつた。

時間は無い。

急がなければ、ぬいぐるみ人間族は彼ら同士での戦う意志を強めてしまうことだろう。

「人身御供が殺された！ その復讐のためにあいつらぶつ殺す」

みたいな空気になることも考えられる、世論がお上にコントローラされて。なんて恐ろしいんだぬいぐるみ人間族、こっちの事情まるで関係なしじゃねえか、無理矢理戦いをおっぱじめて大陸の広大な土地をGETしちゃうつもりだぜよ、おい！ぬいぐるみパンダ族の誇りにかけて、大陸をあんな無茶苦茶野郎どもに侵略させたりはしない。わしは、これ以上、あいつらを一步たりともこの大陸には歩かせない！誇りにかけて！ぬいぐるみペンギン君のように、勇敢な心で！

だからわしは、愛しい妃、そして、わしの同士たちに。

別れを告げることを決意して、一匹、黒船へと乗り込むことを決意したのだ。

そしてわしは。違う、俺は。そうだ俺は、船内に入ってどうしたかというつまり負けたくなかった。俺は負けたくなかったのだ。何に負けたくないのだ？死ぬことに負けたくないのか？それとも生きることに負けたくないのか？何を言ってるかわからなくなりそうだが、まあいい、ほら詩燐、お前がぬいぐるみ人間族の首領だったんだな。俺はお前を殺すよ。刺し違える覚悟でここにきたんだ。ぬいぐるみパンダ族のみんなと、広大なる土地を守るためにね。詩燐のやり方はあまりにもひどすぎるでしょう、なんつったって冷たいよ。何が人身御供弾だよ詩燐。こうなったら俺がパンダ殺法を使ってお前の目を覚まさせるしか他に方法は無いな。

「目を覚ますのはそっちのほうだよ」

何を言っただやがる。俺の意識は随分とハッキリしているし、ほら、頬をつねってみれば痛みだつてあるよ。ああ、パンダの毛並みって気持ち良いね。ちょっとこの着ぐるみ暑いけどね。通気性が悪いのがたまに欠点ね、なんていつも愛する妃と話していたものだよ。まあ、そんなことはどうでも良くて大切なのはな、詩燐、お前らぬい

ぐるみ人間族を撃退することによって俺が誇らしくなることなんだよ詩燐、わかつてる？

「いつも通りのあなたですね。それでこそ消えるにふさわしいです」
ひどくない？その言い方はひどいと思うなあ。不幸を撒き散らすような『点滅』の存在は哀れまれることはあってもいいが、消えるにふさわしいなんて言われる筋合いは無いよね。少なくとも一般的な、健常なあなたには言われたくないよ。お前らぬいぐるみ人間族にぬいぐるみパンダ族の気持ちがわかるのか？大陸統一がされるまではたくさんの血が流れたのだ。たくさんの黒いことも皆で仕方なくやって胸糞悪くなりながら自棄酒をがばがば飲んだりしたんだよ。それに比べてぬいぐるみ人間族はひどいですね、人身御供弾という脳筋でも思いつかないような突拍子も無いことをやってしましましたね。

「あたまが混乱していますね。そろそろ、目を覚ました方がいい」

あ？ここはどこだ？

「寝ているんですよ。頭の中です」

あ、そうか。

逃げ

これまでの現実逃避とかさつき見た夢とかから分析するに、俺はどうやら権力志向の人間らしい。もしくは、権力が手に入る才能がないからそれに対して嫉妬と羨望を感じるのかもしれない。まあ、どうにしろ、夢の中でもLEET、S現実逃避と同じような世界に行ってしまう時点で、やはり俺はまともな人間ではない。不幸を撒き散らす不況人間だ。何？不況人間って。まあ、どうでもいいけど。「どうでもよくはないです。もうちょっと、しっかりと」

珍しく詩燐が起きている。そして今、心を読まれていた。

「言っていますでしたっけ？ 私、あなたのことなんて、何でもわかつちやうように出来てるんで」

嘘付けよ。だとしたら俺が今までお前に対して思ってきたことが全て筒抜けだったということだろ？男としてウツハツハハハ、なんてことも全て見抜いていたというんでしょうか、まさか。

「はい。気持ち悪いなあ、と思いながらあなたの心よりの呟きを耳に入れてたね。でも、あなたが傷ついちゃうかなあと思って、あんまり突っつかないようにしてたんですけど。あなたがあまりにも情けない体たらくなんで、まあ、突っついてみたという次第なわけで」

「ひでえ奴だな」

「あなたよりはマシでしょう」

容赦ない言葉をかけてくる詩燐に付き合っていると『点滅』が生じそうだったので、「黙っててくれ」と言い放つ。目に光。窓から差し込まれる朝日の輝き。一日が、はじまっている。

何するかな、何もしたくないな、と思いながらぼーとした感じで部屋内を見渡すと、畳にこびりついていた赤色のよだれが無くなっていた。畳が綺麗さっぱり。

詩燐が綺麗にしたのだろうか。と思いながら詩燐を見ると、なるほど、無表情のままにジツとこちらを見つめている。にらみつけて

いるようにも見えるが、まあ、見られている。

詩燐がやったの？みたいなことを尋ねるジェスチャーをしてみると、うんそうだよ、というようなジェスチャーが返ってきた。

どうやれば、あんなにも汚かった畳がこんなにも綺麗になるのか、その方法は詩燐自身は知っているのだろうが、人間には予想が付かないので考えても思いつかないだろうね、と感じつつ、また思うのは何しようかな、何もしたくないなあ、ということとで飯を食べる気力も湧いてこねえ。

なんかねえかなあ、つって目に入るのは畳以外はボロツボ口の部屋。築何十年かの部屋であるからして蜘蛛の巣の一つや二つは当然だし、壁は無理を三回くらい通してようやく趣があると言える斑模様。この部屋もリフォームの必要があるだろう。以前宝くじが当たった時の金はまだ残っているしな。

実際、俺は金には困らない。まあ、命に期限が付いてしまっているのが問題だが、宝くじでめっちゃ金が入った時が数年前にあつて、で、その金のおかげで生活に余裕が生まれたので暇つぶしにバイトをするっていうライフサイクルを送っていた。で、そのお金を使って百畳大広間ルームを業者に頼んで作ってもらったというわけだ。ふふ、業者、業者という響きが俺は好きだ、なんてはしゃいでいた数年前。あの時は、『点滅』なんて社会には存在していなかったし、蔵山だつてバリバリにエリート目指して働いていた。で、俺は楽しくも辛くもないが、しかし幸せな生活を送っていたのだ。平凡な毎日。なんとなく過ぎていくけど、今のように精神がごちゃごちゃになることなんて無かった生活。クリスマスには街に躍り出て友達同士、細山や蔵山とはしゃいだり、女の子と遊んだりなどしていた。そんなフリーター生活。俺は、そんな毎日を確かに数年前生きていた。今となつてはあの頃の俺が物事をどのように考えながら生きていたのかすらも覚えていない。あの頃の俺は、何が楽しくて何を悲しいと思っていたのか。何で百畳大広間ルームなんて酔狂なものも業者に作ってもらったのか。今の俺には、あの頃の俺が何

を考えて生きていたのかまるで見当がつかない。わからない。『点滅』になる前となった後では、人生の色はまるで変わった。俺はおそらく性格が変わった。それが、別人になった。病が俺という人間の性質を百八十度変化させた。災難っていうにはあまりにもひどいでしょう。クリスマス・イブの街並を穿って眺め、グレン主に悪態を付けて殺意を抱き、現実逃避や夢の中でガツガツした権力志向。以前の俺だったらそんな風な態度はとらなかった。もっとほがらかな性格をしていたと思う。平和主義者みたいなほがらかさで生きていたはずだ。

「そんなことはないですよ。あなたは、ひどい人間でした。平気で人を傷つけることを言ったり、平気で人を馬鹿にすることを言ったりなどしていました。それだけならまだマシで……つてえ……」

俺は、『点滅』している手の平で詩燐の頬を、ばちこーん、と叩いた。詩燐の肌が潤っているせいだろうか、やけに景気の良い音が鳴ったものだった。詩燐は俺を無表情で睨んだが、まあ、そんな視線は痛くも痒くもないし、ていうか、なんか血行が悪い気がするから風呂はいろいろ、とか思う。

あ、その前になんか飯とか、あと脱水症状にならないように水くらはい飲んどこう、と思つて冷蔵庫から水を取り出しがぶ飲み。500mmに満杯だった水を一息で飲み干してから、なんか食えるものねえかな、つて冷蔵庫を探つて、クリスマス・靴が視界に入ったで、食べられるかな、とさすがに躊躇したけど、一口食べてみたら案外食える、つてことがわかったからバクバク胃に放り投げちゃったりして、もう何だか俺はお行儀が悪い。でも、そんな自分がどうでもいいから、バクバク食べ続けて、何時の間にか完食。食べている間ずっと背後からの詩燐の視線が痛かった。

「満足した？」

詩燐が言う。俺は、

「当然じゃん」

と答えてから、長靴をゴミ箱に捨てようと思ひ、立ち上がった。

「残り一ヶ月で消えてしまおうと言ってもあなたはまだ生きている。ここで存在している。そういう風に昨日のあなたが言っていたのを、私は知ってる」

「人間は毎日言うことがコロコロ変わるようになって来るんだよ。特に、いい加減な奴だとか人生にうんざりしてる奴なんてのはそうだし、だから不幸になるんですね」

「不幸になったからそうなったんだよ。鶏が先か卵が先か？ ははは、知らんわそんなの」

だから不幸になるんですね。その言葉が頭で反響した。

ゴミ箱が途端に、遠い。

足が重たい。持ち上がる気がしない。足は持ち上げるものなのだと気付いた。

「……………どうしたんですか」……………

声が遠い。ぼんやりだ。長靴をここから投げて、ゴミ箱に入るだろうか。

ほいつ。外れた。

「……………だから不幸になるんですね」……………

「……………おなじことを何回もいうな」……………

自分の声も反響して聞こえる。ここはいつのまにか風呂場だったのか。

気分が悪い。むしゃくしゃする。

頭もぐらぐらする。腕が重たい。いや違う、手が重い。

切り落としてえ。

そしたらまた不幸になる。デフレ・スパイラル。不況人生だ。

「……………コメント・モリ」……………

あ、詩燐？なんで知ってる。ああ、そうか心を読んでいるから。

「……………違います。あなたがクリスマス・靴を投げた時に靴から出て来た紙くずを広げてみたら、書いてあったんですよ」……………

……………
んなわけねえだろ。確かあの時は…なんて書いたのかは忘れたが、

メメント・モリとは書かないよ。普通に考えて、書かないよ。

「……………」しかし書いてあるよ。見る？ ていうか、急に落ち込みすぎじゃありません？ ケーキが身体に悪影響でも出したんじゃないですか？ まあいいや。これ、見ればわかりますよ。書いてあります、メメント・モリ「……………」

んなわけねえだろ。

って、あ、本当だ。

びつくりだな。書いてある。だけど、だからどうした。

「……………」メールも届いていますよ。これは、柴崎さんからですね。ええと、……………」

なんで黙るんだ。

「……………」それは「……………」

うん。

「……………」言っ…いいんですかね、これ「……………」
いいよ。

「……………」細山さんが死んだそうです「……………」

そうか。死を想ったのか。

やはり俺は不幸を撒き散らすために存在している人間だったようだ。細山が死んだのは俺に出会った次の日、というタイミングだ。ならば原因はやはり俺にも多少はあり、俺が幸福を撒き散らす人間だったら細山が死んだというメールが柴崎から届くことも無かつたと思う。だけど、俺はあの時「ぶろんず力・フェ」で『点滅』をした。きつと、それがいけなかった。何がどう関連しているのはわからないけれども細山は可哀想だ。死んだ。蔵山も可哀想だ。死んだ。俺も可哀想だ。もうすぐ死ぬ。

メメント・モリ。ポジティブな意味の言葉だと言う。

しかし今俺がメメント・モリと呟くことによって、この言葉はネガティブな意味を持っているような言葉になってしまう。俺の不幸が、メメント・モリという言葉の意味すらもマイナス方向へと持つ

ていくのだ。

もう逃げよう。ここにはいけない。全てを不幸にしてしまうような気がするから逃げるのだ。だから俺は可哀想だ。だから現実逃避する権利もある。そして現実からいなくなる義務がある。だから俺は『点滅』を患った。昔から存在していても周りを不幸にする存在だったから、俺は『点滅』を患う必要があった。だから一般人の人からも見捨てられなくてはならない。グレン主は正しい。『点滅』を患った人間は元々が屑だったからこそ、消える必要があるのに、そんな人間の体の一部をまっとうな人々に分けてあげても良いと言う。お金もくれると言う。

素晴らしいとしか言いようがない。だから一般人は素晴らしい。だから俺は、逃げていい。

バイバイ

外に出た瞬間に眩暈。少し風が強いらしく、木々がざわざわとうるさい。ざわめきのせいだろうか、頭に浮かんだ光景は紅葉街道。すごかったなあもう一回みたいなあ。でももう枯れてしまっているだろうあの世界でも。聖獣を取り込んだあの世界での俺。強かった。腰が曲がっているおばさんが杖を突いて歩いている。茶髪の大学生っぽいイマドキの女子が、颯爽と歩いている。男子高校生二人がチャリンコをこいで楽しそうな談笑。むっつりとしている少年が金属バットとグローブを持って歩いている。ひざをすりむいてる。痛そう。

俺はどのように見られているでしょうか。他人からは。でも、そんなことは不幸を呼び出すから考えなくていい。ただただ、歩けばいい。何も考えずに今は、柴崎に会いに行こう。

気だるい体に気だるい相談。照りつける太陽に悪態。ハッ、なんて言っただってしょうがないじゃん太陽なんて気にせずに行くんだ、なんて独り言をぶつぶつ呟きながら表通りにまでやってきて、携帯の受信BOXを開いて待ち合わせ時刻を確認して、現在の時刻もチェック。現在、二時二十三分。

待ち合わせの時間は二時。というわけで、見事に遅刻している。あわわわ怒られるぜ、なんて焦ったって時間は戻ってこないからもう開き直ろう。だって、人間だもの、なんて言い訳をしながら。これぞまるでダメな男、略してマダオって、まだそこまで俺はおちぶれちゃいない。不幸を撒き散らす不況人間だとしても、待ち合わせの時間に平気で遅刻しちゃうような俺でも、うーん。…フォロースる言葉が見つからないなあ。あ、信号青になった。渡ろう。

俺は横断歩道を渡りながら思う。まあ、気にしないでいい。フォロースる言葉が無かるうが、仕方があるまい。

すべて世界はもう終焉を告げる手前までやってきていて、いつで

も俺を消し去る用意が出来ているから頭も重たいし、何かをする気力を湧かせる必要もあらず、ただただ絶望的に時が過ぎるのを待たばよくて、それまでの間に享樂的に過ごさせてくれるご褒美のLET、現実逃避の世界に浸っていけば良い。詩燐に任せていけば良い。何故ならば、本日の太陽はこんなにも眩しいのだからというところが理由になる。御覽、あの羽を広げている白い鳥は何て鳥だ、なんてことを知る必要はないんだ。ただただ、時間が過ぎていく中で俺が死ぬのをやめるまで生きている。それだけのことなんだ。つまりこれがメメント・モリ。違うか。まあいい、こんなことを考えていたって損はないが得もないってね。ほいほい。あ、到着。ぶろんずカ・フェの鐘をカランカラン と鳴らせばほら、店主が今日も陽気にコーヒーを作っている。ちょんまげのカツラ。笑いを誘わせる店主。やめてくれ。

「よお。元気が。コウイー、今入れてやるからな」

「ありがとう店主桜木」

店主桜木には細山が死んだことは伝えないまま、俺は正月用に模様変えをはじめたぶろんずカ・フェを見回すと、どうということでしょうか、門松がたくさんである。店内はそこまで広くないというのに、目の前に門松、向こう側に門松、門松がこれでもかこれでもかと湧いているのが、すごくジャングルみたい。とりあえず置いたよ門松、みたいな感じで通路を歩きづらい。気をつけないと門松を横倒しにしてしまうのが明らかだ、というわけで気をつけながら歩すが、二、三と門松を横倒しにしてしまい、「なんとはいいいのか…ごめんなさい店主桜木」と謝ると、店主桜木は一つの門松も倒すことなく通路を俺の約三倍のスピードで突き進み、そして俺の肩をポンと叩き、ちょんまげが乗っている頭のままの顔面が近い。そして、

「大丈夫だよ。気を落とすな。ほら、コウイー」

驚いた。コウイーを持ち運びながらあのスピードで俺の目の前まで到達している上に、コーヒーは一滴も零れていないではないか。

これでちょんまげが無かったら完璧な店主桜木だったが、ちょんまげが彼のかつこよさのどこかに滑稽さを加えている。かつこ滑稽と言つと新語になるが、語呂が良くないだろうか。

「今回のコウイーが最高の出来だ。日々、おいしくなり続けていくというね」

嬉しそうに、子どもが無邪気に微笑むように、満面の微笑みを湛えてから店主桜木はカウンターに戻っていった。俺はお行儀が悪く立ったままコーヒーを啜り、そして先日細山が座っていたあの座席に、腰を下ろした。今日はまだ誰もここには来ていない。柴崎はまた遅刻のようだ。といつても俺も遅刻して訪れたのだが。

「ふう」

一息をつく。そしてその後聞こえてきたのはサソリ座の女。美川憲一。演歌かどうかは知らないが、流れている。店主桜木はカウンター内で、聞き惚れているのだろうか、ちょんまげを、犬が尻尾をくゆらすかのように、揺らしている。

微笑ましい店主だよな、とか思いながら一人、コーヒーを啜る。暖かい液体が食道を伝って胃に落ちるのがわかる。そして、一人でコーヒーを啜ることなんて久しぶり、というか、初めてかもしれないと気が付く。大概、誰かが先に座席に座っていたものだった。そしてそれは、先に座っていたのは、いい加減な風貌だったくせに、必ず細山だった。彼は遅刻というものを一度もしたことが無い時間には几帳面な男だった。

一人で啜るコーヒーは落ち着きもするが、少し心細くもある。細山はいつもこんな気持ちになりながらコーヒーを啜っていたのだろうか。なんか、そんなことを考えると急に細山が死んだことが実感として湧き上がってくるというか。死は時間を置いてから現実味を持ち出すのだ、と頭で言葉が走ったりするというか。

以前もこんなことを思っていた。その時は蔵山だ。そしてカフェで、細山とあいつについて語っていた。それであいつの死を実感していたような気がする。

もうだいぶ前の話だ。俺だって『点滅』を患っていなかったし、細山は生きていた。そして柴崎とも再開をしていなかったし、現実逃避だつてしていなかった。詩燐も、いなかった。何時の間にか時が過ぎていて、クリスマスが昨日、終わった。そして今日、柴崎にここに呼ばれた。

「何を話すつもりなんだろうかね…」

そんな風に呟きながらコーヒーをもう一口、うまい、と呟き、窓の外を何気なく見ると向こう側から歩いてくる全身真っ黒の服装の人が、やけに颯爽と歩いているのが格好いい。だが顔は、老人が死ぬ寸前のように青白い。って、これも以前に頭に走らせた言葉だ、というのは何でそういう風に同じ言葉が走ったかというところ、おとこの細山と同じような表情をしている女性が、その全身真っ黒の服装の人だったということだ。キャリアウーマンと言った雰囲気、スマートほどばしっている女性は、刑事の柴崎その人で間違いない。鈴がカランカラン、と鳴り響く音。入ってくる柴崎の、寒さのせいだろうかそれとも悩み事のせいだろうか青白い顔。店内の正月模様には戸惑いを見せてから、こちらにサツサツサツと歩いてきて速い。お互いが挨拶を交わす距離にまで近づくと、昨日眠れなかったのだろうか、彼女の目の下に隈が出来ているのがわかった。

そして来てそうそう、真顔で、

「谷口。私も明後日あたりには死んでるかも」

と言った。俺は、「ハッ？」と、引きつった。

彼女はもう一度言った。

「私も、死ぬの」

「ハッ？」

「聞こえなかったの？ 死ぬみたい」

真っ直ぐな球を投げた彼女は、大人になってからも容赦なく他人にまっすぐな言葉を投げつけているけれど、彼女はそれに対して申し訳ないと感じることはあるだろうか。知らないが、死死死つてそんな言葉何度も言われたら『点滅』したくなっちゃうじゃない

かつて思う。

美川憲一がサビに入ったので楽しそうに歌っている。…いい私は、さそり座の女…なんて、流れてくるリズムが俺の右耳に入り込んで左耳から抜けていく。

「これを見て」

「はっ？」

「はっ？ って、何よ。いいから、見てよ」

で、彼女は彼女自信の携帯電話をポケットから出してテーブルに置いた。俺は受け取り、「開けていいでしょ？」と問うと柴崎は頷いた。だから、目を開いてそして携帯電話の画面も開いた。用意のいいことだ、もう液晶には画像が表示されている。

「死を想えって。警句か何かのつもりなのかしらね」

柴崎が青白い顔のまま、窓の外に目をやっている。彼女の意志の強そうな「へ」の字眉毛はいつも通りだが、パツチリしていて目力のある瞳は、どこか遠くへ飛んでいる。

「細山から、メールが来て、その後その映像が携帯に送られてきたの。彼の場合はテレビに映ったのに私には携帯に直接送られてきた。受信BOXを見てもらえば、わかると思うけど…」

言われた通り、受信BOXを開いてみると、一番上の欄に『細山』の文字。そして次の欄に、『蔵山』の文字。

「はっ？」

俺は意味がわからなかった。だけど柴崎も意を得ていないということだろう、少しだけ辛辣そうに表情をギュツとレモンが絞られるみたいな感じにするだけで、何も答えはしない。答えが無いならば聞く他ない。俺は受信BOX、まずは『細山』からのメールの内容を開き、そして映像を見た。おおむね、内容は麗香氏の時と同じ。十字架に縛られているのが細山で、そしてその顔がゾンビのようにあられもないものになっているのも麗香氏の時と同じ。壁に血で、メモント・モリと書かれていることも、麗香氏の時と同じ。これはホラー映画かつつうの、って突っ込みを入れなくなるような展開は、

現実だけでも明らかに現実じゃないでしょう、こんな展開は、と言いたくなること当然の展開。だけど、柴崎はもう震えてしまっている。そんな彼女を一瞥してから、続いて、『蔵山』と書かかれている、明らかに死者からのメールと言えるそれを開く。そして、ああ、文章だ。文章がそこには書かれている。

『地獄へと招待をして候。何某が何が死体と発狂して我らを痛め付けている。ああ、激痛。見ているかい谷口。もう麗香も細山もこちらの住人として死肉をちぎられてはまた繋がられている。可哀想なことをされているんだ。あなたは幸運だね。逃げ惑い無茶苦茶をやつて喜んでいいる。まだその世界で遊ぶ気なら、どうかやめて欲しいことが一つだけあると案内人に告げてくれ。どうか私たちを貪ることはやめてくれと伝えてくれ。激痛を与えるのをやめてくれと伝えてくれ。毎日痛いのだ。痛みが激しいのだ。起き上がるしかない私たちに噛み付く案内人に、どうか、やめてくれと伝えてくれ。それが地獄から呼び起こされる私たちからの願いだ。それが叶わぬならまた一人地獄へと招待したいと感じる。痛いのだ、激痛だ。この気持ちかわかるかい。わからないなら君を招待するために、十字架へとはりつける準備をしておくよ。簡単なんだ引き寄せるのは。生の匂いがする方向に釘とトンカチを持っていけばいいだけなんだ…。死の匂いを放つ死人に引き寄せられて生がトンカチと釘に魅せられてくれる。麗香も細山も魅せられて自ら、地獄へと落ちていったよ。谷口、だけど彼らは君の生の匂いにひきつけられて起き上がらなくちゃいけないんだ。君が無茶苦茶をやるからいけないんだ。そして、俺も肉をひきちぎられて痛い。どうか、案内人に告げてくれ。やめてくれと伝えてくれ。君の口から告げるんだ。どうか、ちぎらないでくれ…』

文面を見終わって、携帯の画面を慌てて閉じてテーブルに置いた。それから顔を上げると、柴崎が俺のことを睨みつけていた。そして彼女は、

「あんた、何かしてんの？ 地獄にいる人から恨まれるようなこと」

と俺に問いかけた。残り少ないコーヒをズズ、と一気に全部飲み干してから、俺はそれを否定した。

「どうやって地獄にいる奴に迷惑をかけるってんだよ。意味わかんねえよ。とりあえず、俺帰るわ」

座席から勢い良く立ち上がった俺に、柴崎は非難を投げつける。

「ちょっと、まだ話は終わってない！」

まっすぐな言葉をまっすぐに伝えてくる彼女の話を聞いていたらフェイド・アウトしてしまうので俺はさっさと彼女からは立ち去ろうと思った。だから門松を倒してしまうことも気にせず、来た時の三倍のスピードで俺は店内を後にした。

「知らねえよ！ 『点滅』してる奴はどうせ死ぬんだから相談とかしたって楽しくもなんともねえんだよ。話してどうすんの！ 意味ねえじゃん！ じゃ、またね」

俺の怒声に反応して、店主桜木のちゃんまげが、へな、と垂れた。彼は倒れている門松を眺めながら、

「ばいばい、門松。ばいばい、谷口」

と寂しそうに言った。

何だか怖かった。

どちらか

雪が降っていた。さっきまで太陽が出ていたのに、今や空は少し濁っている雲に覆いつくされていて氷の結晶を降らしている。コートを羽織っているのに全然暖かくなって、特に首元が寒い。マフラーをしてくればよかったのかもしれないが、まあ寒い分家に帰れば暖かい炬燵にありがたい気持ちを感じることもできるかもしれないですね、なんて考えながら冷えた手を暖めようと思って口近くに持っていた時に気が付きました、『点滅』してるやーん、つって。

のほほのほ不安が湧き出てきているんじゃないのお身体から。なんて呟きながら、信号が青になったので横断歩道を渡っている途中、向こう側で信号が青なのに歩き出さない女性が見えた。映えるのは真っ赤な傘を差しているから。横切る時に、真っ赤な傘で隠れているその女性の顔が見えないかなと他の人からばれない程度のチラ見そして俺は驚きまして、ほほほ怖いよっつって駆け出してしまいましたとさ。だつて真っ赤な傘に隠れていた顔は骸骨。のほほマジこええ、つって裏通り。

で、歩いている途中に高校生二人のチャリンコが前方から迫ってきてるんだけど、怖いものなのつて、車輪になんかトゲトゲが付いてそこに血液が付いているのが見えた。で、青年二人の顔を見たら、なんでかしら、二人ともお面を付けていて、片方の人は赤鬼の面、もう片方の人は青鬼の面だった。めっちゃ怖かったので、ひゃあ、とか言いながら開脚前転して自転車を回避してみせた。

ああ、こええ、つって『点滅』しながらまだ災難は続き、むっつりしている少年が金属バットを構えているのが向こうに見えたのだけれど、金属バットだと思っていたそれが良く見ると金属バットではなくてチェーンソーで、少年は腕が片方なかった。自分で切り落としてしまったのだろうか。

それもやっぱり怖かったので、何とかして避けたい。というわけ

で、胸でおまじないをしてから、「開け、ゴマ」と叫んだ。すると、少年はそれの何かが癢に触ったらしく、全力でこっちに向かつて駆け出してきた。チェーンソーの刃を回転させたままである。怖かったので、ひゃあ、と言いながら石ころを手当たり次第に少年に投げた。その内の一つが彼の眉間に当たった時に、さすが少年はまだ少年だから、脆くて、それだけで地面に倒れてしまった。俺はチェーンソーを少年が今後使うことのないように、何度もコンクリにチェーンソーをガツーン、ガツーンとぶつつけた。その結果、刃がぐにやぐにやになったので、俺は満足して、逃げ出した。

次に出会ったのは大学生っぽい服装の女の子。目覚まし時計を手に持っているが、それに導火線。ああ、なるほど、あの目覚まし時計が鳴り響いた時に導火線が点か、そして彼女の体が爆発するというわけだ、なんて冷静に眺めていたその時に、彼女の目覚まし時計が音を鳴らし、リリンリリンリリン、うるせー、とか思っていると導火線に火が点いた。彼女は導火線を自分自身で巻きつけているくせに自分でビビッていて、

「あつ、あつ、あつ」

と少し色っぽいような、恐怖の声音を喉から搾り出している。俺は助けようかと思つて駆け出したが、途中で大学生と思われる彼女は、

「来るなッ！ きたらあんたを殺すッ！」

と俺を脅した。彼女は何かを決意している様子だった。

導火線が彼女の心臓の位置まで燃え尽きた時、彼女は「うっ」と呻いた。

その次の瞬間に、爆発が生じて、彼女は死んだ。

俺は、跡形も無くなって、地面に黒い焦げ痕だけが残っている彼女の立っている位置を踏みしめないように注意をした。

そんなこんなで感じ。そういうことがあった。で、ようやく家に着いた。

六畳半を見渡してから、はあ、と疲れたからため息。『点滅』が

やばいことになっている。秒ごとに十回くらいは身体が点いたり消えたりしていると思う。ぼぼぼぼぼぼぼぼぼ、という感じで今にも消えてしまいそう。ひゃっひゃっひゃっ、って言いながら詩燐の姿を探すと、呑気に炬燵に座りながらお茶を啜っていやがる。ズ、ズ、と音を経ててお茶を啜り、そして激しく『点滅』をしている俺に向けて、

「どしたんです？ ひどく激しいですね」

と言った。呑気。

「お前、案内人か？」

靴を急いで脱ぎ、俺は冬の厳寒に剥き出しだった手を炬燵に突っ込んだ。足も同様。

俺はもう一度ため息を、はぁ、と付くと詩燐が何も答えないので、「答えるよ」

と問い詰める。炬燵越しに睨みあう。しかし詩燐はいつもの無表情のまま、お茶をズズ、と啜るだけで何も言わず、さらにむかつくことには、ハー、とか、お茶が上手かったのだろう、気持ち良さそうに吐息を吐いてみせた。

沈黙が数分。詩燐は、お茶を全部飲み切ってからようやく、口を開いた。

「死者から交信が来たのですね」

何かを悟っているような物言いだった。頭に熱がぐわつときた。

「やっぱり何か知ってるんだな。…お前、俺の心読めるんだから俺が何を聞きたいのかわかるだろ？ 教えろよ。お前は蔵山を貪っているのか？ 俺が現実逃避の世界に入ること、詩燐、何が起きているんだ？ 痛いって言うていた。そのことで蔵山は俺のことを恨んでいるのか？ それとも詩燐、お前が何かやってるのか？ 裏で何か仕組んでいるのか？ ていうかお前は何者なんだ。人間じゃないだろ。でも、人間にも近い姿をしてたりして。なんなんだよ」

俺の言葉が言い終わって沈黙。数秒…。

そして変貌。

詩燐が湛えたのは、目が笑っていない微笑。唇だけが半月円を描いているような、嘘つきの微笑み。ああ、嫌だ、と思いつながらも目を避けることは俺には出来なかった。詩燐のその表情に、俺は釘付けた。

そして次に、その半月円の唇からダラダラと血液が流れ出した。はじめは唇の端だけから零れていた。時間が経つにつれて、ごぼっ、ごぼっ、と蛇口が全開にされたかのように血液が詩燐から溢れ出てこぼれる。詩燐の目は見開いたままなのが怖い。ただただひたすらに、血液が流れる。いつもよだれだと思っていたそれが、普段よりも濃度を増して流れ落ちるのは、血液にしか見えなかった。

「カカカカカツカ、コオコココココ、コツチに、きてくださいあ」血液を流しているせい、言葉を出すのを難しそうにしている詩燐は、立ち上がり、百畳大広間ルームに繋がる扉へと向かった。俺も、詩燐の後に続くために、炬燵から抜け出た。

詩燐の後ろを付いていくと、まるでレッドカーペットの上を歩かされているみたいになる。裸足で歩くと、血液が熱を持っていて暖かいのがわかる。

こんなに血を出しているのに詩燐はふらついたりしない。そのことが不思議で仕方が無い。詩燐はどんどん百畳大広間ルームを突き進み、突き進み、突き進み、そして、風呂場へと続いている錆びているドアの前に立った。そして、俺のいる方に振り向いた。詩燐の口元は血まみれだ。

自分の意志で出したり出さなかったり出来るのだろうか、詩燐の口元から血液が流れるのが止まった。

そしてその後に、

「一つだけあなたに聞きたいことがあります」

と詩燐に聞かれたので、

「何？」

と返すと、

「あなたは自分自身が大切な人ですか？ それとも周囲の人が大切

な人間ですか？ どちらかを大切にしなさいと問われた時、本当の心の底は、どちらを優先しますか？」
と聞かれた。

何か重要な問いかけだというのが直感でわかるから、簡単に答えを出したくはないと思ったし、簡単に答えを出すことの出来る問題でないことも明白だと思えた。詩燐は本当の本当のという風に、そこを強調した。あなたにとっての真理はなんですか、と問いかけられているような気分だった。詩燐は今、無表情で俺のことを見ているが、その瞳は全てを見通すかのように透き通っていて、そして奥底が深い。詩燐に対して俺は答えをごまかすことは出来ないし、今こうやって思考していることでさえも詩燐はわかっってしまうのだから、嘘をついたりごまかすこともきつと出来ない。そう考えると実に詩燐がずるい奴だということが理解できる。何故ならば、この夕イミングで、こんなにも人の何か重要なことを問いかけてくるということは、ひどいことだからだ。真理を包み隠さず答えなさい、ということとはむごいことだと俺は思う。嘘もごまかしくもなく生きていく人間がいるわけではないのだから。だけどまあ、今、答えるというなら、俺は、答えてやる事が出来るよ。一つの答えを俺は答える事が出来る。

その答えはつまり、俺は、周囲の人間を優先する。

何故ならば、というのはわざわざ答える必要はないな？俺は、周囲の人間を大切にするよ、詩燐。答えが聞こえているだろう？それが俺にとつての今出せる真理だよ。わかるか詩燐。

「聞こえたか、詩燐？」

尋ねると、詩燐は、

「ハイ」

と答えてから、また、目を少しも笑わせないままに、唇を半月円に曲げる笑い方をした。そして血液を淀みなく流すことを再開した。だからだからだ。

「それは、ひきあしよ。LET'S れんいつとついの世あい、あ

らたに伝えらいころがありらす」

「……あんまり今は、気がすすまないんだけど」

蔵山のメールのことを思い出すと、LET'S現実逃避のことは控えたいと感じる。

だが、詩燐は扉をギイ、と開けて、風呂場に入っってしまった。赤色の絨緞をひきながら。

「……………」

しばらくその場で佇んでしまったが、やがて、若草色の湯気が風呂場の中から滲み出てくると、どうしても足がそこに吸い込まれそうになってしまう。蔵山のメールでの文面と、現実逃避の世界。その二つが、脳内で大きな存在となつてぶくぶく膨らんでいる。どちらが先に破裂するか、といった感じだと思えた。だけど、どちらかが破裂する前に、俺は詩燐によつて、風呂場に無理矢理ひきずりこまれた。あんなにも低体重な詩燐なのにその力は凄まじく、ほとんど抵抗することが出来ないまま、風呂場の中に引きずり込まれた。若草色の湯気がすごく濃密に出ていて、ああ、ぐらぐら、ふわふわ心地良い。

耳を澄ましてごらん。遠くから聞こえてくるのはこれは何ていう名前の鳥のさえずりだろう、うふふ、知らないのかい、あれは白鳥だよ。え、白鳥って鳴くんですか、だって？馬鹿言っちゃいけないよ、今はそういうことが問題じゃないんだ、耳を澄ますことで聞こえて来るこの声に安らぎを感じることにそのことだけがひたすらに問題なんだよ……。ああ、とつても最高！

鼻をくくんくんさせてごらん。柔らかい匂いだろう。これは何の匂いだが君は見たことがあるかい。え、匂いつて見えるんですか、だって？阿呆言っちゃいけないよ、これからは忘れてはいけないよ、今覚えるんだ。この匂いは青空の匂いなさ。或いは、遠く向こう側からやってくる雲の匂いを、知らず知らずの内に君や俺は鼻ですつているのだよ、うむむ！

目のフォーカスをギュッと引き締めてごらん。すごく視神経が締

まる感じがするだろう。なんでこういうことになるのか君は知っているかい。え、視神経がギョっとする感じなんてわからない、だって？間抜けなこと言うんじゃないよ、もっとギョっとしろよ、心地よいくらいに。そうすれば目の前に大樹が現れてくれるのさ。あの
大樹が俺たちの命そのものだったんだよ。立派なあれが、俺たちの
の全てを許してくれるから、これからは安心して眠っていいんだぜ。
やっほおう！

LET'S 現実逃避。

棺桶と砂浜

砂浜を歩く。海のざわめく音が定期的に鳴り響く中を、ズ、ズ、と自らの重みのせいで砂に沈み込んでしまう棺桶を後ろにして。たくさんの人に付き添われながら。

もうすぐ夜が明ける。暗闇としか捉えることの出来なかった黒が藍色に導かれて、朝へと姿を変えていく。夜と朝の境目。曖昧な境界線の時間を、私は棺桶をひきずりながら歩く。まだ先は長い。目的の場所までは、まだ時間がかかる。

彼の話。彼は、自宅の庭で草木の手入れをしている最中にスズメバチに刺されて心臓発作を起こし、死んでしまった。一人でその自宅に住んでいた彼だから、亡骸が発見された時には死後二日が経過していた。その間、彼は野に晒されたままだったが、二日目の朝、隣人に倒れているのを発見された。

不幸なことだ。そして今、棺桶に入れられた彼を、私は葬儀場まで運んでいる。

昔から、この世界でのしきたりで、友人が死んだ時には、その死んだ友人のために友人が棺桶を担ぎ葬儀場まで亡骸を運ぶということになっている。

だから私は、草木の手入れをしている途中にスズメバチに襲われ命を落とした彼の、亡骸を、運んでいる。

太陽が地平線から昇り、世界を明るく照らしあげる。次第に空気は熱を帯び私は疲れを感じ、額や腋から汗を掻く。友人の亡骸が熱さで腐ってしまう前に葬儀場へと辿り着きたい。だから私は歩を速める。周りの人たちが祈りながら一緒に歩いてくれるのを、ありがたく思いながら。

彼らはいつからそこにいるのだろう。友人の親族の人もいる。私がかかったことが無い人、もしくはまったく友人と関係の無かった人もいる。

昔からのしきたりで、友人を運ぶ友人を愛せよという物言いが、ある。だからみんな、一緒に歩いているのだ。私の隣を。棺桶を引きずっている私の、すぐ近くを。私が棺桶を運ぶことに疲れた時に慰めてくれるために近くにいてくれている。私があ、とため息をついたときに応援するために、近くにいてくれている。親族の人は彼が死んだことが悲しいのにも関わらず、私を応援してくれる。

今、海が騒がしく鳴りはじめた。もうすぐ昼が訪れるから。

昼の瞬間を告げる合図として、海が底からエメラルドに点滅するその時、私たちはその砂浜で立ち止まり、祈るようにして手を胸に置く。そして十分間、今日も、エメラルドに点滅する海がそこにあることに感謝をしてから、また先の道を行くのだ。葬儀場へと向かって。友人の棺桶を、担いで。

一緒に歩いてくれていた人の一人、全身真っ黒の服装の中だと首元のネックレスの十字架が実に目立って見える、なんていう井出立ちのシスターが、転んだ。

転んだシスターに他の誰も手を差し伸ばさない。だから仕方なく一度棺桶を運ぶのを中止し、彼女に手を差し出して、起き上がらせました。彼女は卵みみたいな輪郭の顔をしていて、その顔に砂がたくさんこびりついてしまっている。彼女は私に、

「ありがとうございます」

と述べてから、顔にこびりついている砂を必死な様子で払い落としていた。私は「気をつけてね」と述べてから棺桶を再び担ぎ、歩き出した。そのシスターも歩き出した。

それからまたしばらく歩いた。そろそろ疲れが出てきて、休憩をしようかな、と思っていた。そんな時に声を掛けられた。

「棺桶を担ぐことは疲れることでしょう。ですから、お話のお相手になって差し上げましょうか」

振り向くと、さっきのシスターだ。私は不思議に思う。

「お話すると、よけいに疲れてしまつかもしれない」

だがシスターは静かに微笑んでから、

「ですが、お話を楽しんでいる間は、棺桶の重みを忘れることもできましょう」

と言った。優しい微笑みだった。彼女の言うことは正しいような気がした。

「では、お願いします」

改まった私にもう一度柔らかな微笑みを浮かべたシスターは、「あそこを御覧ください」と言って一つの塔に指を差し出した。私はシスターが指を差した先にあったその塔に見覚えがあるような気がしたが、どこでみかけたのかは思い出せなかった。

「あの塔は…昔から、ありましたっけ？」

「ええ」

雲を突き抜けるほど高く天に伸びている塔。私は間違いないかあの天高く伸びている塔を知っている。だけれどそれを何処で見たのか、何時見たのか、ということを思い出すことは出来ない。

「天翔塔という名前がついている塔なのです。あそこには世界の冒険者たちがたくさんやってきて、今も戦いをしています。見たとおり、高い塔ですから、最上階にたどり着くには十分な用意が必要なのですが、その最上階には『夢のような悦楽』があるという話ですから、人が集まってくるのです」

「天翔塔。なるほど、名前の通り、高度がありますね」

「ご存知ではありませんか？」

「知りませんでしたね」

「…そうですね」

一瞬シスターの顔がぐくもったような気がした。

「どうかしました？」

「なにがです？」

「いや、いま、」

「なんです？」

ちくはぐな空気になってしまい、彼女はよけいに戸惑った表情になった。何言ってるんだらうこの人は、ってという感じが肌に突き刺

さる。

「なんでもありません」

とはぐらかした。棺桶が沈み込みそうになった。話なんかしているから、棺桶に対しての意識がおろそかになってしまい、結果、大切な棺桶が砂浜に沈んでしまいそうになるのだ。

「もう、お話はやめましょう。今は、棺桶のことだけを考えましょう。彼のことだけを、考えるのです」

海のざわつきが、騒音を増している。

シスター

彼の話。彼は昔から要領が良くて世慣れしている雰囲気を出して人懐っこい。ああ、天才だ、世渡りの天才だ、と周囲に感じさせる能力を持っている人物だった。そんな彼の友人である私は世の中に馴染むことが下手糞だという自覚を幼少の頃からしていて、いつでも世間を巨大な壁のように捉えていたが、おそらく彼にとっては世間とは遊び場であり快樂の城だったのではないだろうか。まるで世界が彼の欲望を満たすために存在しているかのような錯覚を私に覚えさせたほどに、彼は現実を楽しんでいた。そして、日々、順調にキャリアを積み重ねている人間だった。人間としてのキャリア、と言えばいいのだろうか。そんな彼を私は尊敬していた。そんな彼と友人であることを、私は感謝していた。もちろん。

だけど彼はもう死んでしまった。スズメバチに刺されて貴重な人材が世間から失われるだなんて、世界にとっての損失だ。友人である私が責任を持って、彼の亡骸を葬儀場にまで運ばなければならぬ。

なんつって脳裏で呟きながら、棺桶を引きずることもう何時間だろうか、いい加減に筋肉の一部が断裂してもおかしくないと思うのだが、案外力持ちな私、へたれることなく棺桶を運び続けている。コンクリは舗装があまり為されていないから、引き摺っている棺桶がガガガとうるさい音を鳴らす。裏側の色は上げてしまったりするのだから、このコンクリートの道を抜ければ葬儀場に到着するのだから、あとちょっと頑張るだけでいいのだ。

そして友人の死をみんなで弔ってから、ああ家に帰って安眠に落ちよう。すこしばかり今日は筋肉を使いすぎたので疲れてしまっているから。

そんなことを思っている時に、耳元で突然、

「彼は何よりも愛を知っていたんです」

と息を吹き込まれるようにして咳かれた。耳がこそばゆくて、思わずその場で飛び跳ねてしまいそうだった。女性が愛する相手に咳くような、甘ったるくて妖艶さを含んでいる声。少し気持ちがたるとなってしまうそうだったが、俺には棺桶を担ぐという使命があったので気持ちをやめさせるわけにはいかなかった。そして首を振り向かせると、さっきのシスターが微笑みを浮かべていた。で、さっきの微笑みとは種類の違う微笑みで、どうということかというところ、ちよつとこつちに敵意を含んでますみたいな、そういう微笑み方だったので少しびびる。

私は営業スマイルみたいなものを浮かべることで抵抗してみた。だけどシスターはその微笑みを浮かべたままなので、けっこうびびるになってきた。

「どうしたんですか。急に驚かさないでくださいよ」

頬が引きつらないように注意しながら問うと、シスターはわざわざ私の耳元に唇を近づけてから、さっきと同じことを言うのだった。「彼は、何よりも、愛を知っていたんです」

『愛して』

妖艶な息吹に身体を震わされながら、脳味噌にほどばしつたのは言葉で、頭の中で駆け巡って一瞬にして私の何かを破裂させる毒になりそうな気がした。考えないようにしようこのことは、と、自然と判断できて、私は彼女をシカトした。顔さえも、向けないように気をつけた。黙々と棺桶を運ぶことにした。

その間、視界の隅で彼女がこちらを見ているのが時折わかったが、なんとかその顔に振り向くことをしなかった。

そしてそれからしばらく歩いて、私たちは霧に包まれた。

一歩一歩、進めば進むほど霧は人間が景色を見ることを妨げ、眼球にこびりついたかのように離れない。一度停止してぐるぐると何回転もすれば前後不明になってしまうほどに、霧は濃くなり、やがて濃霧となった。

別に驚くことではなく、この濃霧はもうすぐ葬儀場に到着するこ

との証しだ。葬儀場を中心に円を描くようにしてこの一帯は霧に包まれている。『死者は濃霧の中で眠る』。この霧が生者の歩行を妨げ、死者に安息をもたらす。

これも昔から言われていることで、この世界での慣習のようなものだ。葬儀場は誰が作ったのかわからない聖地とされていて、過去、何百年何千年と連なってきた死者たちをその内部で眠らせている。世界でただ一つの葬儀場。

だから毎日、多くの人間がこの葬儀場に向かって棺桶を背負って歩いている。葬儀場から遥か遠くに住んでいる人間とさえど、死体を穏やかに眠らせるためにはこの葬儀場へと棺桶を背負っていかねばならないからだ。

そういつた光景がこの世界のいたるところで見受けられるので、人々は自分がいつか死ぬことを忘れない。毎日、棺桶が誰かに引き摺られているのを見ることが出来るから、人は死を忘れることがない。だから人々は死を常に覚悟して生きることが出来るから、いざ死ぬ時に死の恐れを感じなくなる。そして今ある生をしっかりと享受し、前に進んでいくことが出来る。

これが葬儀場が世界に一つしかない理由だ。死を人々に意識させるために、棺桶は普段の景色に常に映りこみ、生と死の境界線の人々に見せつける。棺桶の中にいるものが死、棺桶の外にいるものが生、という風に。

「………見えてきましたね」「………」
霧のせいだろう、シスターの声が反響して聞こえた。ようやく葬儀場に着いたのか、と辺りを見回すがまだ私の視界には葬儀場の影は無い。

「………見えるのですか」「………」
私の声も反響している。

目を擦った。周囲を見回した。まだ何も見えない。シスターに見えるものが自分には見えない。そのことが気持ち悪くて不快で、はやく葬儀場の影が見えてほしかった。棺桶をひきずる腕の筋肉も、

悲鳴を上げている。

だがそれから少しの時間が経つと、私にも見えた。霧に紛れてい
てぼやけているが、視界の下半分が藍色の陰りを持つ。それは葬儀
場の影に違いは無く、そこに向かって数歩進めば冷たい空気が漂っ
てくる。

「……見えましたか……」

シスターの反響する声には私は、「はい」と答え、そして、しばら
くそこに立ち尽くし、目の前に到着したというのにぼやけたままの
葬儀場を、目を凝らし見つめ精一杯にその景色を意識にとどめよう
と思う。といつても、目を凝らしてそこに見えるのは藍色の湖に浮
かぶ、真つ黒の棺桶。それだけのものなのだが。

だがやはり、霧に包まれている湖の目一杯いたるところに棺桶が
浮かび上がっている様というのはある種壯観で、霧に包まれている
せいで全貌の見えない湖だが、その至る所で棺桶が水面に浮かび上
がっているのだということを想像すると、死の重みとでも言うよう
な奴が胸を突く。

「……まるで陸地のようですよ……。この棺桶の上を歩く
などということは恐れ多いことですね……」

シスターは神妙な面持ちで、彼女も葬儀場を眺めている。という
か、私と一緒にここまで来てくれたみんなも、この景色に魅入られ
ている。皆、この景色を見たいがために来たようなものなのだろう。
この、死者が眠る霧立ち込めた湖を。

「……おお……」

中年の大工が感極まった様子で呟いている。彼の頬には痣があっ
てそれが目立つ。中年の大工はその痣を摩りながら、「おお」と感
極まっている。そして私も感極まっていた。このたかが湖にたくさ
んの棺桶が浮かび上がっている光景、に私は胸が動かされている。
感動して胸が熱くなるようなものとは違い、胸の内部、芯、あたり
がギュツと締め付けられるような動きが確かにあるのだ。

「……ああ……」

私も感極まっているので呟いた。それに続いて、他の多くの人も呟いていた。

「……………いい……………」
「……………ふう……………」
「……………やあ……………」

やがてどれ程の時間、みなでそこに佇んでいたかはわからない。時も忘れるほどの静寂を、胸奥でギユツと吟味した。濃霧を吸い込みながら死を見る眺め、生を自分が持っていることを確認する。穏やかな呼吸が流れる。棺桶は湖を埋めつくし、私たちの心を静まらせ、明日から私たちは前を進んでいく。生を生きていくことが出来るのだらう。

やがて誰かが、

「……………では、彼を……………」

と言った。それに次いでシスターが、

「……………私が足の側を持ちますので……………」
と述べて棺桶の片側を持った。「あなたが持たなくても」と私は言ったが、彼女は首を横に振った。「そうですか」だから私は棺桶の頭の方を持った。ずしり、と重みが腕にのしかかり、既に疲れ果てている筋肉には堪えるが、これで彼を吊うことが出来るのだ、と思えば耐えることは出来る。

だから精一杯の力で、シスターと共に、横並びになって棺桶を運ぶ。

「……………怖いですよね、これ……………」

シスターが言った。後一步で湖に浮かんでいる、誰が入ってるのかもわからない棺桶に足を置くことになる。

「……………起き上がったってゾンビになったりしてね……………」
「……………」

少し軽口を叩くと、シスターは、ふふ、とあまり面白くなさそうに笑っていた。その笑い声は反響しながら濃霧に吸い込まれていく。あまりつかみ所の無い彼女の不気味さは誰かを連想させられるが、

その誰かを私は思い出すことが出来ない。その感覚が頭をぼやけさせてきて気持ち悪いけれど、濃霧の中でぼやけさせている場合ではないと頭を振る。

そして私とシスターは、誰が入っているのかもわからぬ棺桶に足を着けて、湖の水面を、歩き始めた。慎重に、慎重に、足を滑らせて湖に落ちないように注意をしながら、彼が入っている棺桶を置くスペースを探す。湖の中に落ちる心配は、そこら中が棺桶尽くしてギチギチなのであまり無いが、やはり足場は不安定だ。足を滑らせて転んでしまえば、二人とも湖の中に落ちてしまっただろう。棺桶に衝撃が加わって中の彼に影響が出てしまえば問題だから、慎重に慎重に歩いていかなければならない。もちろん濃霧で視界が悪いことも、計算に入れて。

シスターは大丈夫だろうか、と彼女の顔を見てみると、なる程さすがに怖いのだろう湖の藍色と同じくらいに暗い顔をしていた。

だが藍色のように暗い顔をしているにも関わらず、彼女は途中、何度もこちらに話しかけてくる。思い出せない誰かに似ているような、似ていないような、そんな微笑みを湛えながら。

「さっきの天翔塔っていう塔。そこに住んでた時があるんですよ、私。でもある日そこから出て行かなければならなくなりまして。銃で穴ぼこだらけにされて、私は一度死んだのです……本当ですよ……？」

「死者が生者に纏いつきたくなるのって、生者が死者に惹きつけられるってことにもなるんですかね。どうなんですか。相思相愛なのか、それとも一方的なものなのか……」

「この棺桶に眠っている人の名前を覚えていますか。私は覚えているんですが、あなたはどうでしょう。覚えていてくれるのでしょうか……そりゃ覚えてますよね。友人、ですものね……」

「血を口から垂れ流している人がかっついていたでしょう？ その血液は、誰の血液なんでしょうね。知りたいと思いませんか」

ん？」「」「」「」

「……」「……」ああ。これ以上は私、我慢できないかもしれませ
ん。…いえ、身体の疲れの話ですよ。…運動をするのを怠っていた
ものですから…ふふ…祈りばかりで……」「」「」「」

一々、恐ろしい。棺桶をどこでもいいから置き去りにしたいと思
う。彼女の言葉を聞いてると何一つ意味が理解出来ないし、彼女
が異常な人物であることが鮮明にわかってくるばかりだ。何故、さ
つき棺桶を運ぶのを別の人にするように、強く主張しなかったのか
そのことを後悔する。

「……」「……」少し筋肉が限界のようです。ペースを上げましよ
う」「」「」「」

筋肉はまだ大丈夫だったが、私はこの役目を終えて彼女から離れ
ることを優先するべきだと感じる。というわけで、今までよりも随
分と必死にペースを探した。濃霧のせいで視界が利かない葬儀場
を、うわ、必死に駆け回った。シスターは目が笑っていない微笑を
浮かべたまま、私の必死な様子を眺めていた、ような、気がする。

で、右の方に首を向けていた時、ついに一つの棺桶が置けそうな
棺桶と棺桶が上手いことぶつりかり合うことによって少しの隙間を
作り出している箇所があるのを見つけて、歓喜。私は自分の感激を、
隠そうと思っただがにやけるのを押さえることが出来なかったので、
「……」「……」あそこ、窪みっばいところ、ありますよね？ あ
そこにしましょう！」「」「」「」

と意気揚々も隠すことをせず、シスターに発見を告げた。シスタ
ーはどんな表情をするのだろうと思ったが、何の変化も見せないま
ま目を笑わせない微笑をこちらに向けながら、こくり、と少し可愛
らしく、頷くのだった。その仕草は何かわざとらしい感じというか、
不自然な感じもあつたが、特に気にするほどのものでは無い。

とにかく。安堵だ。あまりこのシスターと一緒にいられるもので
はないようだ。何かこの女性は嫌な雰囲気を持っている。だけど、
これであるスペースに棺桶を置いて、戻ればこの人と話をする事

も無い。帰り道にはちよつと離れて歩けばいいのだ。別の人とお話でもしていれば、彼女も近づいてこないだろう。

そんなことを思いながら右にあつた窪みに接近、私はその窪みと担いでいる棺桶の大きさを比べてみた。そして、なんて運命的なんだろう、とまたもや私は歓喜した。なんつったって嵌つてる。ピッタリサイズつてやつで、ピッタリサイズと言つてもいい。完璧に棺桶は、その窪みに入り込むようだった。

「……………いや、ちょうどいいねこれ」
「……………ええ」

二人で息を合わせて、「……………せーの」
と、繰り返すこと何回だろうか。合図の度に、棺桶を傾けることなく、常に地面と水平になるよう下げていく。これは大切なことで、棺桶を水平に下げることが怠つた者は、世界からはみ出し者として扱われるようになる。

「……………せーの」

呼吸を合わせて合図をすること八回程度だろうか。棺桶は窪みにガチャ、というはまり込むような小気味良い音を鳴らしてもおかしくない程に、その窪みに綺麗に入った。彼が入っている棺桶は、この葬儀場にて、無限に広がるかのような棺桶陸地の、その一部となつたのである。

私は、今日、丸一日かかったが、遂に友人の入っている棺桶を運ぶという役割を果たしたのである。

「……………いやー、終わった終わった。いやー、ありがとう手伝ってくれて」

シスターにお礼を言う。以外なことに満面の微笑みで応えてくれた。

「……………たいしたことじゃありません。当然のことです」
「……………」

「……………いえ、立派なことです」
「……………」
棺桶を運ぶという役割をしつかり果たしたあなた

こそ、立派ですわ」「」「」「」

さつきまで不気味なことを言っていた人にしては気持ち良く褒めてくれる。と感心してから、私は帰路につこう、と思った。棺桶だらけの道だから少しでも油断すれば迷子になってしまうが、一つの方向にだけ直進してきたから、少し左に道を戻ってからまたまっすぐに戻れば、元の陸地には戻れるはずだから、大丈夫だ。とか思いながら歩き出そうとした。が、その時、「キヤア！」と耳に響く声え、と思った時にはシスターに飛び付かれていた。抱きつかれた、と表現してもいいかもしれないが、抱きついたという割には彼女が私に両腕を回して身体に取り付いたその一連の動きは、ほとんど突撃と言つていくくらいに全力だった。だから抱きつかれたというよりは、飛び付かれたのだが、とりあえず私はシスターに飛び付かれただとか抱きつかれただとかそんな言葉の違いはどっちでもよくて、言葉はどうでもよい。それより突然飛び付かれたことに対する衝撃ばかりが頭の中脳味噌の中でぐわんぐわん。うわうわ落ち着いてくれ、つて言いたかったが彼女はキヤアキヤア叫んでる。

「」「」「」「」どうしたのですか、どうしたのですか」「」「」「」

と慌てて尋ねると、帰つて来た答えは「何かに足を掴まれて引きずり込まれそうになったのです」「」「」「」ということだった。マジかよ、と思つてシスターがさつきまで立つていた所を見るが、棺桶が水面に浮かんでいるだけで、亡者の手だとか、幽霊だとか、そういうのは無かった。だから、私は心の中で（なんだこいつ、急に怪しくないか？）と彼女が急に飛びついて来た抱きついてきたのには、何か理由があるはずだ、或いは策略が何か……と思つたのだ。これまで散々怪しい言葉をシスターは言っていたから、その本性が遂に現れはじめたのではないかと…。

「」「」「」「」急に抱きついたりなんかしてご迷惑ですよね、ごめんなさいごめんなさい、私、本当にびっくりしちゃって…」「」「」

「……いえいえ。気にしないでちょんまげ」「……」
「……いえ。シスターとしてはしたくないことの上無し
でしたわ。私、昔からこういう所があつて、人に迷惑を掛けてしま
いますの……。以前にも……」

シスターが何かいろいろと話しかけてくるが、『いえいえ。気に
しないでちょんまげ』なんていう適当すぎる答えからも窺える通り、
私の頭の中はこの時、彼女が私にどんな策略を持ちかけているのだ
ろうか、ということを探るのに必死だった。彼女は今現在も、私の
目の前で昔話などを話しているが、その内容がちつとも理解できな
い。ああ、ああ、とかいう相づちしか打てない。

で、ああ、ああ、を二十回くらい言った頃だろうか。私は棺桶と
濃霧ばかりが連なっているこの葬儀場を眺め回した瞬間に、彼女が
何を狙っていたのか悟つたのだ。

(帰り道だ……！)

今さつき、飛び付かれたというか抱きつかれた、ので、ぐるぐる
回転してしまった。それによって生じてしまった問題、それは東西
南北の感覚がわからなくなってしまうたということだ！

今や頼れるのは野生の勘と、あと、目！しかし目に見える景色は
全て棺桶と濃霧！野生の勘によれば『真つ直ぐだ！』らしいのだが、
なんで真つ直ぐという勘が働いたのか自分自身でちつとも自信が持
てないからダメだ！自分で自信の持てない勘なんてこれはもはや勘
じゃない！わけわかんない混乱、じゃなかるうか。

「……謀つたな……」「……」
怒りがふつつ湧いてきて、その感情が言葉となつて口から湧き
出る。

「……はい？」「……」
すつとぼけたような返事をしてきたシスター。腹ただしい。立腹
する。そんな女に対して怒りの刃の鞘を納めることが出来るかと問
われたら、私は一瞬にしてNO！と答えてから全力で叫ぶのですよ、

このようにしてね！

「……………は、謀ったな〜ッ！」「……………」

さすがの濃霧も私の怒りの声は吸収しきることが出来ないようで、死者が眠る葬儀場の中を、生者である私の怒声がどこまでも響いていったのは、実に気まずいが、しかしこの女が私に謀ったのが悪いわけで、謀られなければ叫んだりはしなかったから死者は私を許して欲しい。

そんなことを思いながら彼女を睨みつけているが、策略が露呈してしまいかももうその策略は成功しているのだから、彼女は自らの正体を暴いても良さそうなものだが、おかし、彼女はすとぼけた表情である。「はあ、何言ってるんだコイツ」という反応が表情から出てる。おかし。だから私は、

「……………おかしくないっすか？」「……………」

と言うと、シスターはさらに「ははあ、何いつちゃってんだコイツ」だった。だから私は、彼女は策略など企んでおらず、さっきまでの思考は全て私の取り越し苦労でしかなくて本当に彼女は足を何かに掴まれたのだろうか、と思った。だから、私は彼女に聞いた。

「……………帰り道、覚えてたりしますよね？」「……………」

それを言われた彼女は、「え？」と不安そうな声音で言ってから、周囲を小動物のように慌しくキョロキョロと見回した。ハムスターみたいだった。そして少しの間を置いてから、「え、っと」と言うので私は耳に神経を集中させたよ。そして帰って来た答えが、

「……………はい。私、道については絶対に大丈夫な自信がありますよ。方角も、ほら、この方位磁石があるのでわかるんです」「……………」

だったのだ！彼女は真つ黒修道服の懐より、方位磁石を取り出して私に見せた！壊れている様子はなく、それさえあれば東西南北なんてへっちゃらぼんで理解可能なのが間違いないで迷子になる可能性なんてほぼ0%ですよと耳くそほじくりながら言えることが判明したので私は嬉しかった。

「……………よ、よかつたッ！！」

思わず叫んだ私に、彼女は冷たい視線を投げてきた。

「……………変な人ですね……」

と言われた。さっきまで電波極まりない台詞をたくさん吐いていたシスターに言われると妙に理不尽な気がして、ぐっ、となったが気にしないようにして。私たちは帰路につくことにして、先頭は彼女に任せて、歩き始めたというわけだ。

だが。それから数分後に、彼女は突然、私の視界からすっとななくなり、そしてそのまま消えてしまった。

一瞬のことだった。

だら

彼女がいなくなった場所には、藍色の窪みが。ここに彼女は落ちたのだと気が付き、私はしゃがみ込んで、わけもわからぬままに「おい！」と叫んだが、水の中に入り込んでしまった彼女が呼びかけに応えるわけはなかった。

何故気が付かなかったのだろうか。落とし穴であるかのように、一人がちよと落ちる程度の幅があるスペースがそこにあった。彼女はその窪みに気が付くことが出来ず、落つこちてしまったのだ。さっきまで隣にいたシスターの姿が、この窪みに入り込んでしまったのだ。棺桶の間を縫うようにして小さな窪みが一つ、水面をわずかにたゆませながら、あるだけだ。

普通の状態だったら、この窪みに気が付いて避けることをしただろう。雨の日に水溜りを避けるように。しかし、この葬儀場は濃霧に包まれている。恐ろしいほどに視界を奪うのだ。だからシスターは窪みに気が付くことが出来なかったのだ。

「……………どうすれば」「……………」
私の声が反響して、頭に繰り返し響く。『どうすれば』。わかるわけではない。

潜り込めんで助けに行けば、彼女の命を救うことは出来るかもしれない。もちろん、彼女が自力で上がってこれるならば問題はないが、上がってくる気配は一向に無い。もしかすると、落ちた拍子に頭を棺桶にぶつけてしまい気絶したのかもしれない。…だとするならば、助けにいかなければ、彼女は死んでしまう。

しばらく窪みを見つめた。意を決するまで、に数十秒間。だが、私は決心した。

窪みに向けて足から入り込むことを決意し、靴を脱いで靴下を脱いで裸足になり、水温を爪先で確認する。途端、全身に駆け巡る冷たい冷たい刺激。「うう」と思わず声が出るくらいの冷たさが全身

に巡るが、耐えられないことも無い。問題は藍色の水の中に入つて果たして視界が保てるのか、ということだったが、やってみなければそれはわからなかった。

そして私は、足、尻、腰、胸、首、頭……。頭が入る前に大きく息を吸い込んで、藍色の湖の中へと入り込んだのだった、が……。

「……………ふ、ああ！……………」

結果。私はすぐに湖から頭を出してしまった。息など少ししか持たないし、藍色の水の中で目を開けてみても満足な視界は得られず、あんなところで一人の人間を探すなどということは無謀だということがすぐにわかった。手探りだけはしたが、残念ながら、落ちたシスターらしきものに触れることはなかった。藍色の水の中でじたばたしていると死者が寄ってくるような不気味さがあつたから、結局それに対する恐怖もすさまじくて、そこに長らくいるのは無理だった。

探索を中止し水から全身を出した私は、寒さにガクガクと震えながら、何も出来ない無力感に襲われる。しばらく、ぼーっと、藍色の窪みを、シスターがどうにかして浮かんできてはくれないものかと思いつながら、見つめていた。だが、シスターは浮かんでこなかった。

代わりに浮かんできたものがあつた。それは、色だった。それも鮮血の色。真っ赤なそれが藍色を掻き分けて、混ざり合うことをせず水と油のように、底の方から浮かび上がってきたのだった。

シスターが何かに食われたのか、と思つた私は、腰を抜かしてしまい、寒さと恐怖、二つの理由で震えることになり、しばらくの間何も出来なかった。

一人だった。途端に、一人だ、というイメージが強まった。そして気が付いたのは、もう方位磁石も無いのだから陸地がどの方角なのかわからないということ。私は迷子になったのだと気付いた。

藍色の窪みは、やがて藍色を失くし、真っ赤となつていた。トマトジュースのようなとろみを持つているそれが、シスターの死を私

に伝えてくる。何が窪みの中にいたのかは、わからない。さつきその空間に自分も足を踏み入れていたのだ、と思い出して、薄気味悪かった。私が手足をあの中でジタバタさせていたとき、シスターはもつと奥の方で、何者かに殺されていたのだろうか、と。

ああ、と思う。申し訳ない、とも思う。だがそんなことを思いながら震えたところで、どうにもならない。シスターの血液が目の前にあるだけだ。

自分自身も寒さに震え、死者が眠る棺桶と晴れる気配などまるで無い濃霧に囲まれていては、おそらく私もこのまま死へと導かれるかもしれない。少なくとも、この場にいる生者は私だけで、この湖にいる他の者たちは全てが、死者だ。ならば手招きをされて地獄へと引つ張られるのは、不思議なことじゃない。むしろこの場では、生きていられることが奇跡だ。今すぐに、私は寒さにやられて死んでしまうだろう。いや、死ぬべきなのかもしれない。シスターも、死んでしまった。

濃霧の景色に佇むのは棺桶だけ、という光景は一切変化することはなく、無情なほどにここには死が詰まっている。この濃霧が視界をさえぎっているから気がつかないのかもしれないが、ここは死者の楽園だ。どこまでも、果てがないようにして、棺桶が陸地となつて、続いているのだから。

死者によって道が作られているところを、踏みつけて歩いた生者が死者に嫉まれて地獄に叩き落されることは、充分にあり得ることじゃないか…。

私は、もうどうしようもなかった。気力が身体中のどこからも湧いて来なかった。このままさっさと野垂れ死にたいと思った。生命力が果てていた。だから、呼吸をするのも苦しかった。呼吸をするということは何て違和感のあることだろう、とさえ思った。

そんなことを思いはじめると、本当に頭がぼんやりとしてきて、自分が今生きてるのかも死んでるのかもわからなくて、心臓の音だけが、ドクン、ドクン、とやかましかった。次第に、私は私が何な

のかよくわからなくなつてきて、ここに満ちている濃霧と私は同じ存在なのじゃないか、という風に思えてきた。

そして濃霧と一体化しながら、過去を私は思い出した。過去では私が真つ白な空間で一人佇んでいて、そこで何をしているのかと思つて目を凝らすと、頭を掻き毟っていた。

ガリガリ、ガリガリ。真つ白な空間で頭を掻き毟っている私は、目が血走っていて呼吸も荒く、座り込んでいてその場から立ち上がる気が無い様子に見える。そして頭を掻き毟るなどという痛々しいことだけを行っているのだった。

過去を見ている私は、その私を見ている内に、思い出すことがあつて例えば『点滅』を患つた時の気分のこととも思い出していて、その時の絶望感も今手に取るようにして思い出すことが出来る。そしてその時になつてようやく、蔵山の苦しみを理解できたようだった。それまでは理解どころか、理解しようとしてもしていなかったというのに。

蔵山は私に相談をすることがあつた。『生きてるつてのは素晴らしいことなんだな』と居酒屋でぼやいていた。そんな彼は『点滅』しながら涙をこぼしていた。だけど私はその蔵山の言葉に対して、何という言葉を返しただろうか。いや、何も返さなかつただろう。私は彼に言葉を伝えることに怯えて、彼が消えてしまつまで、まともな慰めの一つもかけることはできていなかった。それなのに心の中では、『生きてるのなんて辛いばかりだ。どうでもいいことだ』などのたまうことがあつた。

そして、過去の私は、自分をはじめ『点滅』をして絶望感に満たされた時になつてようやく、蔵山の言葉がどれだけに生を願望しているものだったのかを、知った。消える、ということは自分が自分として思考をすることさえも出来なくなることなのだ、ということとを死を想つて知つた時、私は自分が自分として思考を出来ることにさえ感激した。そして残り残されているわずかな生を愛しく思い、『生きてるのなんて辛いばかりだ。どうでもいいことだ』と心で呟

いていたかつての私を憎み、そして無邪気に人生をなんとなく過ごしている連中をさえ憎んだ。だけど仕方が無いことだった。生は所詮、死が訪れることを身を持って知った瞬間しか、本当の意味で身体に染み渡ることはないのだ。むしろ、突然死する人よりは、何ヶ月間の間生を実感して過ごすことのできることを考えれば、『点滅』を患った人間はある種幸運だ。死を意識させられることで、生も意識させられるからだ…。

トン…トン…

足音が遠くから聞こえた。なんだろう、と調べてあたりを見回すと、向こうから歩いてくる影があることを知った。影が近づき、人の姿となり、目の前まで来た。

誰なのかわかった時に、私は濃霧と一体化していた私を切り離して心を自由にさせた。鬱屈としていた今までの展開が現実逃避だったことを思い出し、あっ、と改めてシスターが死んだこともたいしたことじゃないと気が付いたのでHAPPYだ、と感じながら俺は詩燐に問うた。

「もういいや。帰っていいかな」

詩燐は満面の微笑みで、こう答えた。

「だめにきまつてるじゃん」

フェイド・アウト

真っ黒の向こう側……。アレは地平線だろうか、あそこから鮮血のような色彩をしている太陽が顔を出しているが、ここはなんなのだろうか、あれに照らされているはずの地面は明るさを持たず、ただただ真っ黒だ。ここは真っ黒な世界だ。湖を埋め尽くしていた棺桶もなければ、視界を覆っていた濃霧さえも無い。鮮血の太陽と、どこまでも続いていて地平線の向こう側まで見える、真っ黒な空間。太陽があるおかげで、かろうじて陸と空の違いがあるのだとわかる。あれさえ消えてしまったら、ただ単に真っ暗な世界が広がるだけになってしまっただろう。それはつまり、目を閉じて一切の光をさえぎった時の景色と同じようなものだ。

そんな中で、いや、俺は俺の、手だとか、足だとか、身体だとか、そういったものを自分の目でしっかりと見ることが出来る。真っ黒に染まっているわけでもなく、普段と同じような肌色をしているのを目で確認することが出来る。だから、俺は俺として生きているのだとわかるからよかった。

で、ここはどこなの、って話になってくるわけだけど、詩燐に「だめにきまつてるじゃん」と言われた瞬間意識がフェイド・アウトした。そして目が覚めたらこんな景色が見えるようになっていたというわけなのだが、ちよつと待て、今、俺は、自分で、フェイド・アウトした、と言ったが、何ゆえに自分自身でそんな不吉なことを言ってしまったのだろうか、もしかすると自分はフェイド・アウトしたのだろうか？ここは死後の世界なのだろうか。霏雨気的には死後の世界と言っても違和感の無い、奇妙な景色が広がっている空間ではあるが、ここが死後の世界なのだとしたらあまりにも寂しすぎる。真っ黒に鮮血の太陽の中で、俺の身体。こんな空間があったところではない。走ったり、歩いたり、考えたり、出来るの

はそりゃ悪くは無いが、それだけじゃあ、良くは無い。

「こちらを御覧下さい。地面の真っ黒いものを砕いて、パラパラと砂のように細かくすることも出来ますよ」

バスガイド、あるいはエレベーターガール、あるいはアナウンサーと言った所だろうか。俺の視界じゃないところからイントネーション、音量、に気を遣っている声が聞こえてきたのでくるくるその場で回転してみると、ぐるぐるぐるぐる回転しすぎるあまりに目が回った。うわあ、と思いながらぐらついてるけど、そんな中に白黒の混じっている服を着ている人間らしき影が見えてきた。

で、ぐらつきが治まってきた頃に、白黒の影をチエツクすると、なる程、影はやはり詩燐。白黒に見えた服はメイド服だった。

詩燐がメイド服姿で突っ立っていて、笑顔なのだが口から血をダラダラ垂れ流していて、猫を気取ったような可愛いポーズをしながら手より黒い砂を零している。メイド服は昨今の、萌えを狙う可愛い代物で、フリルが大量に付いたり等しいて派手だ。飽きたのだろうか、「もういいや」などと言って詩燐は砂を勢い付けてどっかに放り投げてから、猫のポーズも止めて、ただ単に突っ立ってます、みたいな姿勢になると、

「お気をつけください」

と俺に向かつて警告した。「なにを？」と尋ねるが、しばらく詩燐は返事をしない。

沈黙…。太陽が地平線を乗り越えて、さっきまではかまぼこのような形だったが、真ん丸の形になって見える。

「なにを？」

もう一度聞いた。すると、今度は詩燐、人差し指を突き立てて、地面を示した。

詩燐が示している先は真っ黒。漆黒。特に何かがあるわけではない。俺と詩燐は向かい合って立っているが、ちょうどその距離の真ん中あたりを示している。俺はその位置にまで近づいて、「気をつけるの？」と、変にうわずった声で聞いた。詩燐はも近づいてきて、

そして言った言葉は、囁くような小さな声。

「砕いてみてよ」

拳骨で地面を殴るジェスチャーをしてみせる詩燐。確認の意味を込めて、俺もそのジェスチャーをやり返してみても、そしてその後、さつき詩燐が示していた所に指を、出した。すると詩燐は頷いた。

地面を砕いて砂のようにすれば良いらしい。それで何を気をつけるのかは、わからない。

とりあえず俺は、腕に力を込める。そして、「ふっ」とか言っただけで拳を地面に振り下ろしたというわけだ。ガッ。砕けた。呆気ないので、拳は全然痛くなかった。サラサラと細かくなつた黒い地面は、黒い砂となつたのだ。それを掴み取って、手の平でサラサラとしている砂を弄ぶと気持ち良い。

「…で？」

だからどうしたんだ、と言いたくなつた。「もつと、気をつけてくださいよ」という返事をされた。俺は良く意を得ないままだったが、まあ、気をつけてみた。気をつけて地面に何か変化がないか、ということ調べた。で、わかつた。俺が砕いた真つ黒の中から、真つ青の色をした顔が浮かび上がってきた。で、俺はそれが誰の顔なのか、判別できた。見覚えがあつた。

細山だ。だが、細山にしては肌色が悪すぎるし、頬などもこけていてかなり痩せてしまっている顔だった。彼の顔は瞳孔が開いているのだろうか、目が恐ろしいほどに開いてしまっている。こけている頬に一匹、蛆虫がいた。

「顔だけです。首から下は…」

もったいぶつた言い方をした詩燐は、いつもの無表情に戻っていた。血がツーンと唇の端から流れている。

俺は細山の顔の下の位置、通常ならば身体などがあるのであろう位置を拳で殴りつけ砕いた。予想した通りの結果が、そこにあつた。首から下に身体は無い。細山は首だけで埋まっているのだった。

なんともいえない気分になりながら、細山の頬についている蛆虫

を取っ払って放り投げた。その時に、「気をつけなと言っているのに……」という詩燐の呟きが耳に入って、「何が？」と顔をそちらに向けたが、その瞬間に、全身が痺れるような激痛が走り、「うがぐあ」とかいう変な叫びが自然と洩れていた。で、痛みが走ったその元を見てみると、俺の右手の指が二本、無くなっている。血がだらだらと真つ黒な地面に垂れて染みになっていた。何が起こったのか、細山の顔を見ればわかる。彼の首が、埋まっていた真つ黒い地面から飛び出していて、俺の指を食いちぎったのだ。だから彼はむしゃむしゃとやっている。やがて何回かの咀嚼の後、細山が自らの口からペツと吐き出したのは俺のちぎられた指の、爪だった。青白い細山の顔は、目だけが血走っていて、尋常ではない。俺は、殺される、と思っ、それに怯え、腰を抜かしてしまった。「詩燐、助けてくれ！」と言っていた。

詩燐は、ははは、と面白いわ、っていう笑いを無表情のまましてから、「じゃあ、貪っていいの？」と俺に尋ねてくるから、そりゃ緊急事態だから、「頼むよ」などと叫んでいて、それに対する詩燐の返答が、「やっぱりあなたは、自分を優先するんですね」という皮肉混じりだった。「いや、そういうことじゃないだろ、この場合、細山はもう死んでるんだ。俺は生きてるんだ」と返すと、「細山さんは死んでるけど、こうやってあなたの指を引きちぎって食っているじゃないですか。死者がご飯を食べる必要がありますか？ 細山さんは生きているのとあまり変わりませんよ」と屁理屈みたいなことを言うので、「詩燐はどっちの味方？ 俺の味方でしょ？」と問うた。すると詩燐は、「まあそうですね、しかし人情というものも私は持っていますから」などと言うので、「わけがわからない。お前は人間じゃないんじゃないの」と尋ねた。で、「私はあなたの内側からの真理である愛です。つまり詩燐です。恥ずかしいこと言わせんな」と言ってきた。意味わかんなかった。何かが破綻するよくな気がした。「どうでもいいから、細山に食われたくない」と俺は返して、結果、詩燐は「イエッサー！」と元気良く、無表情のまま

ま駆け出して、細山の頭を両手で持ち上げて、躊躇も無しに、ガブリ、とその頭に噛み付き、やがて細山の頭部全てを平らげてしまったのだった。俺は細山の頭の一部が齧られてる度に、「うひゃあ」とか、「うわっ」とか、「おおろつろ」とか、「うっは」とかいりアクションを取っていたが、そんなことを言っている内に、何時の間にか全身を襲っていた痛みが失われていて、右手を見てみると、指が治っていた。そして細山は詩燐に全て、平らげられてしまつて、いなくなつた。

「食うがら食られらくあ」

全てを食い終わった詩燐は、口から恐ろしい量の血液を嘔吐しながら何か言っているがよく聞き取れない。

黒の地面が血に塗れ、俺たちの周囲の地面は赤ばかりとなつた。黒と赤のコントラストが激しい。黒ばかりだつたこの世界の中では、赤は目にまばゆい。

鮮血の太陽はもう遙か真上に昇っている。この地面の赤は、まるでその鮮血の太陽の影のようにも見えた。俺たちはまるで、太陽の影を浴びているかのようにだつた。

「あっ」

そう思っていた時に、蔵山の首が向こう側で浮かんでいるのが見えた。一つ、身体も無いのに宙に浮かんでいる彼の首は、細山と同じように青白く、そして、瞳孔が開いていた。蛆虫が付いているかは、ここからではわからなかつた。

詩燐も蔵山に気が付き、その後、俺に対して挑戦的な態度で「どうしようか?」と尋ねてきた。そして詩燐は、自らの腹の部分をする仕草をした。そして妙に可愛らしいポーズを取ってから、「私はお腹が減ってるよ」と言う。「蔵山も俺の指をちぎろうとするのか?」と尋ねると、「足かも知れませんし、首根っこの可能性だつてあるんじゃないかな。殺されることだつて、そりゃ、ありますよ。さつき私が、細山君を殺したようにね」と返事。「じゃあ、殺せつて?」「そうは言つてないよ」「言つてるようなものじゃん」「な

らそういつことじゃん」「はっ」「あなたが決めていいんだよ。食うか食われるかは、あなたが決めればいいじゃない」「さつきと現実に帰してくれればいい」「現実には帰しません」「なんで」「だって、あなたはもう」「ああ」「フェイド・アウトしたから」「え？」「してしまっただんですよ」「嘘付けよ」「嘘じゃないよ。ここはもう現実逃避の世界じゃないよ。だからさつき、ダメに決まってるじゃん、ってあなたに言ったんじゃない」「じゃあ、ここは死後の世界？」「そうだね」「そんな。誰にも別れの挨拶を告げてない」「消えてしまっただなもの。仕方がないです」「簡単に仕方がないですなんて、いうな」「それより、どうするんですか？　しかしどうにしろ、まだ身体もあるあなたです。首だけの蔵山さんは、あなたに身体があることを嫉み、身体を食べようとしますよ。ほら、今、あなたの後ろから立ち上がったシスターもそうです」「シスター？」言われたので振り返ると、なるほど、首だけで宙に浮かんでいる、さつきまで身体があったシスターが俺を睨んでいるのが見えて、ゆっくり、こちらに近づいてきている。青白い顔で、首元から血を流しながら。

そして俺が、『私』だった時は気が付かなかったが、近づいていくそのシスターの顔が誰なのか、今となっては思い出すことは出来て、やはりそれは麗香氏に間違いはなかった。蔵山と麗香、二人の首に挟まれてしまっている。二つの首は、俺に向かって瞳孔を開いたまま、死んだ魚のように光を吸い込まず、虚ろに近寄ってくる。さつきの細山が俺の指を食べたのと同じように、蔵山と麗香も、俺を食べようとするのだらう。食べられないためにはどうしたら良いかというと、詩燐に二人の首を食べてもらうほかない。だから俺は詩燐に願う。

「詩燐さん。私は食べられたくはありません。お願いします」

俺は結論を出す。すると詩燐は無表情のまま頷いてくれた。俺は安心した。だが、次の言葉を聞いた瞬間には心が震えてしまった。

「では、麗香さんの首はあなたが食べてください。私は、蔵山さん

の首を食べておきますから」

「え？」

「あなたが食べるのです。一人一首です。私だって、一気に二つの首を食べることは出来ません。あなたは食べられたくないのでしょう？ だったら食べてください。口を大きく開いて、このようにすれば、食べることが出来ます」

血まみれのメイド服を着ている詩燐は、蔵山の浮かんでいる首の背後に一瞬にして回りこみ、脳天からガブリ、それに噛み付いてみせた。ぐしゃ、という音の後に、むしゃむしゃ、という咀嚼の音。皮膚がちぎられ、髪の毛がちぎられ、脳味噌が露出してしまった蔵山の頭からは、血が情け容赦なくだらだら流れていて、蔵山の顔は青白かったのに紅潮した。そして目がぐるんと白眼を剥いていた。俺は、戦慄した。あのような行為を自分でしなければならぬということを、認められはしなかった。

「いやだ」

俺は言うが、詩燐はむしゃむしゃ血を弾き飛ばしながら、呆気なく、

「らめに決あってらしゃん」

と言う。本日二回目のために決まってるじゃん。頭で反響して言葉が踊る。

「いやだ」もう一度言うが、

「らめあって」とやはり拒否された。その後、今度は滑舌よく長文。「この行為がグロテスクに見えてダメなの？ だったら、いまやあなたのすぐ背後にまで迫っているそれに食べられればいいんじゃないですか。私は、本当は、あなたが食べられるのを見るのは嫌なんですけど、あなたが食べないならば、それは仕方が無いことです。私もあなたが食べられる光景を見ることを甘んじて受け入れます。食べるか食べられるかのことです。単純な仕組みとなっております。その先にあるのは無という名の漆黒の暗闇です。ここにある鮮血の太陽もあなたの身体が内側から放つ光も、私も、そして首たちも、

その漆黒の暗闇には存在していません。ただただ、虚無が広がっているだけのことです。それが、本来の、フェイド・アウトするということでしょう」

背後に振り返れば、確かにすぐ近くに首はあった。麗香はもう待ちきれないのか、口を大きく開けていて今にも俺を平らげてしまう気のようなだった。首元辺りを狙っているような気がした。犬歯が鋭い。あれに噛み付かれれば頸動脈辺りから血がズパーと出てしまうことが明白だった。だから、今すぐ立ち上がって背後に回り、詩燐が蔵山にやっっているような、世も末の行為を行わなければ、俺はどうやら殺されてしまうようだった。今この空間で俺が生きているのかどうかも怪しいが、どうやら身体を食われれば、今こうやって俺がしているような思考や、詩燐を見る視界も、奪われてしまうようだった。そしてそれを奪われないようにするためには、やはり、俺は俺の歯を使って、麗香の脳天に齧り付く他、手段がないようだった……？

いや、だが。

と、思いついた。

俺は立ち上がった。そして、詩燐に向かって指を示し、

「俺は、逃げる！ 食べられないように逃げる！ そして、自分自身がそんなグロテスクなことをしないために、逃げる！」

と全力で叫んだ。詩燐は、

「ハハハハハハハハハハ」

と面白そうに叫んだ。満面の笑顔だった。

その笑顔が俺を小馬鹿にしている感全開だったので、俺は腹が立ち、立腹し、こうなったらマジで逃げ切つてやるという決意の元、麗香の首から全力で、逃げ始めたのだった。詩燐が手を振って俺を見送る。そんな彼女は、蔵山の眼球を食べている途中だった。眼球というのはプチプチしているのだろうか。どんな味なのか。そんなことは考えたくない。あまりにも痛々しいその光景に舌打ちをしてから、俺は何の当ても無く、真っ黒の地面を蹴つて、地を走った。

ほんの少し走れば、すぐに詩燐の姿は見えなくなった。食べられている蔵山の顔半分も。しかし、シスターもとい麗香は、何時になっても消えず、俺と常に一定の距離を保ったまま、背後から近づいてくるのだった。何かおかしいのか、と思ってスピードを下げてみると首は俺の視界から大きく見えるようになったから、俺は慌ててスピードを元に戻した。首も、俺を追いかけているのだ。しかも俺と同じくらいのスピードを出すことが出来るというわけだ。麗香氏の長い黒髪は艶が良く左右に小気味良く揺れているが、逆にそれが不気味だ。真っ黒の景色の中で溶け込むことをしない彼女の黒髪は、太陽に照らされているわけでもないのに天使の輪を作っている。艶が相当良いのだ。

って、言っている場合ではなく息が切れてきた。乳酸も溜まってきた。このままだとやばい、とか思うが、向こうから迫ってくる麗香氏の顔はどんどん大きくなる。歯を剥き出しにしている、眼も真っ赤に充血している。腹が減っているのだろうか。腹、無いくせにだが、何か救世主だろうか。前方に、アレは何だろう、人影らしいものが見えた。それは赤い服を着ていて印象があまり良くないが、しかし俺を助けてくれるかもしれないので、その人影に向かって手を振った。すると、向こうも手を振り返してくれた。よかった、嬉しい、と思いながらスピードを上げてみると、どういうことでしょう、詩燐だった。白黒メイド服を真っ赤に染め上げてしまった詩燐にすぎなかった。何が救世主だド阿呆。

で、地面に真っ赤な血だまり。これがあるということとは、どういうことかと言えば、そういうことなのだろう。詩燐は相変わらず血液を嘔吐しまくっている。念の為、

「そういうこと？」

と尋ねると、

「惑星一周おめでとう！ ほら、太陽も歓迎しているよ！」

と言われたので、太陽を見ると、かまぼこみたいな形をしている太陽が、地平線から昇り上がってくる所だった。何時の間に太陽は

沈んでいたのかは知らないが、どうやら、太陽も一周したらしい。もう、一日が過ぎたということだ。っはや。

そして詩燐は、俺に絶望的なことを言うのだった。

「一日が過ぎたから、ほら、死者がまた地中から甦っておいでですよあ、なんて言いたいが、言えやしないYO！なんて発狂したくなつた俺は、あばと叫んだ。細山と蔵山の首が、俺を睨みつけていた。そこに麗香の首も並んで、三つの首が横並びになった。で、三つの首が呼吸を合わせて、

「谷口！ 腹減つた！」

と宣言してきたのは少し可愛らしかったが、眼が充血していて肌が青白くて蛆虫が何匹かウゾウゾしていて首元から血を流していて歯を剥きだしにしている、しかもその歯が歯垢だらけで末期色。なんて連中に可愛らしいことを言われても不気味なだけだ。そんな連中に対して詩燐は、

「気味が悪いヤツラですね。また私が二人分食べて差し上げるよ。だからあなたは、誰か残つた一つを食べてくれればそれでいいよ。それが一日が過ぎるまで走って逃げるか。それが、あなたが彼らに食べられるか」

俺は、もう、息が切れている。足だって運動不足だったからもう限界だ。走って一日をやり過ごすことは出来ない。逃げるという選択肢はもう残されていない。

もう、食べるか食べられるか。それしか道は残されていないようだった。

（そもそも俺はフェイド・アウトして死んだ人間なんだから？ それなのに何で、こんなにも辛い目に合わなくちゃいけないんだ……食べるのも食べられるのも、嫌だ）

そんなことを思つてやるせなくなつた。だから、虚脱してしまい、地面に膝をついて俯いた。そんな俺を眺めながら詩燐は、麗香さんの脳天にかぶりついている。彼女の充血している瞳がぐるんとなつ

ているのが、音でわかる。グシャ、ゴリゴリ、ガブリつつて。

そんな音を聞いているとよけいにやる気がなくなつた。そんな俺を見かねてか、詩燐は麗香さんを食べながら、こちらの方に近づいてきた。血をぼたぼた垂らしながら、一旦食べるのを中止した彼女は、俺に話しかけてくる。

「そんなに嫌ならば、気絶でもさせてあげましょうか」「いいんすか」「意気地なしには意気地なしに対するやり口というのはあるから」「意気地なしだつて。こんなの普通の人間には出来るもんじゃない」「まあ、そうかもしれないけど」「何か含んでいる言い方だな」「みつともないと思ひまして」「はっ。何を言つてんだよ。

俺がみつともない？」「そう見える」「馬鹿にすんなよ。お前が異常だよ。食べるな。貪るな」「だけど、これのおかげであなたは現実逃避も出来てたんですよ」「そうなの」「うん」「でも、だからつて俺が皆を貪ることには繋がらない。そういう理由にはならない」「

「そうですかね」「そりゃそうだろ」「じゃあいいや。とにかく、あなたは食べられるのも食べるのも嫌なんですから、気絶してればいいんです。そうすりゃ、食べられるのに気が付かないから」「

…」「なさけないですけど」「なさけなくはない」「じゃあ食べます？」「それは違う」「じゃあ食べられます？」「そんなのは無理だ」「じゃあ気絶します？ なさけないけど」「そのなさけないつてのやめてくんないかな」「だつてなさけないんですから」「んなことないだろ。結果的には食べられることに違いは無いんだから」

「だけどあなたが現実逃避をしている間、みなさんは私に食べられて苦しんできたのに、あなたは気絶しちゃうんですか？」「そんなの知らなかった」「そうですか」「だからなさけないつていうんだろ？ でもさ、それはさ、無茶苦茶じゃん」「わかりましたよ。じゃあ、気絶させるからね」「ああ」「いいんですね？」「ああ」「では、気絶させますよ」「おう」「では」

気絶も少しの痛みはあるだろうが、食べられるよりはマシだ、と思つて一息をついて安心した俺。はあ、と深呼吸。だが、その深呼吸

吸を五回くらいした時に、なんでだろう、激痛。激痛が走りました。俺はびっくりしてしまっただので、うぎゃあ、と深呼吸を中断して叫んで痛みが走ったその元を見ると、なんとということでしょう、詩燐が俺の足の指を引きちぎっているではありませんか。引きちぎって、むしゃむしゃやつとるではありませんか。何やってんだお前、マジふざけんじゃねえぞと叫びたかったが、「ふにやららふんにやらあ」とか言う言葉にしかならない。手の方の指を誰かに噛み付かれたから言葉がおかしくなったのだ。何すんねんお前、と思つて指を見ると、そこには細山の顔面。むしゃむしゃやつてる。ちぎられた指の切断面から皮膚がただれてしまっている。剥きだしになった指の内部にある、神経が空気に触れてひりひりあり得ない程痺れる。こんなに痛いものだなんて、と感想を頭にぼんやりさせた瞬間に、ふああ、大変だ、またどつかを噛み付かれたけどもどこを噛み付かれたのか上手く思考できない、と思つていると、右腕が何時の間にか無くなつていた。肩から持つていかれたらしい。そしてちぎられた俺の肩の断裂面、そこから、ちぎれたばかりだというのに蛆が湧いてきた。はやくねえええ？つて思つたが、太陽が向こう側に沈みはじめたのを見て、ああそうか、時が経つのが早いから蛆が湧くのも早いのか、と何故か知らないが納得してしまつた。とやつている内に、俺の右腕は蔵山に全部食べられてしまつて、その蔵山の首の断裂面から、足がによつと不気味に生えてきた。首から一本の足が生えてきた蔵山、マジで気持ち悪い。そのことに嘔吐したくなる思いを感じて、舌を出してしまつたのが今世紀最大の過ちだつた。その瞬間を待つていたのだろうか、細山が飛びついてきて、舌を噛み千切られた。「ふにやらがっげ」とか全力の叫びは、ちぎれた舌が丸まってしまったことにより気管がふさがれ、喉で止まつた。そして詩燐が俺の陰茎などの男にとって大切な部分に、標的をつけたのか、ニヤつと一度俺の顔を一瞥してから、「いい？」とか聞いてきた。満面の微笑だつた。許せるわけは無い。俺は必死に首を捻つたが、その首に誰かが噛み付いてきた。もう誰が俺の首に噛み付

いたとか、そんなことはどうでもいいしわかることもできない。そうこうしている内に、俺の股間は終わった。涙がぼろぼろぼろ痛みをのせいか流れ出て止まらない。身体が痙攣して、ピクピクとのた打ち回るが痛みはおさまるところか、神経が外の世界に対して剥きだしだから、動く度に神経がどこかと擦れるので、それにあわせて余計に身体はのたうち回る。俺はその時、だるまだった。もう、だるまだった。

そして最後に、身体と頭が、分離された。

俺は首だけになって、ここまで何で保っていたのか不思議だった意識が途絶えようとしているのだろうか、全てがぼやけてきていて、最後に詩燐が俺の陰茎を噛み千切っている様が見えたところで、全てが終わって、消えた。

川の流れるように

ぶろんずカ・フェ。眉毛が「へ」の字を描いている女性と、まだ二十代だろつか、若い雰囲気的青年が向かい合って座っている。その二人に店主桜木がコーヒーを運び、二人はそれを啜り、「うまい！」と評する。店主桜木は、「当たり前だよ。何年やってると思ってるの？」と得意気に述べてから、モヒカンをいじりながら、カウンタ―へと立ち去っていった。

それを苦笑交じりで見送ってから二人は、話を再開した。柴崎は、携帯電話の画面を青年に見せる。が、青年は半信半疑というような、疑い深い様子を絶やさない。

「いや。いたずらでしょ。こんなものあり得ませんよ」

彼は軽く笑い飛ばしたが、柴崎は真剣だ。

「笑えることじゃないのよ。ほら、この画像を見て」

「綺麗じゃないすか。お花畑？」

「でもおかしいのよ。ここに映っている女の人の、この、後ろに、小さく写っているでしょう？」

「よく見えない」

「そう。でも、次の画像にはこれが拡大されて写っているのよ」

「じゃあ見せてくれよ」

「びびってちびつたりしないよね」

「大丈夫ですよ。これでも気は強いんだ」

そういった青年は自信満々な様子で次の画像を見たが、彼の顔は固まった。そして、

「……柴崎先輩。ご愁傷さまです」

と言った。そう言われた彼女は苦笑しながら、『点滅』をした。

「最近、変な男が家に住み着いてるのよ。それで、そいつが私を現実逃避の世界に連れてってくれるの。だけど血をだらだら垂らしてて、それが気持ち悪いの。だからもう現実逃避はやめようと思って、

その男に出て行くように願ったのよ。そしたら、こつこつ画像が届くようになったの」

相手の青年は、「怖いっすね」とだけ述べて、そこから先は何も言わなかった。

『川の流れのようーにー』

曲が流れている。川の流れのように曲が流れている。柴崎は、

「次は私の番ねえ」

と力無くため息をついた。青年は、

「そんなに元気が無くちゃ、戦えませんよ」

と言った。柴崎は何も答えない。

沈黙した店内で流れる美空ひばりの川の流れのように。

その旋律に身を任せるかのように、彼女は自分の死が訪れるまでの時間を、おだやかに、想った。

昔からの友人の二人と見た『死を想え』という意味を表す言葉がやけに深い意味を持って心に響いてくるのを感じた、柴崎だった。

「はあ」

と、ため息。

川の流れのように(後書き)

感想が、欲しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2766p/>

Fade out

2010年12月13日13時55分発行